

上野遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第149集



2006

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



う　わ　の
上野遺跡

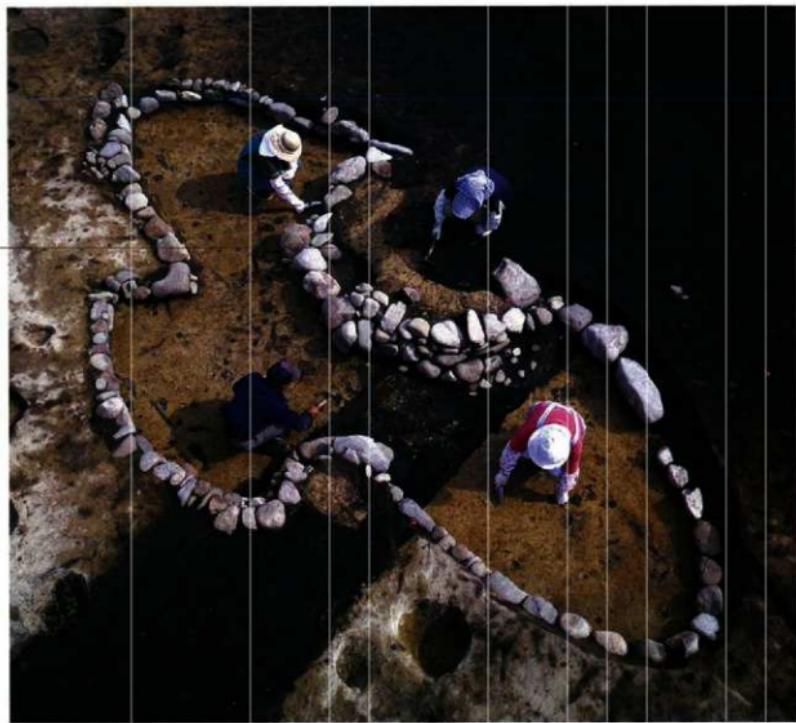
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第149集

平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

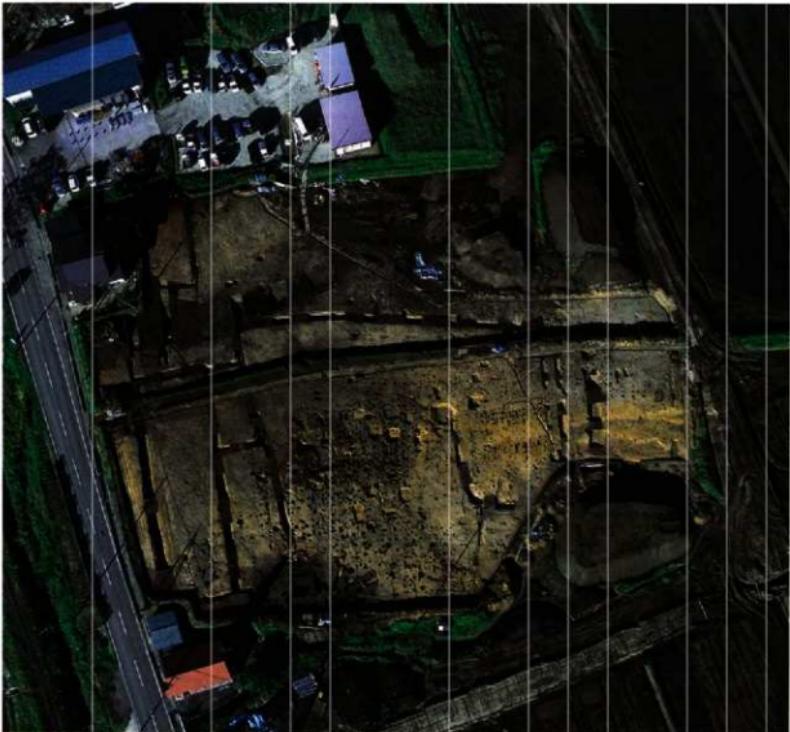




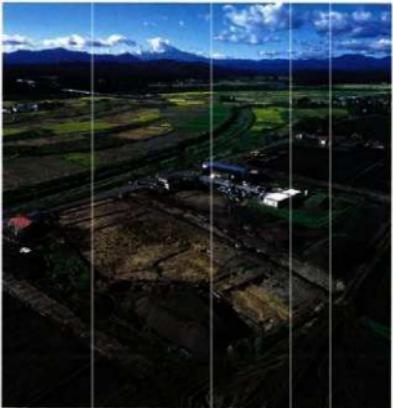
石組池 S G37 (北西から)



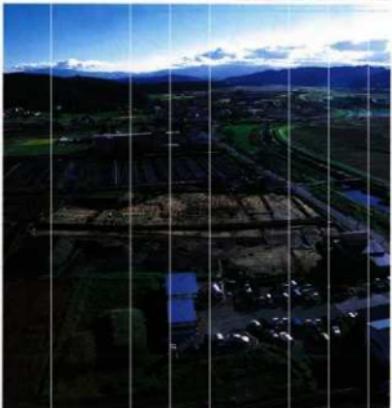
石組池 S G37 (南西から)



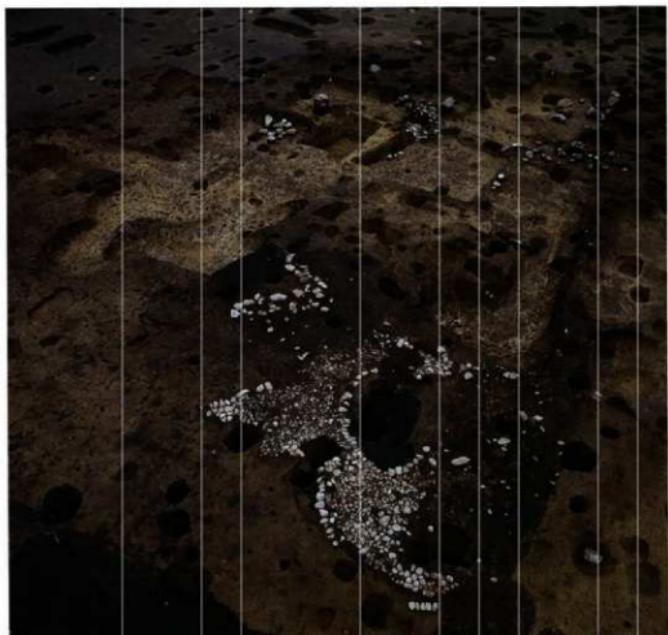
調査区全景（上が北東）



調査区遠景（南東から）



調査区遠景（北東から）



石數 S X141,
池 S G166
(西から)



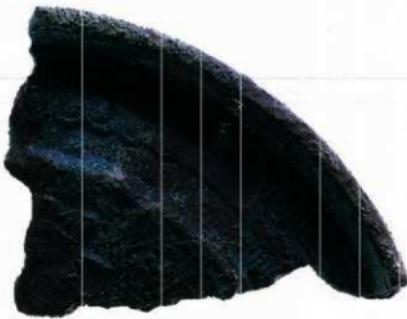
石數 S X141, 池 S G166 (上が北東)



石數 S X141 (北東から)



38
懸仏



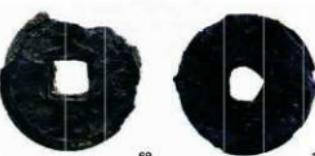
45
攝漢式鏡



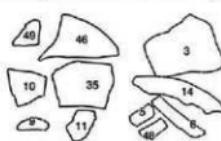
規(53)と水滴(57)



基石



左:天聖元寶
右:錢文不明



鉄製品(釘・鐵滓など)

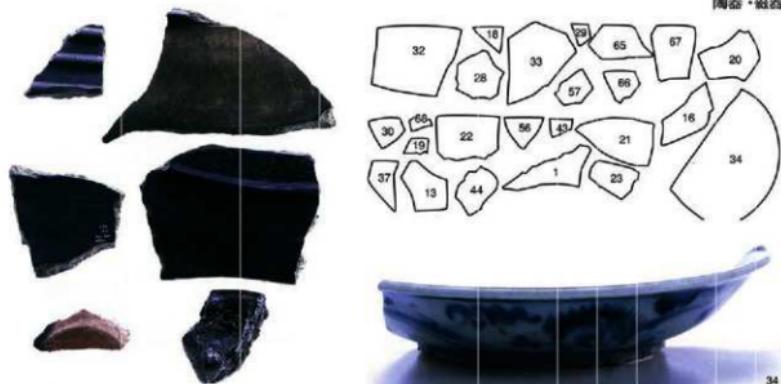


砥石 (5・48・6)、石臼 (14)、石鉢 (3)

漆器



陶器・磁器

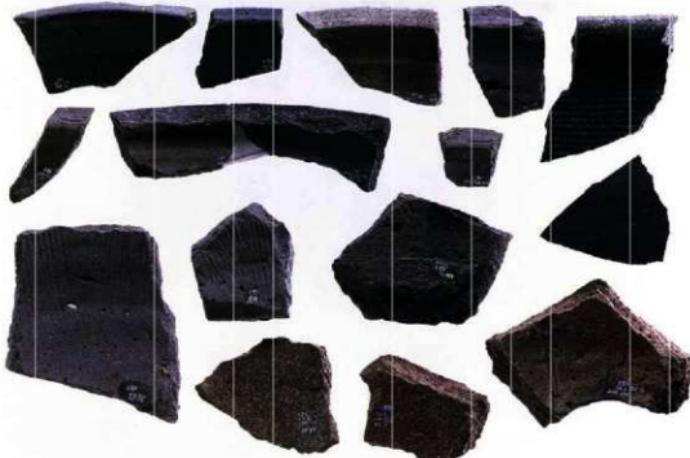
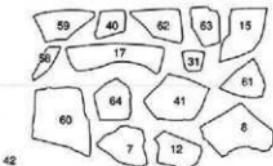
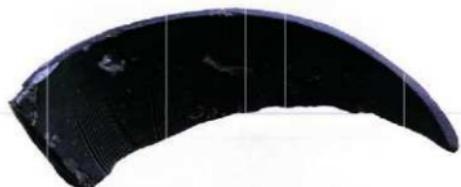


風炉 (49・46・10・35)、かわらけ (9)、取瓶 (11)

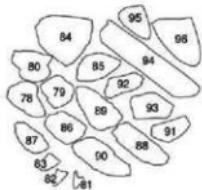
34

絵図

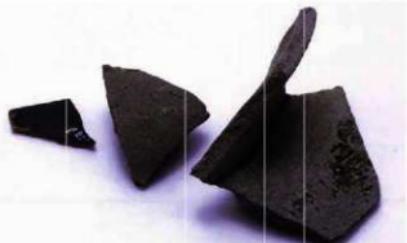
瓦質土器（擂鉢）



珠洲系陶器



近世の磁器（左から：73・72・2・74）



古代の土器（左：77, 中：76, 右：75）



縄文時代の遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上野遺跡の調査成果をまとめたものです。

上野遺跡は、山形県北部に位置する鮭川村に所在します。その中央を鮭川が南北に流れ、南西に月山、北西には鳥海山を望むことができます。また、鮭川村は「キノコ王国」とも呼ばれ、山形県のキノコ生産量の約半分を占めるほど栽培が盛んです。

このたび、県営ほ場整備事業鮭川左岸地区に伴い、工事に先立って上野遺跡の発掘調査を実地しました。

調査では中世の遺構として石組池、池、石敷、堀、掘立柱建物、竪穴建物などが検出されました。池や石敷は庭園の存在を示唆するものです。また、出土した遺物には硯、碁石、茶道具などもあり、優雅な暮らしぶりがうかがえます。遺跡の性格は武士の館と考えられますが、上野遺跡周辺には「金光寺」という地名も残っており寺院であった可能性も残ります。特筆すべき調査成果としては、館の敷地内をほぼ全て調査することができたことが挙げられます。当時の館の全容を知る上で貴重な調査事例となりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んだ貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた各位に心から感謝申し上げます。

平成 18 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 俊彦

本書は、県営は場整備事業鮎川左岸地区に係る「上野遺跡」の発掘調査報告書である。
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
出土遺物・調査記録類は、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	上野遺跡	
遺跡番号	平成 14 年度登録	
所在地	山形県最上郡鮎川村大字京塚字上野	
調査委託者	山形県	
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間	平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日 平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日	
現地調査	平成 16 年 8 月 18 日～10 月 13 日	
調査担当者		
平成 16 年度	調査第一課長	野尻 優 (県農林公共事業関係発掘調査担当)
	主任調査研究員	黒坂 雅人
	調査研究員	水戸部 秀樹 (調査主任)
	調査員	渋谷 純子
	調査員	鈴木 健太郎
	調査員	阪 英子
平成 17 年度	調査第一課長	野尻 優 (県農林公共事業関係発掘調査担当)
	主任調査研究員	須賀井 新人
	調査研究員	水戸部 秀樹 (調査主任)
	調査員	渋谷 純子
	調査員	阪 英子
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室	
調査協力	山形県総合支庁産業経済部農村整備課 最上教育事務所 鮎川村教育委員会 鮎川村農村整備課	

凡　　例

- 1 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章	水戸部 秀樹
第Ⅱ章	水戸部 秀樹、阪 英子
第Ⅲ章、第1・3節	渋谷 純子
第Ⅲ章、第2・4節	水戸部秀樹
第Ⅳ章	高桑 登、阪 英子
第Ⅴ章	水戸部 秀樹

2 遺構の写真は水戸部秀樹・渋谷純子・鈴木健太郎が、遺物の写真は水戸部秀樹・須賀明子が撮影した。

3 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは標高で表す。また、方位は座標北を表す。

4 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴建物	S B…掘立柱建物	S K…土坑・陥穴・貯蔵穴
S P…柱穴・ピット	S D…堀・溝	
S G…池・石組池・川	S X…石敷・性格不明遺構	

5 遺構・遺物実測図の縮尺、網点などの用法は各図に示した。

6 土層図の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

7 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

伊藤清郎、小林啓、佐々木浩一、鈴木健太郎、鈴木慎吾、田中哲雄、中村隼人、松井敏也、
横館真吾、吉田歎、米村祥央、八戸市教育委員会

8 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務	有限会社京葉技術
地形・遺構測量（縮微撮影）業務	日本特殊撮影株式会社
遺構写真実測・図版編集業務	株式会社セビアス
遺物実測業務（石器）	創和システム株式会社

目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の環境と概要	3
III 遺構	7
IV 遺物	15
V 総括	18

報告書抄録	卷末
遺構全体図	付図 1
遺構全体図（掘立柱建物）	付図 2

表

表 1 掘立柱建物諸元素	8	表 2 遺物観察表	16
--------------------	---	-----------------	----

図 版

第 1 図	調査区概要図	2	第 22 図	掘立柱建物, 6・7 類	33
第 2 図	上野道跡周辺の地形分類図	4	第 23 図	掘立柱迹, 7・8 類	34
第 3 図	道路位置図	6	第 24 図	柱穴 S P 13・18・26・27	35
第 4 図	第 1 ~ 4 期遺構配置変遷図	11	第 25 図	柱穴 S P 60・61・101・62・100	36
第 5 図	第 5 ~ 8 期遺構配置変遷図	12	第 26 図	柱穴 S P 103・108・115・117・128	36
第 6 図	第 9 ~ 12 期遺構配置変遷図	13		131・135・136・138・139・140・151	37
第 7 図	第 13 ~ 15 期遺構配置変遷図	14	第 27 図	柱穴 S P 122・124・63・123	38
	遺構実測図		第 28 図	堀・溝・池 S G 146 のセクションポイント配置	39
第 8 図	遺構実測図の割付	19	第 29 図	溝 S D 72・73, 堀 S D 12・43, 川 S G 49	40
第 9 図	遺構実測図 1	20	第 30 図	溝 S D 73, 堀 S D 3・43, 川 S G 49	40
第 10 図	遺構実測図 2	21		性格不明遺構 S X 53	41
第 11 図	遺構実測図 3	22	第 31 図	堀 S D 43・172・254	42
第 12 図	遺構実測図 4	23	第 32 図	堀 S D 3・4・11・12・48	43
第 13 図	遺構実測図 5	24	第 33 図	堀 S D 4・10・11・12, 埋没谷 S X 214	44
第 14 図	遺構実測図 6	25	第 34 図	堀 S D 3・10, 埋没谷 S X 214	45
第 15 図	遺構実測図 7	26	第 35 図	堀 S D 10・142・210, 埋没谷 S X 214	46
第 16 図	遺構実測図 8	27	第 36 図	堀 S D 126・127・171・172・180・212	47
第 17 図	掘立柱建物, 1 類	28	第 37 図	溝 S D 2・112, 池 S G 146	48
第 18 図	掘立柱建物, 1 類	29	第 38 図	溝 S D 2・93・86, 池 S G 165	49
第 19 図	掘立柱建物, 2 類	30	第 39 図	石組池 S G 37	50
第 20 図	掘立柱建物, 3・4 類	31			
第 21 図	掘立柱建物, 4・5 類	32			

第 40 図	石組池 S G 37	51	第 49 図	土坑（方形）S K 147・155・173・174・181・186, 拂 S D 187	60
第 41 図	池 S G 166 と石敷 S X 141, その周辺の遺構	52	第 50 図	土坑（方形）S K 189・196・209・215	61
第 42 図	土坑 S K 251・252・253, 石敷 S X 141, 溝 S D 194, 池 S G 166	53	第 51 図	土坑（円形）S K 8・85・91・104・105・ 130・204・206	62
第 43 図	池 S G 166, 溝 S D 201, 土坑 S K 213, 竪穴建物 S T 205	54	第 52 図	土坑（円形）S K 162・163・203	63
第 44 図	池 S G 166, 竪穴建物 S T 199・200, 溝 S D 194, 土坑 S K 207	55	第 53 図	竪穴 S K 7・33・77・79・87・88・137	64
第 45 図	竪穴建物 S T 67・80・170, 柱穴 S P 150・179, 土坑 S K 120	56	第 54 図	竪穴 S K 89・144・169・197・198	65
第 46 図	竪穴建物 S T 81・113・129・156, 竪穴 S K 157	57		遺物実測図	
第 47 図	竪穴建物 S T 160・164・175・176, 石敷 S X 141, 竪穴 S K 159	58	第 55 図	塙・溝の出土遺物	66
第 48 図	土坑（方形）S K 30・31・36・78・92・106・107, ピット S P 32	59	第 56 図	池・石組池・竪穴建物の出土遺物	67
			第 57 図	土坑・柱穴の出土遺物	68
			第 58 図	遺物包含層, 表土, 出土地点不明, 近世・古代の土器	69
			第 59 図	縄文時代の遺物	70

写真図版

番頭写真

番頭写真 1	石組池 S G 37
番頭写真 2	調査区全景・遠景
番頭写真 3	石敷 S X 141, 池 S G 166
番頭写真 4	懸仏・振渕式鏡・碗と水滴・古錢・碁石・ 鉄製品
番頭写真 5	砾石・茶臼・石鉢・漆器・陶器・磁器・風炉・ かわらけ・取瓶・繪皿
番頭写真 6	瓦質土器・珠洲系陶器・近世の磁器・ 古代の土器・縄文時代の遺物
	写真図版
写真図版 1	調査区中央部・調査区南半部
写真図版 2	塙・溝・川・性格不明遺構
写真図版 3	塙・川

写真図版 4

写真図版 4	塙・埋没谷
写真図版 5	塙・埋没谷
写真図版 6	塙
写真図版 7	溝・池 S G 146
写真図版 8	石敷 S X 141, 池 S G 166 と周辺遺構
写真図版 9	石敷 S X 141, 池 S G 166 と周辺遺構
写真図版 10	石組池 S G 37
写真図版 11	竪穴建物
写真図版 12	竪穴建物
写真図版 13	土坑（方形）
写真図版 14	土坑（円形）, 竪穴
写真図版 15	竪穴
写真図版 16	掘立柱建物の柱穴



作業状況

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

^{上野遺跡}の発掘調査は、山形県による県営ほ場整備事業鮭川左岸地区に伴って行なわれた。<sup>ほ場整備事業
鮭川左岸地区</sup>平成14年に新規登録された遺跡であるが、周辺には「金光寺」という地名が残っており（豊里村編 1928）、出羽国分寺、あるいはこの地方の修驗の總寺が存在したとの説が出されたこともあった（鮭川村史編集委員会編 b 1986）。

ほ場整備事業に先立ち、平成14年10月に山形県教育委員会が実施した試掘調査では、地表下17～48cmから配石状遺構・溝・土坑・ピット性格不明遺構などの遺構が検出され、縄文土器・須恵器・石器・磁器・板状木製品などの遺物が出土した。よって、遺跡範囲内ではほ場整備事業記録による保存を行なう際には、発掘調査による記録保存が必要であると判断された（渋谷ほか 2004）。

上記の判断により、平成16年4月1日付で山形県知事と財團法人山形県埋蔵文化財センター理事長の間で委託契約書が交わされ、上野遺跡の発掘調査が行われることになった。

平成16年5月18日には、鮭川村中央公民館において、山形県教育委員会、ほ場整備事業を担当する最上総合支庁産業経済部農村整備課、鮭川村教育委員会、同農村整備課、財團法人山形県埋蔵文化財センターによる事前打ち合せ会を行い、調査期間、調査方法、事務所・駐車場設置場所、調査工程などの確認を行った。

なお、こののはほ場整備事業ではもう1カ所の遺跡が調査対象となっている。上野遺跡から北へ約600mに位置する小反遺跡^{さかん}である。調査は上野遺跡と同じ担当者が行なうため、先に小反遺跡を終了させてから、上野遺跡の調査に移行した。

2 調査の経緯

調査期間は、平成16年5月24日から同年10月15日までの予定だが、これは上野遺跡と小反遺跡の2遺跡の調査期間を併せたものである。先に調査を開始した小反遺跡の調査に並行して、上野遺跡の表土除去、遺構検出を行ったところ、地表面で無数の柱穴とそれらを取り囲む幾重もの堀跡が姿を現した。これらの調査を行うには相当の日数が必要だと判断されたため、小反遺跡の調査を急いで終了させ、上野遺跡の調査に移らなければならなかった。ところが、小反遺跡でも14棟の竪穴住居を検出、またその何れもが複式炉を有していたこともあり、記録作業などに遅れを生じた。結果、小反遺跡の調査は8月17日まで行われることとなった。本格的に上野遺跡の調査に取り掛かったのはその翌日からである。

当初、小反遺跡と上野遺跡は、発掘調査から報告書作成までを平成16年度内に行なう予定であったが、上述のとおり、両遺跡の規模・内容では同一年度内に整理作業を終了し、報告書を刊行することは困難な状況となった。そのため、平成16年7月12日に山形県最上総合支庁産業経済部農村整備課と対応を協議した。その結果、現地での調査は予定通り行うこととしたが、約80名の参加者整理作業を次年度に繰り越し、報告書刊行を平成17年度に行なうこととなった。

平成16年10月3日(日曜日)には現地にて調査説明会が開催され、約80名の参加があった。また報道機関による取材も数社あり、特に石組池SG37については全国に向けて配信された。

3 調査の方法

調査区の表土と旧表土は重機を用いて除去した。また、遺物の包含されていない黒色土についても同様である。

世界測地系グリッドの設定 調査区内に設置したグリッドの方角は平面直角座標系第X系(世界測地系)に沿う。グリッドの名称はハイフンによって繋げられた二組の数字(例: 390-550)で表した。グリッドの数値は座標の数値を省略したものを使っている。つまり、南北に増減するX軸の数値の下3桁と、東西に増減するY軸の下3桁の組みあわせでグリッドの位置が表されるようになっている。また、本来はX軸、Y軸ともマイナスの値であるが、ここでは自然数の値に置き換えて使用した。例えば、Xの値が“-130,390”、Yの値が“-51,550”を示す地点のグリッドならば、“390-550”と表されることになる。グリッドは2mおきに設置しているので、グリッドが移動するとその数値は“2”ずつ増減する。また、グリッド名が示す範囲は、X軸とY軸の交点の第一象限となる2m四方の4平方mである。

表土・旧表土を除去した後は、遺構検出・遺構調査・遺構断面図・遺構平面図の作成、遺構断面・遺構の完掘状況・遺物出土状況の写真撮影などの調査・記録作業を行なった。終盤ではラジオコントロールヘリコプターを用いた空中写真撮影を行なった。

遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構と層位とグリッドにより、遺構外から出土したものはグリッドと層位によった。



第1図 調査区概要図 (1:2,000)

II 遺跡の環境と概要

1 地理的環境

上野遺跡は山形県最上郡鮭川村大字京塙字上野に位置する。鮭川村立大豊小学校の北方約120m、県道35号線（主要地方道真室川・鮭川線）の東側である。調査区中心の経緯度は北緯38度49分47秒、東経140度14分29秒である。立地は鮭川左岸の段丘の末端部であるため、**遺跡の位置**遺跡西側の県道35号線を越えるとすぐに崖があり、低地へと至る。

鮭川村は、最上郡の中央部にあたる新庄盆地の西縁部に位置し、遺跡からは南西に月山、**鮭川村**北西に島海山を望むことができる。規模は東西20km、南北12km、総面積は122.3平方kmである。東部は新庄市、南部は戸沢村、北部は真室川町、西部は酒田市に接する。また、東側の奥羽山脈の支脈と西側の出羽丘陵によって挟まれる谷状の地形を示している。

遺跡の西側を流れる一級河川である鮭川は、鮭川村の中央部を南流した後、戸沢村津谷付近で最上川に合流する。鮭川本流は自由蛇行を繰り返し、左右に折れる複雑な形状を呈している。そのため、鮭川沿岸部は水害の常習地であり、集落はこれを避けるように両岸の段丘と、鮭川が曲流する個所の内側である中央部低地に形成されている。侵食されずに残った地塊には中世城館が残り、神社などが祀られている。

鮭川村は積雪寒冷地帯に属するため、春から夏にかけては多雨多湿であり、集中豪雨による災害が起こる場合もある。年間の積雪期は約5ヶ月と長く、積雪量も多い。このような厳しい気候のため、果樹栽培が難しい地域であり、鮭川本流域の肥沃な土地を利用した水耕、畑作が営まれている。中心となる地場産業はキノコ栽培であるが、他に山菜加工業やサケのふ化放流や養殖業などもある。

2 歴史的環境

上野遺跡が位置する京塙より出土したと伝えられている「金銅双鳳環把頭」がある。これは1941年11月15日付の『山形新聞』で始めて報道された。この把頭は6世紀中葉のもので、直径7.1cm、全長8.5cmの金銅製である。環の中央部には2羽の鳳凰が八双に首を交差させて、中央の玉を争い喰合う状態を透彫で表現されている。この把頭の出土地を捜す作業が行われるなか、付近で前方後円墳状の高まりが見つかり、1982年に鮭川村教育委員会により発掘調査が行われた（長沢1983）。

その高まりが見つかった薬師長嶺は、上野遺跡の東方に位置する標高約160mの丘陵の頂上に開けた東西約1km、南北約500mの平坦地のことである。高まりはその北西端に位置する。報告によれば、円墳部の直径は約8m、方墳部の長さは9mとされる。また埋葬施設、副葬品ともも発見されなかったため、前方後円墳としての確証は得られなかった。よって薬師長嶺と「金銅双鳳環把頭」との関連も確認されなかった。

その後、1984年から翌85年にかけて薬師長嶺一帯の調査が行われ、その結果が鮭川村史に

金銅双鳳環把頭

報告（鮎川村史編集委員会編 a 1986）されている。調査結果によると、前方後方墳形の墳墓が160基確認されている。地山を利用して盛り土が行われ、長軸方向は鳥海山・月山・葉山・神室山・甑岳のいずれかに向いており、山岳信仰との関係が考えられている。その分布は、鮎川流域を中心として新庄市・真室川・戸沢村にまで広がり、形状は、前方後方墳形のはかに方形塚、円形塚、長円形塚、積石塚などが報告されている。

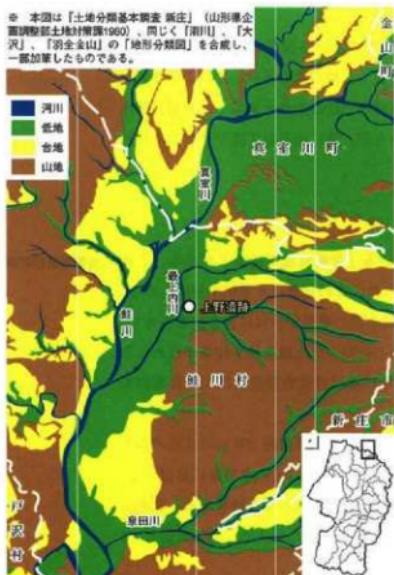
合併後鮎川村となる

「豊里村誌」（豊里村編 1928）には、古くから上野遺跡周辺を宇金光寺と呼び、寺跡・屋敷跡が残り、畦には岩梅が残ると記されている。付近の水田からは古瓦も出土したとしている。また金光寺の性格に関しては、二つの説が取り上げられている。一つは月山、鳥海山、鏡ヶ岳を靈山として、金光寺が三方を連絡する中央の懸所であり、本尊は薬師長嶽に祀られていたというものである。もう一つは、金光寺とは金光明四天王護國之寺のことであり、すなわち出羽国分寺であるという説である。高橋普寧氏も出羽国分寺の京塚所在説を唱えている（高橋 1931）。論拠として、『続日本後紀』や『続日本紀』に記述されている国分寺に関する地名などと、国分寺に付属するものとして、尼寺と金光明最勝王経一字一石經塚が鮎川村に存在することを挙げている。国分寺か否かは発掘すれば解決する問題であるが、中世の寺院であれば類例に乏しく判断が困難な場合が多い。これらを課題として調査に臨む必要があった。

南北朝の戦乱の中、山形県内でもそれぞれの勢力に分かれていたが、斯波兼頼の山形入部によって一気に南朝側の勢力は弱まる。兼頼は天文 11 年（1357 年）に山形城を築き、その子孫が、地名より最上を名乗り、山形各地に子弟・家臣を配置していた。その中で、最上氏勢力の北進の拠点として、天文 8 年（1476 年）に兼頼の末裔であり清水氏の祖となる満久が大蔵村大字清水に派遣され、この地を本拠地として最上郡南部を約 138 年間統治する。その後、藤田沢川と最上川との合流地点の丘陵に清水城を築城した。その東側には最上川が天然の要害として流れる。清水氏は清水四八館を形成し、その勢力を伸ばしていく。その館主の多くは、おそらく清水氏入部以前からの在地勢力であり、清水氏の勢力拡大によってその支配に組み入れられていったとされている（鮎川村史編集委員会編 a 1986）。清水氏が郡南部において勢力を伸ばす一方で、郡北部においては鮎延城を本拠地とした鮎延氏が勢力を伸ばしていた。

鮎延城は上野遺跡から北へ約 2 km の真室川町内に所在する。真室川左岸に位置する丘陵の中心に城郭が作られていた。城の平坦部は東西約 158 m、南北約 218 m の広さを占める。周囲には重層的な曲輪跡が見られ、天然の要害を活用した中世の典型的な城砦とされている（小川 2002）。鮎延氏に関する史料は最後の城主越前守秀綱に関するものがわずか

* 本図は「土地分類基本調査 新庄」（山形県企画調整部土地計画課 1960）、同じく「南川」、「大沢」、「羽全金山」の「地形分類図」を合成し、一部加筆したのである。



第2図 上野遺跡周辺の地形分類図（1:100,000）

に存在するのみであり、秀綱以前については皆無に近い。城を築いたのは23代佐々木貞綱とされるが、鮎延氏を名乗る以前の佐々木氏の最上郡進出については、有力な史料がなく確定されていない。鮎川村史では、佐々木氏が最上郡に進出した時期は大永年中（1521～27年）としている（鮎川村史編集委員会編 a 1986）がこれも定かではない。上野遺跡が廃絶した時期に近く、何らかの関係が存在した可能性がある。

上野遺跡が位置する京塙地域は、最上郡北部の鮎延氏、最上郡南部の清水氏、庄内の武藤氏の各勢力が手を伸ばし領を削った場所である。よってその勢力範囲は京塙地域を中心に拡大、あるいは縮小し、常に変動していたと言える。上野遺跡周辺では、京塙館（44）などは清水氏の支配に属し、庭月館（36）を中心八幡館（35）、小十郎館（37）、玄蕃館（38）などは鮎延氏の支配下に属していたとされる（山形県教育委員会 1997）。眺望の良い丘陵の突端やそのままに築かれた館は戦時に備えたものと考えられる。ほかに上野遺跡周辺では、その北西にオクミ館（26）、薬師長嶺にはミタケ館（39）なども知られているが、詳細は分かっていない。

最上郡北部には上記のように各勢力が混在していたが、天保9年（1811年）、北へ勢力を拡大していた山形の最上義光が鮎延城に攻め入り、城は陥落した。この戦において、鮎延秀綱は敗北したが、義光によりその武勇と知略が高く評価され、最上氏の重臣として取り立てられることとなった。その後は、長谷堂城における上杉勢との合戦などでも活躍したことが伝えられている。

上野遺跡がどのような勢力内に属していたのかは、既知の史料の中では明らかにされていない。この点の解明も重要な課題となる。

※遺跡名の後の括弧内の数字は「第3回 遺跡位置図」の番号に対応する

3 遺跡の概要

A 調査区の設定 調査区は山形県教育委員会の指示のとおりに設定したが、遺構の分布が東 7,000 平方 m 側へ広がることが確認されたため、面積を 5,000 平方 m から 7,000 平方 m に拡張した。調査前の現状は水田である。遺構検出を行った地表面の標高は 65 m 前後である。

検出された遺構のまとまり、分布からすれば、おそらく調査区外までは遺構は続かないものと判断される。つまりこの調査区内に現存する上野遺跡の全容が収まるものと考えられる。調査区西側の県道 35 号線部分も本来は遺跡範囲であったと考えられるが、その敷設の際にすでに失われている。また、調査区全体が耕地整理の際に削平を受けている。

B 基本層序 調査区壁土層図は、第31図 S D 43・172 の断面図、および第34図 S D 3 断面図、S D 10, S X 214 断面図に示した。それぞれの土層図のセクションポイントの位置は第28図を参照されたい。遺跡の層序は、上から表土、旧表土、地山の順である。一部には遺物包含層も認められたが、出土する遺物はわずかであった。遺構検出面は、黄色系シルト、黄色系粘質 地 山 土などの地山として扱った層の直上とした。

第34図 S D 10, S X 214 断面図には調査区南端部に見られる埋没谷が図化されている。その範囲は堀 S D 10 以降に広がっているものの、遺物の出土はなく、早い段階で埋没したものと考えられる。さらに南側の調査区外となる水田の標高は、調査区より約 2 m 低い。調査区より南側へ下る傾斜面を削平して造成した水田であろう。

調査区内的地形は、基本的に北東から南西に緩やかに傾斜している。最も標高が高い地点は

調査区中央部であり、建物が最も集中する地点でもある。南側へも傾斜しているため、調査区付近は眺望も利く一方、周辺からも目立つ位置と言える。

C 遺構と遺物の分布 繩文時代に属する遺構は、階穴 15 基、中世・近世では堀 17 条、池 3 基、石組池 1 基、石敷 1 基、掘立柱建物 78 棟、竪穴建物 14 棟、溝、土坑などが検出された。その多くは遺物の出土数から見ても中世のものと考えられる。遺構の密度は非常に高く、調査区内は無数の柱穴などで埋め尽くされた状態であった。

掘立柱建物は 78 棟としたが、この中に含まれなかった柱穴も非常に多い。本来は、さらに多くの掘立柱建物、掘立柱列が存在していたと推察される。

出土した遺物は、全部で 15 箱である。数は少ないうが、懸仏、鏡、硯、碁石、漆器、釘、陶磁器などさまざまな種類の遺物が認められた。当時の暮らしぶりが垣間見える資料である。



第3図 遺跡位置図 (1:100,000)

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	上野	縄文・中世	集落跡	27	蛙塚城	城跡	53	鶴原坂	縄文	散布地	
2	小反	縄文	集落跡	28	岩下・後野	縄文	集落跡	54	鶴田野	縄文・平安	集落跡
3	長野	縄文	集落跡	29	若下	縄文	集落跡	55	大上道	縄文	集落跡
4	川の内	縄文	集落跡	30	岩木野	縄文	集落跡	56	鶴田野 3	縄文	集落跡
5	平岡館	城跡	城跡	31	蓆田	縄文	集落跡	57	古河屋	縄文	散布地
6	鹿戸	縄文	集落跡	32	谷地	縄文	散布地	58	古河屋 2	縄文	散布地
7	上野	縄文	集落跡	33	石名坂	縄文	集落跡	59	鶴田野 2	縄文	散布地
8	中ノ瀬前	城跡	城跡	34	平坂山	縄文	散布地	60	鶴野	縄文	縄
9	滝ノ沢山	縄文(後期)	集落跡	35	八幡原	縄文	縄	61	平家庭	縄文	縄
10	秋山 B	旧石器・縄文	集落跡	36	庭月館	縄文	縄	62	川口廻	縄	縄
11	秋山 C	縄文	集落跡	37	小十郎塚	縄文	縄	63	中臺山	縄文(早期)	散布地
12	秋山 A	縄文	集落跡	38	亥養原	縄文	縄	64	泉ヶ丘	縄文(中期)	集落跡
13	宮沢	縄文	集落跡	39	ミタケ塚	縄文	縄	65	中谷地	縄文(早・中・晚期)	散布地
14	山神神社	縄文	集落跡	40	ミクラ原	縄文	縄	66	真室造	旧石器・縄文(早期)	散布地
15	糸田稻荷神社	縄文	集落跡	41	五枚田沢	縄文	散布地	67	八幡表	旧石器	散布地
16	新田平岡	縄文	集落跡	42	般音寺	縄文	集落跡	68	滝ノ井	旧石器・縄文(早・前期)	散布地
17	小林	旧石器・縄文	集落跡	43	延月觀音堂	縄文	集落跡	69	滝ノ倉前 A	縄文	散布地
18	糸田	縄文	集落跡	44	京塚然	縄文	縄	70	滝ノ倉前 B	縄文	散布地
19	塙野	縄文	集落跡	45	京塚	室町	縄塚	71	上新田 A	縄文(前期)	散布地
20	片杉野	縄文	散布地	46	セゴロ館	縄文	縄	72	上新田 B	縄文(前・晚期)	散布地
21	鶴の瀬	縄文(後期)	散布地	47	鶴野然	縄文	縄	73	山崎 D	旧石器(早・前・晚期)・縄文	散布地
22	蓮花城	縄文	集落跡	48	山の神	縄文・古墳	集落跡	74	山崎 C	旧石器	散布地
23	木の下	縄文(後期)	集落跡	49	向岩新瀬	縄文	集落跡	75	山崎 B	縄文(前期)	散布地
24	正源寺境内	縄文	集落跡	50	松原	縄文	集落跡	76	山崎 A	旧石器	散布地
25	神ヶ訛墳	律倉	集落跡	51	眞木	縄文	集落跡	77	下山崎 A	縄文	散布地
26	オクミ原	城跡	城跡	52	長者原敷	縄文	縄				

III 遺構

1 挖立柱建物

掘立柱建物は、78棟を確認した。主に堀に囲まれた区画内に集中して検出されており、調査区中央に集中域を持つ。柱穴の掘形は円形もしくは隅丸方形で、柱材は出土しなかった。柱痕は円形のものが大半を占めるが、方形のものも少數認められた。柱は掘形底面上で固定するものの、掘形を途中まで埋め戻した部分に固定するもの、掘形底面よりも部分的に深く掘り込んだ個所に固定するものなどがあり、掘形内で柱上部の高さを調整を行ったと考えられる。柱穴、柱痕の大きさは建物によって異なるが、建物規模の大小に対応する傾向が看取される。

大型の建物を中心に柱間寸法を見ると、5尺以下、10尺以上の場合も認められるが、主体となるのは6.5~8尺である。中でも、6.5尺が多用される。また、桁と梁では異なる寸法を使用する例が多い。梁行が2間までの場合は梁行の柱間寸法が長く、梁行が3間以上になると桁行の柱間寸法が長くなる傾向がある。なお、1尺の長さは、中世に使用された尺に近いとされる、明治度量衡法（1尺 = 10/33 m）によった。本遺跡は15世紀から16世紀前葉を中心としており、永正年間（1504~21年）に定められたとされる又四郎尺（1尺 = 約 30.258cm）などが使用された可能性もある。

検出した建物の規模は、桁行2間、梁行1間の小型のものから、桁行8間×梁行3間の大型のものまで見られる。これらを規模・構造・性格から8つに分類した。1類は各時期において主屋となる可能性が高い建物である。大型であり、間仕切り・庇を持ち、六間を含む部屋を2つ以上持つ。本遺跡の間仕切りを持つ建物の中で、最も大きい部屋は3間×2間の六間であり、これが二つ並ぶ形式の建物が最も高格であると考えられる。2類は大型で間仕切りを持つ建物であり、主屋に準ずる建物と考えられる。3類は大型の建物ではあるが間仕切りを持たず、梁間寸法が広い建物である。内部に広い空間を持つため、作業場などの用途が考えられる。4類は庇を持つ建物である。5類は、桁行3間以上、梁行2間、6類は、桁行2間、梁行2間、7類は、桁行3間以上、梁行1間、8類は、桁行2間、梁行1間の建物である。4類以降の小型の建物は、主屋を避け区画内の諸所に配される。これらの中には、ほぼ同位置に同分類の建物が繰り返し構築される例が多数認められた。同じ用途の建物が、同位置に繰り返し構築されたものと推察される。また、建物同士を区画する樁などは確認されなかった。

掘立柱建物とほかの遺構について配置の変遷（第4~7図）を試みた。変遷を考えるに当たっては、主屋と主屋に準じる大型建物に主眼を置き、建物の新旧関係を把握した上で、重複を避けながら各期に配置した。池・堀・溝など掘立柱建物の配置に影響を与えた遺構も変遷に含めた。堅穴建物については、配置する決め手に欠けるため変遷から除いた。この結果、建物配置の変遷は古い方から第1~15期に区分された。これらは主屋と考えられる大型建物の位置変遷から、大きく5段階にまとめられる。

第1段階は、主屋が調査区西側の堀SD12付近に配置される第1~4期である。それぞれ

第4~7図
第18図~27図

1尺の基準

表1 掘立柱建物諸元表

遺構配置変遷表

表1 据立柱建物諸元表

遺構名	分類	所處時期	グリッド	桁行	梁行	桁高 (m)	桁間 (尺)	梁高 (m)	梁間 (尺)	主軸方向 (北東に)	備考
SB301	6類	10・11・12・13	374・568	2	2	4.09	13.5	3.94	13 28' 50" 17"		
SB302	4類	10	366・590	3	2	5.45	18	4.39	14.5 22' 33" 40"	1面, SB309 → SB302	
SB303	5類	8・9・10・11・12	362・550	3	2	6.21	20.5	3.94	13 29' 10" 55"		
SB304	1類	2	378・558	4	2	7以上	21以上	4.85	16.5 22' 48" 36"	2面, 南側2面欠, SB304 → SB318・338	
SB305	1類	12・13	390・550	4	3	8.18	27	6.06	20 26' 51" 72"	3面, SB320 → SB305	
SB306	1類	13	372・540	8	3	16.06	53	7.27	24 27' 8" 13"	2面, 南側5面二重底, SB312・322・324・326・334・337・339・341・376 → SB306, SB306 → SB325・342	
SB307	1類	10・11	400・544	6	2	12.12	40	5.45	18 33' 45" 30"	2面, 東側3面欠, SB316・321・378 → SB307	
SB308	7類	8・9・10・11・12・13	368・536	3	1	5.91	19.5	4.55	15 30' 3" 58"		
SB309	4類	7・8	370・560	3	2	6.06	20.5	4.39	14.5 31' 19" 16"	1面, SB309 → SB302・328	
SB310	2類	11・12	376・552	3	2	6.06	20.5	5	16.5 18' 21" 7"	1面, SB311・334 → SB310	
SB311	2類	4	370・544	3	2	6.67	22	4.09	13.5 28' 12" 18"	2面, SB310に張り出し部, SB311 → SB310・337	
SB312	1類	12	370・534	4	3	8.48	26	5.91	19.5 33' 39" 43"	2面, SB340 → SB312, SB312 → SB306	
SB313	7類	15	380・532	3	1	5.61	18.5	2.58	8.5 31' 42" 55"		
SB314	2類	5	380・544	4	2	7.89	26	3.94	13 20' 12" 58"	2面, SB339 → SB314, SB314 → SB331・334・336	
SB315	8類	15	386・544	2	1	4.7	15.5	2.12	7 24' 6" 36"		
SB316	1類	8・9	398・542	4	3	9.09	30	5.45	18 33' 35" 31"	2面, SB316 → SB307	
SB317	5類	1・2	392・550	3	2	6.36	21	4.09	13.5 27' 19" 52"	SB317 → SB320	
SB318	1類	4	378・556	5	4	8.48	28	9.55	13.5 29' 1' 44"	1面, 1面欠, SB304・333 → SB318	
SB319	8類	13	376・552	2	1	4.09	13.5	3.18	10.5 27' 37' 12"	SB338 → SB319	
SB320	7類	3・4	388・550	4	1	7.27	24	3.33	11 25' 1' 8"	SB317 → SB320, SB320 → SB306	
SB321	4類	5・6	398・544	4	2	7.58	25	5	16.5 33' 37' 19"	1面, SB321 → SB307	
SB322	4類	9	374・532	5	1	11.21	37	3.03	10 30' 43" 48"	1面, SB330 → SB322, SB322 → SB306・346	
SB323	2類	1・2	370・540	3	2	5.45	18	3.94	13 27' 51" 36"		
SB324	5類	5	366・546	3	2	4.85	16	3.64	12 27' 51" 40"	SB324 → SB306	
SB325	7類	14	374・544	3	1	6.67	22	2.27	7.5 16' 33" 58"	SB306・336・337 → SB325	
SB326	2類	4	380・540	4	2	8.18	27	3.94	13 22' 42" 25"	1面, SB341 → SB326, SB326 → SB306・334	
SB327	7類	7	378・534	3	1	6.21	20.5	2.27	7.5 29' 2" 31"		
SB328	2類	9	372・560	5	2	8.48	28	4.09	13.5 29' 6" 50"	1面, SB309 → SB328	
SB329	2類	9	372・546	4	2	7.88	26	3.94	13 27' 19" 59"		
SB330	7類	8	374・534	3	1	6.67	22	2.27	7.5 29' 24" 4"	SB330 → SB322	
SB331	7類	14	380・542	3	1	6.67	22	2.58	8.5 16' 13" 55"	SB314 → SB331, SB331 → SB342	
SB332	7類	15	382・554	3	1	5.61	18.5	2.58	8.5 19' 1" 59"		
SB333	1類	1	378・556	5	2	9.55	31.5	3.94	13 22' 54" 3"	2面, 南側2面, 北側2面二重底, SB333 → SB318・334	
SB334	1類	6	374・544	7	2	14.7	48.5	5.61	18.5 22' 25" 55"	2面, 北側2面, SB334 → SB335・310・336・337	
SB335	1類	3	378・558	4	3	8.03	26.5	7.88	25 22' 50" 38"	1面	
SB336	4類	10	374・542	4	1	9.24	30.5	2.12	7 36' 14" 46"	1面, SB314・334 → SB336, SB336 → SB325・340	
SB337	7類	8	376・550	4	1	7.73	25.5	3.67	12 20' 52" 55"	SB311・334・338 → SB337, SB337 → SB306・325	
SB338	1類	7	382・550	4	2	8.94	29.4	3.94	13 27' 14" 10"	3面, SB304 → SB338, SB338 → SB319・337	
SB339	4類	1・2	378・542	3	1	6.67	22	3.18	10.5 29' 6" 14"	SB339 → SB306・314・334・342	
SB340	7類	11	376・534	3	1	6.36	21	3.03	10 25' 59" 53"	SB338 → SB340, SB340 → SB312	
SB341	2類	3	376・542	4	1	8.03	26.5	5.3	17.5 27' 54" 58"	1面, SB341 → SB306・326・334	
SB342	7類	15	380・540	3	1	6.82	22.5	2.88	9.5 33' 17' 49"	SB306・331・339 → SB342	
SB343	7類	9	376・542	3	1	6.21	20.5	2.42	8 35' 22' 30"		
SB344	7類	12	378・540	3	1	5.91	19.5	3.33	11 27' 27' 4"		
SB345	7類	15	370・546	3	1	6.36	21	2.27	7.5 37' 5" 13"		
SB346	5類	14	368・528	3	以上	6.06	20.0	5.91	19.5 11' 57' 7"	SB322 → SB346	
SB347	7類	10	372・528	3	1	5.3	17.5	3.33	11 15' 16" 37"		
SB348	8類	3・4	372・520	2	1	5.76	19	2.88	9.5 35' 16" 37"		
SB349	4類	5・6	376・514	2	2	5	16.5	3.18	10.5 36' 48" 25"	1面	
SB350	8類	1・2	374・520	2	1	5.6	18.5	2.42	8 40' 22' 55"		
SB351	8類	9	386・494	2	1	4.24	14	1.67	5.5 23' 22' 26"		
SB352	5類	7	390・526	3	2	5.76	19	3.79	12.5 28' 44' 42"		
SB353	3類	3	386・516	5	1	10.15	33.5	6.06	20 24' 54" 32"	2面, 北側2面, 南側2面欠, SB354 → SB353, SB353 → SB360	

遺構名	分類	所属時期	グリッド	桁行	梁行	桁行 (m)	桁行 (尺)	梁行 (m)	梁行 (尺)	主軸方向 (東で裏に)	備考 (此、新旧関係)
SB354	3 桁 1・2		386・518	4	1	8.33	27.5	4.85	16' 29" 10' 19"	1 画	SH354 → SB353
SB355	8 桁 10		384・516	2	1	4.65	15	2.42	8' 29" 0' 29"		
SB356	7 桁 11		384・512	4	1	6.97	23	2.58	8.5' 23" 35' 26"	SB356 → SB358	
SB357	3 桁 4		388・514	4	1	11.6	36.5	4.7	15.5' 24" 23' 30"	1 画	
SB358	8 桁 12		386・514	2	1	4.55	15	1.67	5.5' 32" 12' 47"	SB356 → SB358	
SB359	6 桁 13		392・516	2	2	4.55	15	3.03	10' 33" 1' 59"		
SB360	6 桁 5		392・516	2	2	4.55	15	3.03	10' 41" 55' 8"	SB363 → SB360	
SB361	6 桁 6		394・514	2	2	4.09	13.5	3.03	10' 32" 21' 49"		
SB362	4 桁 7・8・9		386・508	2	2	3.79	12.5	3.49	11.5' 26" 13' 41"	1 画	
SB363	8 桁 8		382・500	2	1	4.09	13.5	1.97	6.5' 26" 13' 12"		
SB364	4 桁 5・6		382・496	3	1	6.06	20	3.49	11.5' 34" 58' 56"	1 画	
SB365	6 桁 7		384・496	2	2	4.09	13.5	3.33	11' 27" 50' 20"		
SB366	2 桁 12		390・496	3	2	6.21	20.5	4.55	15' 28" 17' 56"	2 画	
SB367	6 桁 13		394・488	2	2	4.09	13.5	4.09	13.5' 26" 57' 40"		
SB368	2 桁 10・11		396・484	4	2	9.24	30.5	5.15	17' 33" 35' 17"	1 画	
SB369	4 桁 5・6		376・562	3	1	7.27	24	3.18	10.5' 25" 42' 29"	1 画	
SB370	4 桁 1・2		350・522	3	1 以上	6.67	22	2.2 以上	6.5 以上 28' 53" 17"	1 画	
SB371	4 桁 3		348・522	2 以上	2	3.6 以上	11 以上	3.94	13' 26" 57' 54"	2 画	SB371 → SB377
SB372	8 桁 7		366・548	2	1	5.45	18	2.88	9.5' 26" 13' 8"		
SB373	6 桁 6		364・540	2	2	4.55	15	3.79	12.5' 30" 11' 45"		
SB374	7 桁 14		362・536	3	1	5.76	19	3.03	10' 17" 42' 50"		
SB375	6 桁 3		364・536	2	2	5.6	18.5	3.49	11.5' 31" 0' 50"		
SB376	6 桁 7・8		364・534	2	2	4.24	14	4.09	13.5' 27" 56' 32"	SB376 → SB306	
SB377	4 桁 4		350・522	不明	不明	不明	不明	不明	不明 29' 4" 34"	SB371 → SB377	
SB378	4 桁 7		396・544	4	1	7.12	23.5	3.03	10' 32" 2' 49"	1 画	SB378 → SB307

S B 333・304・335・318が主屋となる。S B 370・371・377が、堀 S D 43の北側に配置される。第2・3期には石敷 S X 141、池 S G 166が共存する。第4期では東側の区画が、堀 S D 172・212から東隣の堀 S D 127・180に移動し、敷地が拡張される。

第2段階では主屋が第1段階から東へ移動する。第5～7期がこれに入る。それぞれS B 314・334・338を主屋とした。主屋の西側と南側に主屋に準ずるやや大型の建物が配置される。また、東側の区画である堀 S D 127・180の外側にも建物が配置される。

第3段階は、第2段階で主屋に準ずる大型建物が配置された位置に主屋が移動する。第8～11期がこれに入る。第8・9期はS B 316、第10・11期はS B 307を主屋とした。第8・9期ではS B 316が主屋となり、第1・2段階で主屋が配置された付近に、主屋に準ずる大型の建物が配置される。第10・11期ではS B 307が主屋となり、東側の区画である堀 S D 127・180の外側にも主屋に準ずる大型の建物が配置される。また第10期では西側の区画が堀 S D 4へと移り、敷地が拡張される。

第4段階では主屋が北側に移る。第12・13期がこれに入る。それぞれS B 312・306を主屋とした。石組池 S G 37もこの時期に共存すると考えられる。第13期では主屋が最大となるなど、本遺跡の最盛期と考えられる。東西の堀もS D 210・126・3へ移動され、敷地が拡張される。

第5段階には、調査区内に主屋に相当する建物が存在しない第14・15期が入る。建物の規模が縮小される時期である。

以上が遺構配置変遷案の概要である。第5段階を除き、各段階とも中心となる主屋のほかに、1・2棟の主屋に準ずる大型の建物、倉庫などと考えられる小型の建物が備わり、さらに作業場などと考えられるやや大型の建物なども加わる場合がある。中には複数の時期にわたって存在する建物も認められた。これは建物全てが一齊に建て替えられるのではなく、老朽化などに伴って順次建て替えたためと理解される。この変遷案によると、上野遺跡は、第1期から第11期まで徐々に規模を拡大し、第12・13期に最盛期を迎えるが、その後第14・15期に至り急激に衰退したと考えられる。

最 盛 期

2 堀・川・溝・石組池・池・石敷

堀 調査区中央に集中する建物群の四方を囲む堀が、南北に1条ずつ、東西では3条ずつ検出された。西側の堀 SD 12・4・3には、それぞれを東西につなぐSD 48・11がある。南側のSD 10は調査区中央ほどで南折し調査区外に延びる。東側の堀が途切れる個所は、出入口部分となるが、表口かあるいは裏口か判然としない。北側のSD 43は川SG 49と接しており、取水を行ったのもこの付近と考えられる。第28～36図にこれらの堀の断面図を掲載した。これによると最も古い段階で埋め戻された堀はSD 10、次にSD 12のSD 11と連結する個所以南部分である。その後の堀の変遷は第4～7図の遺構配置変遷図に示した。これらの変遷は、堀の断面図からその埋没順を追って作成した。堀の底面は平坦、断面形は逆台形を呈する。幅は0.6～3.8mであるが、上端は削平を受けているため、本来はさらに広い。底部付近には微

水堀 細で均質なシルトが薄く層状に堆積している場合が多く、水を湛えていたと推察される。堀の水は地形の傾斜から、北東から南西に向かって緩やかに流れていたと考えられる。SG 49から取水したのだろうが、SG 49と接するSD 43はSG 49が埋没した後も機能しており、その後の取水口は別途用意されたであろう。おそらく調査区東端付近のSD 43から取水したと推察される。この付近は削平のためSG 49につながる遺構が遺存していないが、SD 43の東端部は北側へ向かい曲折している。本来はここから北へ溝状の遺構が伸びSG 49につながったと推察される。また、SD 10が南折する個所の外側は水流により侵食されていたようであり、この個所のみ作り替えが行われていた（第35図S 27・S 27'）。

川SG 49 調査区内では井戸は検出されておらず、主な水源として川SG 49が利用されたものと考えられる。現在でも本遺跡の所在する京塚では、東方の丘陵部の沢から流れる水を引き入れ、生活用水をしている家があるという。また、昔から井戸を掘らない（鮎川村史編集委員会編 b 1986）とされている。SG 49の北側の堀 SD 72・73は調査区外からSG 49に接続する。北側からの排水をSG 49へ導いたと考えられるが、SG 49より先に埋没している。

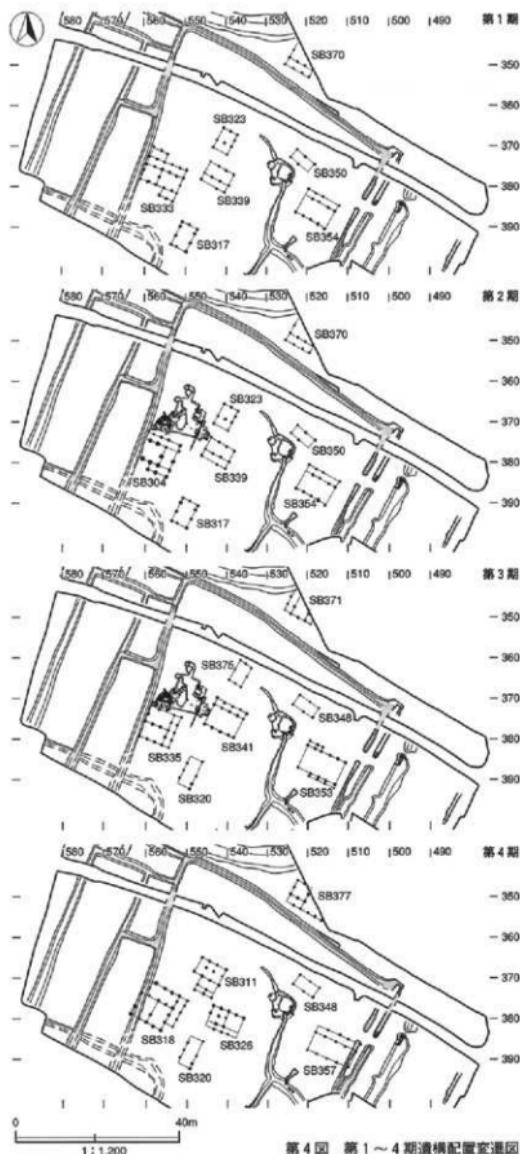
池 SG 146・165、溝 SD 112・2・93・258（第37・38図） SD 112の北端は削平により遺存していないが、北側のSD 43などからSG 146へと導水した溝と考えられる。SG 146に溜められた水はSD 2を通じて調査区外に排水される。SG 146とSD 2の接続部断面（第37図S 44・S 44'）によると、両者はSG 146の上端付近で接続していることが分かる。SG 146に十分水を溜めた後にあふれた水をSD 2へと排水したと考えられる。SD 93はSD 2へ接続し同様に排水を行ったものと考えられる。SD 258（第15図）は短く排水用とは考え難い。SD 2から水を引き、水を必要とする作業などを行った施設と推察される。SG 165もSG 146と同様の機能を有する池と考えられるが、導水・排水施設は検出されなかった。地上施設か、あるいは削平により失われたのである。

石組池 SG 37（第39・40図） 調査区南西部に位置する周囲に石組による護岸が施された池であり、州浜形と呼ばれる形状を呈する。堀 SD 10が埋め戻された跡に築かれ、長軸7.1m、短軸3.7m、深さ0.3mを測る。出島の西側の付け根部分には、景石が配置されている。第40図の断面図e-e'に図示されている大型の石である。表土除去の際に重機により倒されてしまったが、本来は直立していたことが分かる。また、同じく付け根部分の池底にはわずかに

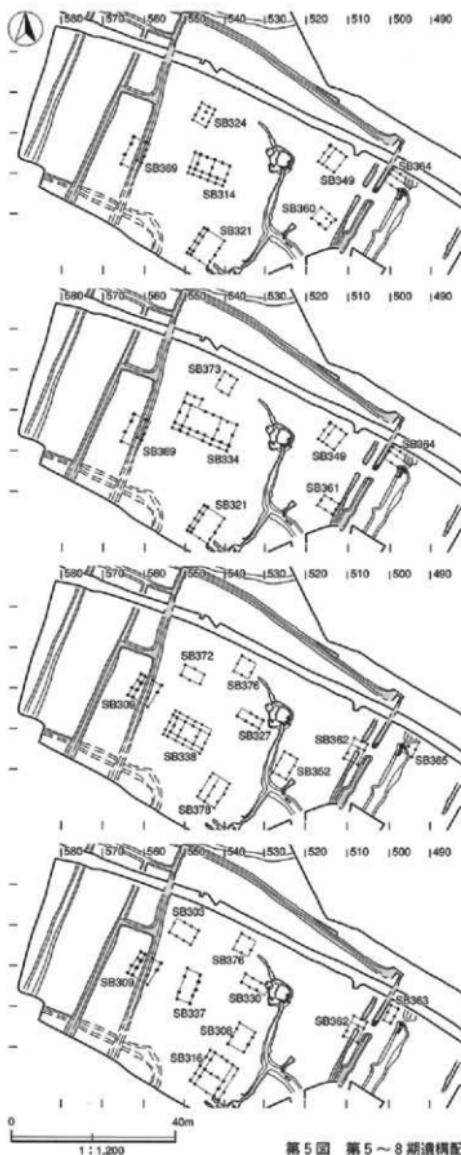
玉石が残っている。出島部分の石組の裏込め土には黄色系粘土が用いられ、強度が保たれている。池西端部の石組は1段のみ遺存しており、上位の石組は抜き取られたと考えられる。池東端部分には、池からさらに東へと石数が続く様相が看取される。SG 37の周辺に建物などほかの遺構はなく、池を含む庭園が存在したことを想起させる。築山など存在した可能性はあるが、遺構として検出はされなかった。

池 S G 166, 石数 S X 141 (第41 ~ 44図) S G 166は長軸83m、短軸7.4m、0.3mを測る素掘りの池である。調査区中央部に位置し、最も遺構が集中する地点でもあるため、埋没後は数多くの遺構と重複している。堅穴建物S T 205・200・119などと重複しているが、いずれよりも古い。本来の池の規模はこれら堅穴建物を除いた大きさとなり、SD 257の延長部分に見られる小溝・杭列までとなる。杭列は池の東岸に一様に検出された。護岸のために板材などを固定、あるいはしながらみを設けたと考えられる。護岸施設は東端部分にのみ検出されており、ほかの岸に比べて受ける水勢が強かった可能性がある。また、東岸には玉石敷が遺存している(写真図版8)。その多くは失われているが、岸の傾斜に面をそろえて配置されている様子が看取される。

導水施設は判然としないが、北端部の溝状部分と推察される。SD 43などから導水したと見られるが、SD 43と接続する個所は遺存して



第4図 第1~4期遺構配置変遷図



第5図 第5～8期造構配置変遷図

第5期 いよいよ排水は南東端の溝 S D 257
 - 350 を利用したと考えられる。池よりも
 - 360 格段に浅い溝であり、池から溢れた
 - 370 水のみを排水したと考えられる。や
 - 380 はり途中までしか遺存していない
 - 390 が、本来は S D 2・93などまで延
 びていただろう。S K 85の北側に
 同規模の溝が東西に走っているが、
 S D 257の一部と想定される。

第6期 S G 166 の中央部には出島部分が
 - 350 ある。これは S G 166 が単なる池で
 - 360 なく、庭園内に設けられた池泉で
 あることを意味するだろう。

- 370 S G 166 と複合する遺構が石敷 S
 X 141 である。西半部の遺存状態は
 良好だが、東半部に残された石は少
 ない。巻頭写真3を観察すると明ら
 かであるが、S X 141 の周辺部の石
 は内部に比べて数倍大きい。これら
 - 350 が S X 141 の周囲を縁取るよう配
 置される。縦やかに曲折するこの縦
 - 360 取りの石列は、意図的に石敷の範囲
 - 370 を形成したことの現れであろう。石
 敷の範囲は一旦浅く掘り込まれ、そ
 の後、土を戻しながら石が敷かれる。
 - 380 石敷内に3基の土坑 S K 251・
 252・253が検出された。S K 251は、
 埋め戻された後に、石敷がその上面
 - 390 を覆う。S K 252の周囲は、石敷と
 同様に大型の石により縁取りされ、
 その内部には石敷が及ばない。しか
 し断面(第42図 b-b', 写真図版8)
 によると、石敷は埋め戻された S K
 252 の直上に施されていることが分
 かる。つまり、S K 252を埋め戻し
 た後に、その内部を避けて石敷きを
 施し、さらに大型の石を列状に配し
 縦取りを行っている。状況からの判

第7期 第8期
 - 350 石敷内に3基の土坑 S K 251・
 252・253が検出された。S K 251は、
 埋め戻された後に、石敷がその上面
 - 360 を覆う。S K 252の周囲は、石敷と
 同様に大型の石により縁取りされ、
 その内部には石敷が及ばない。しか
 し断面(第42図 b-b', 写真図版8)
 によると、石敷は埋め戻された S K
 252 の直上に施されていることが分
 かる。つまり、S K 252を埋め戻し
 た後に、その内部を避けて石敷きを
 施し、さらに大型の石を列状に配し
 縦取りを行っている。状況からの判

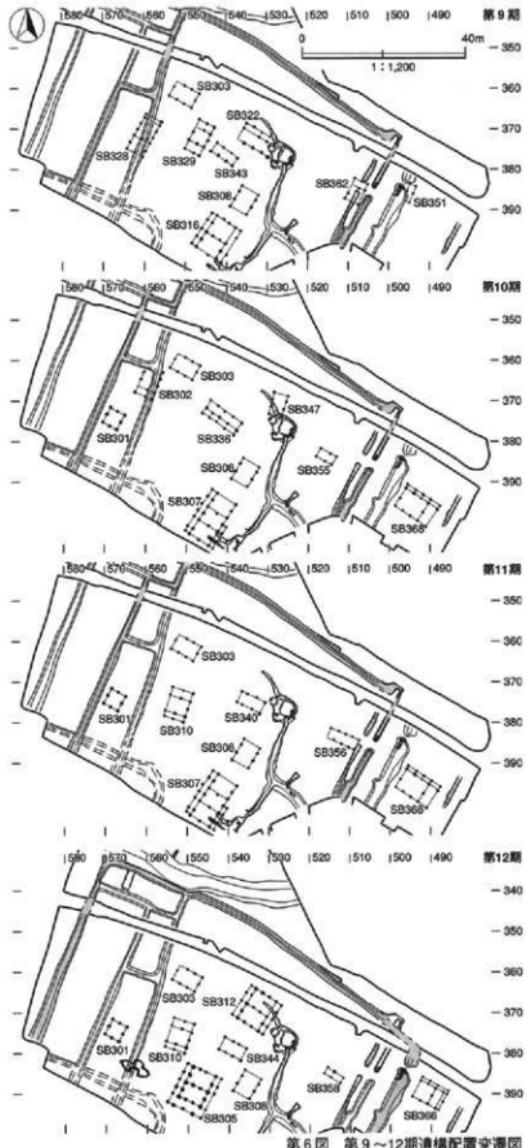
断であるが、ここでは植栽の痕跡と想定したい。植栽を行い、土を埋め戻し、根元部分を空けて縁取りしながら石敷を施したと推察される。

池泉・出島・石敷・植栽など庭園の要素が看取されるが、地上部分にもほかの庭園の要素を有していただろう。本遺構内では早い段階でこの庭園は廃され、掘立柱建物・竪穴建物などの集中域となった。

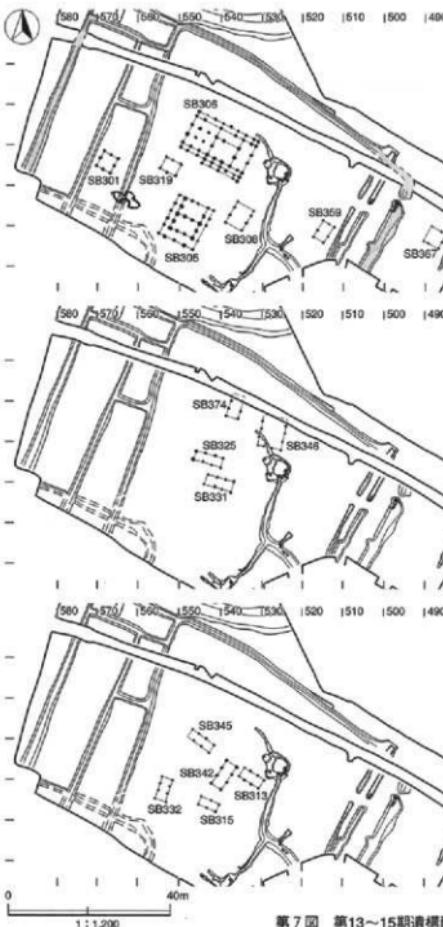
3 竪穴建物・土坑

竪穴建物（第41・45～47図）14棟を確認した。隅丸方形・長方形の平面形を呈する遺構の内、床面が平坦なものを竪穴建物とし、小型あるいは床面が平坦ではない遺構は土坑として報告する。竪穴建物としたのはS T 67・80・81・113・129・156・160・164・170・175・176・199・200・205である。竪穴建物同士の重複は少ないが、やはり掘立柱建物との重複が多い。柱穴を持たない構造のものが多く、柱穴を伴う例はわずかである。限られた区画内の土地を繰り返し使用するため、廃絶後短期間の内に埋め戻された。

竪穴建物S T 170は長軸2.79m、短軸2.56m、深さ0.38mを測る。明確な柱穴を伴う唯一の竪穴建物であり、南北の壁面付近に3基ずつ、計6基の柱穴を伴う。懸仮38が出土した。ほかにS T 67・80・81・113が、S T 170と同様に隅丸長方形を呈し、長軸が北東を指す竪穴建物である。いずれも明確な柱穴を持たず、掘方も浅い。S T 67の床面には、土が入り平坦に造成されてい



第5図 第9～12期遺構配置変遷図



第7図 第13～15期遺構配置変遷図

る。S T 80 の東西の壁面付近で検出された柱穴は、その配置からこの竪穴建物に伴う可能性が高い。床面で検出された土坑 S K 120 は、縄文時代の所産と考えられる。S T 129・156・160・164・175・176 はやはり北東を向くが、ほぼ方形を呈する竪穴建物である。S T 129 では東側に 1 基の柱穴が認められた。S T 175・176 は重複しており、前者が先行する。S T 199・200・205 は池 S G 166 と重複、また S T 199・200 も互いに重複する。いずれも S G 166 より新しい。S T 205 と S G 166 の新旧関係は断面では確認されなかったが、S G 166 の玉石数が S T 205 の構築により失われているため、S G 166 が先行すると判断される。これら 3 基の竪穴建物の平面形は隅丸方形・長方形のいずれかであろう。柱穴は認められない。

土 坑（第 48～52 図）第 48～50 図に方形・長方形の土坑を掲載した。長・短軸のいずれかは、竪穴建物と同じく北東を指す。第 51・52 図に円形・楕円形の土坑を掲載した。S K 162 は大型で、人頭大の石がまとまった状態で出土した。S K 203 は深さ 0.84 m を測る。形状から本遺跡唯一の井戸とも考えられるが、素掘りのため判然としない。

4 陷 穴（第 13・46・47・53・54 図）

平面形が円形の陷穴 S K 7・33・35・77・79・87 は、調査区南部で北西から南東へ並ぶ。S K 88・137 は、この陷穴列と合流する可能性もある。底面には逆茂木痕が 1 基認められるが、S K 77・79 では検出されなかった。平面形が長方形の陷穴 S K 197・198・169・157・159・89・144 は、調査区中央部で南北に並ぶ。S K 198 のみ 1 基の逆茂木痕、ほかは 2 基ずつ有する。時期の分かる遺物は出土しなかった。ほかに明確な縄文時代の遺構は、検出されなかった。

IV 遺物

中世・近世の遺物（第 55～58 図）は、遺構外または遺構から単独で出土するものが多い。複数出土している遺構についても溝や河川跡からの出土が多く一括性は低い。そこで、大まかに 13～14 世紀、15 世紀前半、15 世紀後半～16 世紀前葉、近世以降に分類し、各時期の主な遺物について記述する。個別の遺物の詳細については遺物観察表（表 2）に譲る。表または文中に記載した遺物の分類は、珠洲は吉岡 1994、瀬戸美濃は藤澤 1991・2002、貿易陶磁器は歴博 1994 による。

13～14 世紀 東北地方産と考えられる瓷器系陶器擂鉢、珠洲の壺、擂鉢が出土している。
瓷器系陶器擂鉢（7・8・12）は胎土や色調が類似し、同一個体の可能性がある。珠洲（15・40・60）は口縁部の形状等から珠洲 IV 期段階と判断した。

15 世紀前半 出土数が多く、遺跡の中心的な時期と考えられる。珠洲 V 期の擂鉢（17・31・58・62・63）、古瀬戸後期様式の平碗など（28・29・33・57）が標識となる。貿易陶磁器は白磁 D 群の皿（30）や角杯（68）、無文の青磁碗（13・37）、口縁部雷文帯の青磁碗（43）などが出土している。

15 世紀後半～16 世紀前葉 大底第 1 段階の瀬戸美濃皿、外面に線描連弁文を施した青磁碗（22・44・56）、青磁後花皿（1・21・23）、染付皿 B 1 群（34）などが出土している。風炉や火鉢などの瓦質土器（10・35・42・46・49）もこの段階と考えられる。

このほか基石や砥石、茶臼等の石製品、釘などの鉄製品が出土している。遺物自体の年代は不明確だが、多くが遺跡の盛期である 15 世紀代に属するものと考えられる。

近世以降 肥前陶器（74）、肥前磁器（2・72・73）出土している。

古代の土器（75～77）須恵器の壺（75）と壺（76）、内黒の壺（77）が出土している。伴う遺構はない。

鏡・懸仏 鏡（45）は銅製、14 世紀後半～16 世紀初頭の「擬漢式鏡」である。懸仏（38）は青銅製で、鏡から外れた草像のみが出土した。表には鍍金が施されている。裏には鏡へ取り付けるための錫がある。大きさ、手の向きから、臨侍であると考えられる。

網文土器（78～80）大木 7 式（78）と大木 9 式新段階（79）の深鉢形土器と後期初頭の台付鉢（80）が出土している。伴う同時代の遺構はない。

石 器（81～96）石鎚 81 は凹基無茎鎚、82・83 は平基無茎鎚である。84・85 は木葉形尖頭器である。两者とも上半部を欠損する。85 の裏面に施された調整は、周辺部に限られる。石斧（86～90）には頭部が尖るもの（87・89・90）と平坦なもの（86・88）がある。調整はいずれも両面に及ぶ。搔器（91）の表面には擦痕が残る。急角度の刃部が作出されている。石錐（92・93）は、錐部両側縁に調整加工が施され、素材の剥片の形状を留める D 2 類（矢島・前山 1995）である。93 の錐部は使用により著しく摩滅している。石棒（94）の先端部と末端部は欠損している。中央部には横方向の磨痕が認められる。95・96 は定角式磨製石斧である。下半部の欠損は使用によるものであろう。

吉岡 康輔
1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

藤澤良祐 1991
「古瀬戸古窯址群 II—古瀬戸後期様式の誕生—」『研究紀要 X』瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 2002
「瀬戸・美濃大窯の再検討」『研究紀要第 10 輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

国立歴史民俗博物館 1994 「日本出土の貿易陶磁 東日本編 1」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書 5

擬漢式鏡
鏡 金
臨侍

表2 遺物観察表

凡例 (築): 築物数 築合前 (接合後) (遺): 遺存部位 (遺存率) (色): 色調 (泥): 混入物 / 砂: 砂粒 / 黒: 石英 / 青: 青母 / 黑: 黑色較 / 白: 白色較 / 赤: 赤色較 / 海: 海面骨針 (成): 成形 (圓): 圓錐 (輪): 輪轍 (色調) (文): 文様 (他): その他、使用痕、分類など

番号	種類	器種	出土位置	残存高(m)	備考
1 青磁	穀花皿	SD2	19 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 107×1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面青釉物 (5G) 6/1 オリーブ灰色 (文) 口縁部内側輪轍状紋		
2 肥前磁器	碗	SD2400-524	22 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) N8/0灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面透明釉 (文) 外面二重輪轍		
3 石製品	石鉢	SD2394-530	76 (築) (1) (遺) 底 (2-8) (色) 25GY7/1明オリーブ灰色 (圓) 外面ノミ痕 (他) 内面磨滅 (巻足底径) 120mm		
4 鉄製品	鉄鏃	SD2382-526	(成) 錫鉄か (長) 83, (厚) 15, (幅) 47mm		
5 石製品	中砥	SD2384-528	(築) (1) (色) 25Y8/2灰白色 (成) 研磨 (他) 4面摩滅 (長) 46, (厚) 121, (幅) 20mm		
6 石製品	中砥	SD2388-530	(築) (1) (色) 30Y6/1灰白色 (成) 研磨 (他) 4面摩滅 (長) 127, (厚) 44, (幅) 22mm		
7 矢筈系容器 織鉢	SD4378-574	54 (築) (1) (遺) 体 (色) 57R6/4にい・む・け・く・れ・く・れ (圓) 英多・白少 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ (文) 内側目 (幅 17mm) に8本			
8 安器系陶器 織鉢	SD4366-570	52 (築) (1) (遺) 体 (色) 57R6/4にい・む・け・く・れ・く・れ (圓) 英多・白少 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ (文) 内側目 (幅 21mm) に9本			
9 土師質土器 かわらけ	SD10	11 (築) (1) (遺) 底 (2-8) (色) 10Y8/2灰白色 (圓) 少少・赤少 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ / 族體頭足切り (推定径) 60mm			
10 瓦質土器 風炉か	SD11362-569	57 (築) (1) (遺) 体 (色) 25Y6/2灰白色 (圓) 少少・白少・海少 (圓) 外面ミガキ + 黒色鳥夷 (内面ナデ + 黑色處理)			
11 土師質土器 トリべ	SD12378-562	52 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25GY6/1黄灰色 (成) 非ロクロ (他) 内面ガラス化 内面・両面の一部破損付			
12 安器系陶器 織鉢	SD12360-558	40 (築) (1) (遺) 体 (色) 5YR6/4にい・む・け・く・れ・く・れ (圓) 英多・白少 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ 内面ロクロナデ (文) 内側目 (幅 20mm) 以上 (7本以上)			
13 青磁	碗	SD12370-560	31 (築) (1) (遺) 体 (色) 25Y7/1灰白色 (成) ロクロ (圓) 外面ケズリ (他) 亂糸系裏蓋 D類		
14 石製品	茶臼	SD12362-559	33 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 10YR5/1灰白色 (成) 研磨 (推定口径) 404mm		
15 朱渦	甕	SD43364-512	60 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25GY7/1灰白色 (圓) 黑多・白少・海多 (成) タカキ (圓) 外面タカキナデ / 内面アテナデ + ナサ (他) 朱渦凹期		
16 瀬戸美濃 瓢箪	SD43358-523	24 (築) (1) (遺) 体 (色) 25Y8/1灰白色 (成) ロクロ (圓) 外面ケズリ / 内面ロクロナデ (他) 外面鉄輪 (N15/ 黒色) 内面赤斑 (7.5Y/3暗オリーブ色)			
17 朱渦	桶鉢	SD126354-496	(築) 21) (遺) 口(2-8) (色) 7.5Y/5/1灰白色 (圓) 黑少・白少・海少 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ (文) 細縁部捲折波状紋 (他) 朱渦V期 (推定口径) 250mm		
18 瀬戸美濃 平鉢	SD126310-500	10 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25Y7/1灰白色 (圓) ロクロ (輪) 内外面灰釉 (7.5Y/7/2灰白色) (他) 古瀬戸後半期			
19 白磁	碗	SD126398-504	11 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25Y8/1灰白色 (圓) 黑少 (成) ロクロ (輪) 内外面透明物 (他) 白磁無鉢		
20 瀬戸美濃 天目茶碗	SD126384-504	35 (築) (1) (遺) 体 (色) 25Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面赤斑物 (N15/ 黒色)			
21 青磁	穀花皿	SD93396-532	19 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 5Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面青釉物 (1Y6/2 オリーブ灰色) (文) 口縁部内側輪轍状紋 / 花輪状口縁		
22 青磁	碗	SG165	34 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) N7/0灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面透明物 (1Y6/2 オリーブ灰色) (文) 外面赤斑道文 (他) 亂糸系裏蓋 B4類		
23 青磁	穀花皿	SG165	17 (築) (1) (遺) (底) (1/8以下) (色) 7.5Y7/1灰白色 (圓) 白多 (成) ロクロ (圓) / 底部ケズリ (他) 内外面青釉物 (7.5Y/5/2オフホワイト色) (文) 見足輪轍		
24 鉄製品	切引	SG37384-569	(長) 65, (厚) 1, (幅) 10mm		
25 鉄製品	押打針	SG37384-562	(長) 33, (厚) 1, (幅) 10mm		
26 石製品	苔石 (黒)	SX141370-556	(築) (1) (色) N3/0前灰褐色 (長) 18.5, (厚) 6, (幅) 17mm		
27 石製品	苔石 (白)	SX141370-556	(築) (1) (色) 2.5Y/2灰白色 (圓) 7, (厚) 8.2, (幅) 4mm		
28 瀬戸美濃 平鉢	SX141372-554	30 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面灰釉 (2.5Y/7/3淡黄色) (他) 古瀬戸下平一部無鉢			
29 瀬戸美濃 平鉢	SX141372-554	20 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 5Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面灰釉 (6Y7/2灰白色) (他) 古瀬戸灰崩期			
30 白磁	皿	SX141370-554	20 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 25Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面透明物, 体部下平無鉢 (他) 白磁無鉢 D類		
31 朱渦	桶鉢	SG166958-546	22 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 7.5Y6/1灰白色 (圓) 白少・海多 (成) ロクロ (圓) 外面ロクロナデ / 内面ロクロナデ (文) 口縁部捲折波状紋 (他) 朱渦V期		
32 瀬戸美濃 平鉢	SG166958-550	50 (築) (1) (遺) 口(1/8) (色) 5Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 外面ロクロナデ / 内面ロクロナデ (他) 内面赤斑物 (5Y/7/3淡黄色) (他) 古瀬戸後半期			
33 瀬戸美濃 平鉢	SG166970-550	35 (築) (1) (遺) 体 (色) 25Y8/3淡褐色 (成) ロクロ (輪) 外面ケズリ / 内面ロクロナデ (他) 内外面灰釉 (5Y/7/4淡褐色) (他) 古瀬戸後半期			
34 青花 (景)	皿	SG166972-554	26 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) N6/0灰白色 (成) ロクロ (輪) 外面透明物, 番付無鉢 (文) 外面腹輪轍道文 (他) 白磁青花 B1界 (推定口径) 121, (推定底径) 468mm		
35 瓦質土器 風炉	ST129072-536	35 (築) (1) (遺) 体 (色) 10Y7/2にい・む・け・く・れ・く・れ (圓) 英少・白少・海少 (成) ロクロ (輪) 外面ミガキ + 黑色處理 (他) 朱渦V期			
36 鉄製品	叩折針	ST1600370-550	(長) 35, (厚) 1, (幅) 10mm		
37 青磁	碗	ST170374-538	32 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) N8/0灰白色 (圓) 黑少 (成) ロクロ (輪) 内外面青釉物 (2.5G) 6/1 オリーブ灰色 (他) 亂糸系裏蓋 D類		
38 銅製品	鏡仮	ST170374-538	(長) 14, (厚) 1, (幅) 28mm 表面に鍛金, 鏡面に鏡あり (他) 鏡邊		
39 古鏡	鏡模写不明	SKB3C22-559	(他) 2枚着用 (長) 22, (厚) 2.5, (幅) 14mm		
40 朱渦	桶鉢	SK91	40 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 7.5Y6/1灰白色 (圓) 英少・白少・海少 (成) ロクロ (輪) 外面ロクロナデ / 底部勝手切跡 (他) 内面細目 (幅 21mm) に6本 (他) 外面滑擦痕 (文) 外面突起印在三巴文		
41 朱渦	桶鉢	SK189	50.5 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) 7.5Y6/1灰白色 (圓) 英少・白少・海少 (成) ロクロ (輪) 外面ロクロナデ / 底部勝手切跡 (他) 内面細目 (幅 21mm) に6本 (他) 外面滑擦痕 (文) 外面ナデ (文) 内面細目 (幅 21mm) に13本 (他) 内外面に円形の割離痕 (他) 朱渦IV期, 連接着		
42 瓦質土器 桶鉢	SK196374-496	70 (築) (1) (遺) 口(1/8以下) (色) N4/0灰白色 (圓) 英少・白少 (成) ロクロ (輪) 外面ナデ (文) 内面細目 (幅 30mm) に13本 (他) 内外面に円形の割離痕 (他) 朱渦V期, 接合部			

備 種類・ 号 生産地など	器種	出土位置	残存 高	備考
43 青磁 瓶 SK217(372-560)	13 (鐵) 1(l) (通) 口(1/6以下) (色) 7.5Y6/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面青磁輪(IY6/2 オリーブ灰白色) (文) 外面雷文帶 (輪) 龍泉窯系青瓷 C2類			
44 青磁 瓶 SP6(402-540)	32 (鐵) 1(l) (通) 脊(1/8以下) (色) 7.5Y6/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面青磁輪(I 5 GY7/1明オリーブ灰白色) 高台内無輪 (文) 外面捲葉卉文/見込花不明文 (輪) 龍泉窯系青瓷 B4類			
45 瓶 漆萬式瓶 SP9G576-562	(長) 34.4, (幅) 11.0, (幅) 65, (底) 127mm			
46 瓦質土器 風炉か SP13(380-562)	68 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 2.5Y6/2灰黃色 (泥) 雪少/白少/海少 (圓) 外面ミガキ/内面ナデ+黒色處理 (文) 外面突帶			
47 鉄製品 叩折釘 SP14(278-560)	(長) 25.9, (厚) 1.4, (幅) 12mm			
48 石製品 中砥 SP40(380-554)	(鐵) 1(l) (色) 5Y6/2灰オリーブ色 (成) 研磨 (輪) 附付着 (長) 57.1, (厚) 12, (幅) 24.5mm			
49 瓦質土器 火鉢か SP41(380-552)	43 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 7.5Y7/1灰白色 (輪) 白多 (圓) 外面ナデ+黒色處理/内面黒色處理 (文) 外面突帶 3条 (輪) 内面刻削			
50 鉄製品 叩折釘 SP46(374-562)	(長) 15, (幅) 5.6, (幅) 15mm			
51 鉄製品 リング状 SP47(374-562)	(長) 32, (幅) 8.5, (幅) 30mm			
52 鉄製品 板状 SP56(376-550)	(長) 44, (幅) 15, (幅) 12mm			
53 石製品 横 SP4(380-550)	(鐵) 1(l) (色) 5Y8/1灰白色 (成) 研磨 (輪) 腹部磨減 (長) 67, (厚) 15, (幅) 64mm			
54 鉄製品 叩折釘 SP6G578-550	(長) 40, (幅) 17, (幅) 19mm			
55 石製品 壁石(馬) SP9G574-539	(鐵) 1(l) (色) 10Y7/2灰黑色 (輪) 15, (厚) 14.5, (幅) 11mm			
56 青磁 瓶 SP110(370-548)	26 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 5Y8/1灰白色 (輪) 少少 (成) ロクロ (輪) 内外透明輪(Y5/3灰オリーブ色) (文) 外面捲葉卉文 (輪) 龍泉窯系青瓷 B4類			
57 漢戸美濃 水滴 SP154(374-352)	26 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 2.5Y7/1灰白色 (成) ロクロ (圓) /内面ナデ+黒色 (輪) 外面黒色輪(Y5/7/3灰黄白色) (文) 内面下平無輪 (成) 古越州青瓷か			
58 珠潤 福鉢 (378-550)	35 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 5Y6/1灰白色 (泥) 雪少/白少/白少/海少 (成) ロクロ (輪) 外面クロナダ (文) 内面クロナダ (輪) 黑少/白多/海多/成文 (輪) 珠潤V期			
59 珠潤 福鉢 (406-500)	38 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 2.5Y6/1灰黄色 (泥) 雪少/白多/海多/成文 (輪) ロクロ (輪) 外面クロナダ (文) 内面刻目 (33mmに1本) (輪) 内面磨減, 外面指擦痕			
60 珠潤 福鉢 (395-570)	81 外面クロナダ/内面クロナダ (文) 内面磨目 (輪) 11mmに4本) (輪) 珠潤V期			
61 珠潤 福 (382-542)	52 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 5Y6/1灰白色 (泥) 英少/白少/海少 (成) ロクロ (輪) 外面クロナダ/内面クロナダ (文) 外面磨擦波状紋			
62 珠潤 福鉢 XO	46 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 5Y8/1灰白色 (泥) 白多/海多 (成) ロクロ (輪) 外面ロクロナダ/内面ロクロナダ (成) ロクロ (輪) 珠潤V期			
63 珠潤 福鉢 XO	52 外面クロナダ/内面クロナダ (文) 外面磨擦波状紋			
64 非洲 福鉢 XO	54 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 5Y6/1灰白色 (泥) 白多/海多 (成) ロクロ (輪) 外面ロクロナダ (文) 内面刻目 (輪) 14mmに5本) (成) 内面磨減, 接接部			
65 漢戸美濃 瓢反皿 (406-544)	15 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 5Y8/1灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面灰輪 (7.5Y7/2 白目) (成) 大盛第1段階			
66 漢戸美濃 丸皿 XO	19 (鐵) 1(l) (通) 口(1/8以下) (色) 10Y7/2灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面灰輪 (7.5Y7/2 白目) (成) 大盛第1段階			
67 漢戸美濃 小天目茶 瓢 (366-548)	37 外面黒輪 (Y1R7/1灰白色) (文) 内面下平無輪 (成) 古越州後昌期か			
68 白磁 角杯 XO	5 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) 10Y8/1灰白色 (輪) 内外面透明白輪, 内面下平無輪 (文) 外面透明白輪 (成) 白磁D型			
69 古鉢 天蓋元寶 XO	62 初唐6世紀 1023年 2枚付着 (長) 25.5, (厚) 2.5, (幅) 25mm			
70 鎌製品 切釘 E66-548	(長) 51, (幅) 6.5, (幅) 6mm			
71 鎌製品 叩折釘 E78-548	(長) 41, (幅) 6.5, (幅) 1mm			
72 肥前磁器 盆 XO	19 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) N7/0灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面透明輪 (文) 内面圓			
73 肥前磁器 盆 XO	12 不明文 (成) 初唐伊万里 17世紀半前			
74 肥前陶器 盆 XO	18 (鐵) 1(l) (通) 体 (色) N8/0灰白色 (成) ロクロ (輪) 内外面透明輪 (文) 内面圓			
75 朝東京 壺 SD126	86 口付壺-彌陀郎 内面・背面波叩き, 外面: 平行叩き			
76 朝東京 壺 SP98(380-540)	52 体部			
77 土師器 壺 SD10	19 内黑 外壁黒			
78 磁文土器 深鉢 XO	30 体部 大木7式			
79 磁文土器 深鉢 XO	39 口付部 大木9式			
80 磁文土器 台付鉢 SK213(372-554)	25 陶質拍頭 体部下牛-台部 底径: 52mm, 台径: 34mm			
81 石鏡 平易無臺 SD10	道賀賀石 (長) 16.2, (厚) 1.3, (幅) 11.9mm, 0.6 g 先端部・左脚部欠損			
82 石鏡 平易無臺 XO	桂賀賀石 (長) 14.2, (厚) 1.3, (幅) 12.8mm, 0.78 g			
83 石鏡 平易無臺 XO	高瀬石 (長) 23.3, (厚) 1.5, (幅) 16.6mm, 1.85 g			
84 失墜物 木葉形 SP46	狂賀賀石 (厚) 6.1, (厚) 13.1, (幅) 40.4mm, 87.8 g 上半部欠損			
85 失墜物 木葉形 (374-562)	狂賀賀石 (厚) 6.1, (厚) 12.8, (幅) 39.7mm, 30.44 g 上半部欠損			
86 石鏡 両面加工 SP167	狂賀賀石 (厚) 6.8, (厚) 12.9, (幅) 35.4mm, 23.63 g			
87 石鏡 両面加工 SD187	直背石 (厚) 15.1, (厚) 8.2, (幅) 24.3mm, 8.06 g			
88 石鏡 両面加工 SD10	狂賀賀石 (厚) 17.0, (厚) 13.9, (幅) 31.6mm, 30.92 g			
89 石鏡 両面加工 SD8	狂賀賀石 (長) 17.2, (厚) 11.3, (幅) 39.1mm, 43.18 g			
90 石鏡 両面加工 SG165	狂賀賀石 (厚) 17.6, (厚) 11.4, (幅) 34.5mm, 36.49 g			
91 猪目 瓶 XO	狂賀賀石 (長) 15.5, (厚) 13.1, (幅) 17.7mm, 16.8 g			
92 石鏡 SD3	狂賀賀石 (厚) 15.2, (厚) 8.6, (幅) 29mm, 10.53 g			
93 石鏡 SD4	狂賀賀石 (厚) 18.8, (厚) 12, (幅) 49mm, 23.85 g			
94 石佛 SG166	泥塑 (長) 15.6, (厚) 12.3, (幅) 39mm, 188.62 g 先端部・末尾部欠損			
95 石斧 定角式 SD3	蛇首石 (長) 19.1, (厚) 3.8mm, 41.82 g 下半部欠損			
96 石斧 定角式 XO	絶色褐灰岩 (長) 19.2, (厚) 3.7, (幅) 45mm, 136.16 g 下半部欠損			

V 総 括

上野遺跡の発掘調査では数多くの調査成果が得られたが、同時にさまざまな問題を提起することになった。遺跡の主な存続期間は15～16世紀前半である。第Ⅱ章で触れた古い地名である「金光寺」に合致する寺院跡であること示す遺構・遺物は、確認されなかった。遺跡の性格としては館としたいが、なお寺院の可能性も含め検討課題として残る。存続期間内に性格が替わる場合もあり得る。また、出羽国分寺説に関する古代の遺構は検出されなかつた。

上野遺跡は、史料に最上郡北部を拠点とした鮎延氏が登場する頃に廃絶したと考えられるため、安易に鮎延氏を館の主として比定できない状況となった。しかし、交通の要衝である鮎川を眺望できる高台に、庭園をも有する館を構えられる力を蓄えた人物は限られる。諸史料によれば、当地に拠を求めて争った氏として、最上郡南部を拠点とする清水氏、庄内地方の武藤氏、鮎延氏の前身である佐々木氏が挙げられる。ほかに有力な人物は知られていないため、この3者のいずれかであると考えた方が良い。途中で交替したこととも考慮に含める必要があろう。

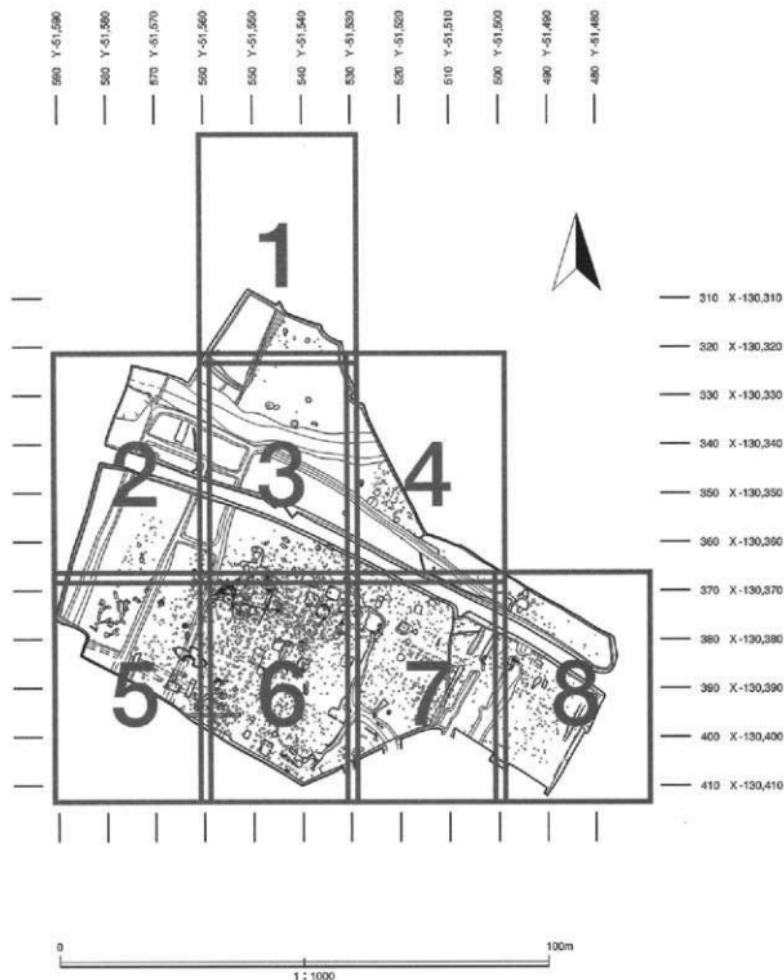
本書では、最も有力な人物として佐々木氏を館の主として想定したい。調査では戦時に備えた遺構は検出されなかつた。堀の幅は狭く、水堀であっても容易に渡ることができる。また、水源は館内に存在せず、川 S G 49から導水している。遺物では、什器のほかに目立つものとしては茶道具・書道具・基石などであり、戦時の備えに関するものは皆無である。このような館は、自らの本拠地に相当近接していかなければ維持できないのではないだろうか。しかも交通の要衝であり、常に他者からの攻撃に対する防備が必要である。一方、館には庭園などもしくらえており、注ぎ込んだ資財もわずかではないはずである。簡単には放棄できないと考えられる。最も近い所に本拠地を置くのは、鮎延城主となる佐々木氏である。仮に館ではなく寺院であったとしても、やはり佐々木氏の保護下にその法灯を照らしていたと考えられる。具体的な根拠に欠けるが、検討課題として提起したい。

調査では、館の区画施設としての堀を含めて、その内部のほぼ全てを調査したこととなる。内部施設の規模・数量などを含め、該期における館の全容解明に資する貴重な調査事例となつた。また、石敷 S X 141、池 S G 166、石組池 S G 37などの庭園に関する資料も貴重である。今後他地域の庭園などと比較検討する必要があろう。

鮎川村周辺は、近世に至り新庄市に戸沢氏が城を築くまで、最上地方の中心部として栄えたといわれるが、正しくその証たるべき遺跡と言えよう。

引用文献

- 小川邦昭 2002年 「英傑鮎延典蔵の居城」「図説 最上の歴史」 郡士出版社
- 鮎川村史編集委員会編 a 1986年 「第4章 中世の鮎川」「鮎川村史 通史編」 鮎川村
- 鮎川村史編集委員会編 b 1986年 「第5章 郡士の伝説」「鮎川村史 集落編」 鮎川村
- 渋谷季雄ほか 2004 「分布調査報告書(30)」(山形県埋蔵文化財調査報告書第204集) 山形県教育委員会
- 高橋晋一郎 1931年 「最上郡豊里の郡守遺跡」「山形郷土研究 第7号」 山形郷土研究刊行会
- 豊里村編 1929年 「金光寺の遺跡」「豊里村誌」
- 長沢正機 1983年 「秦師長墓墳墓発掘調査報告書」(山形県最上郡鮎川村文化財調査報告書第1集) 鮎川村教育委員会
- 矢島國雄・前山精明 1995年 「石雞」「縄文文化の研究 7 道具と技術」 雄山閣
- 山形県教育委員会 1997年 「山形県中世城館遺跡調査報告書 第3集(庄内・最上地域)」



※これらを結合した図(1:200)は付図に収録した。

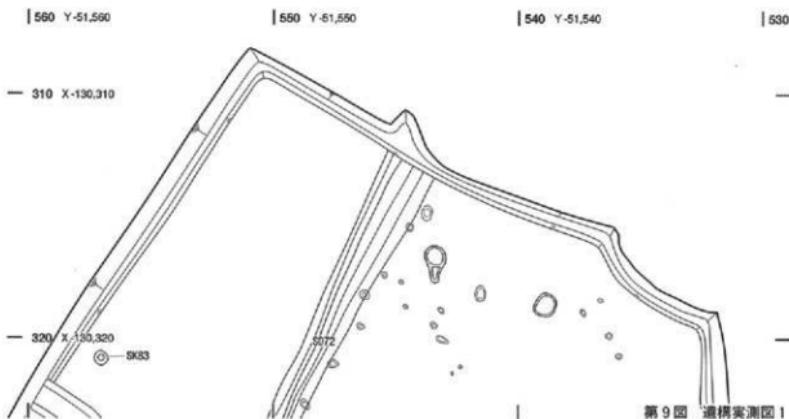
第8図 造構実測図の割付



単柱穴は深度80%で表示、検出状況を括弧した。

■ 石

0 10m
1 : 200

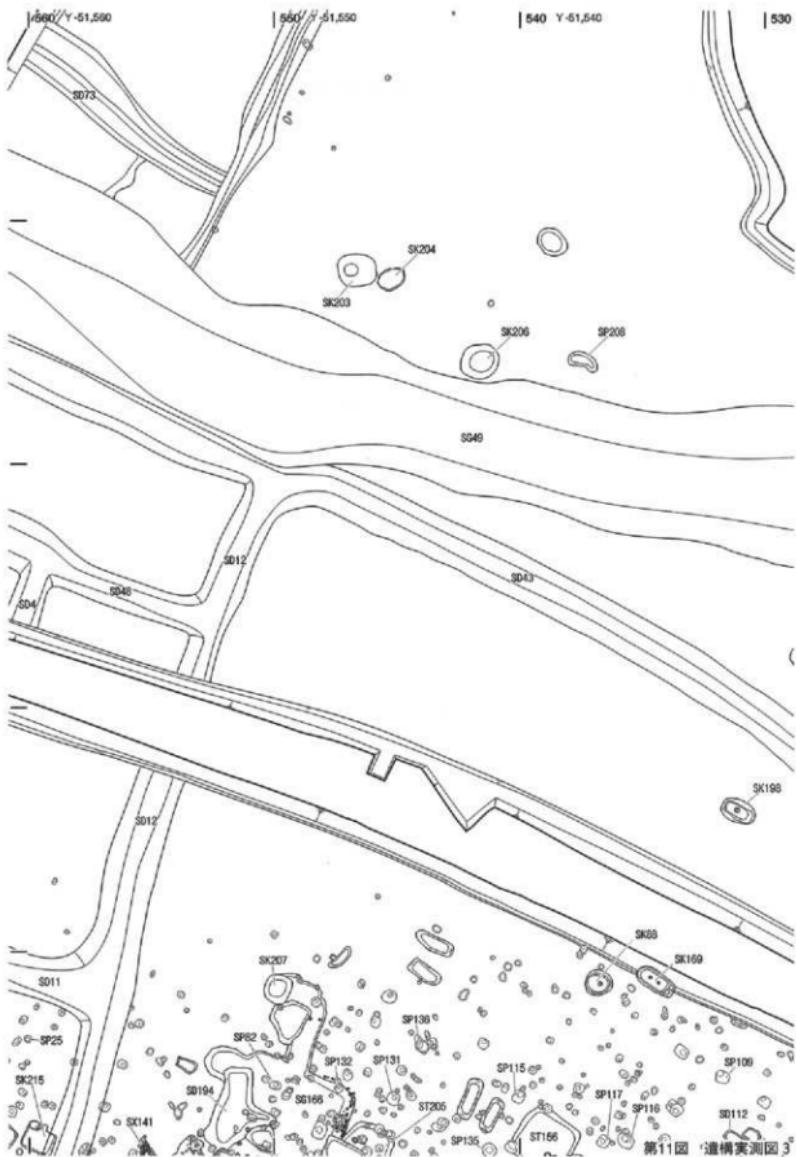


第9図 遺構実測図



第10図 造構実測図 2

造構実測図



第11図 造構実測図³

| 530 Y-51,530

| 520 Y-51,520

| 510 Y-51,510

| 500



柱穴は深度60%で表示、検出状況を掲載した。

— 330 X-130,330

石

0 10m
1:200

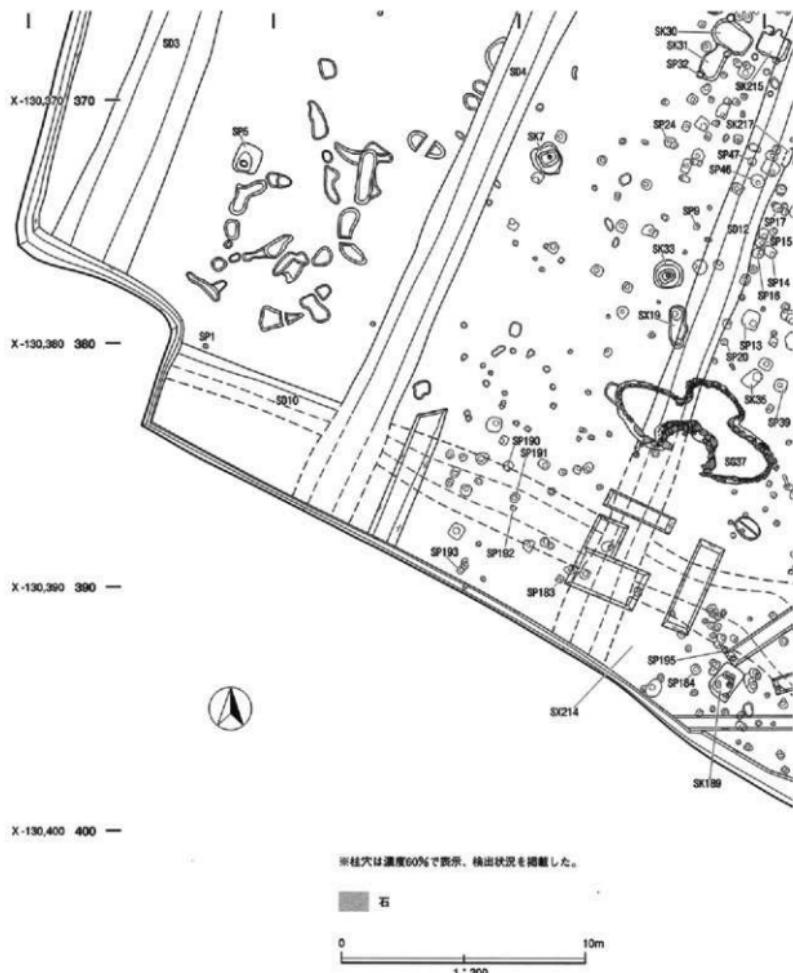
— 340 X-130,340

— 350 X-130,350



第12回 遺構実測図4

造構実測図



| 590 Y-51,590

| 580 Y-51,580

| 570 Y-51,570

| 560

第13図 造構実測図 5

造構実図



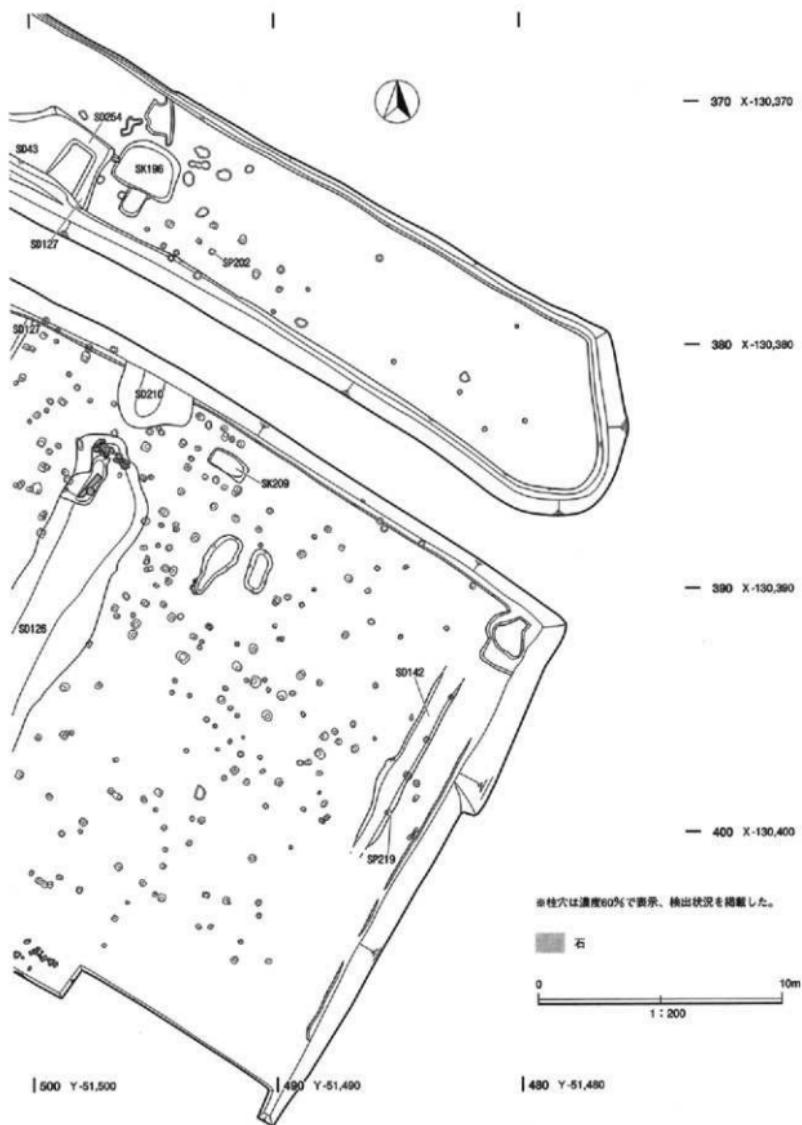
| 530 Y-51,530

| 520 Y-51,520

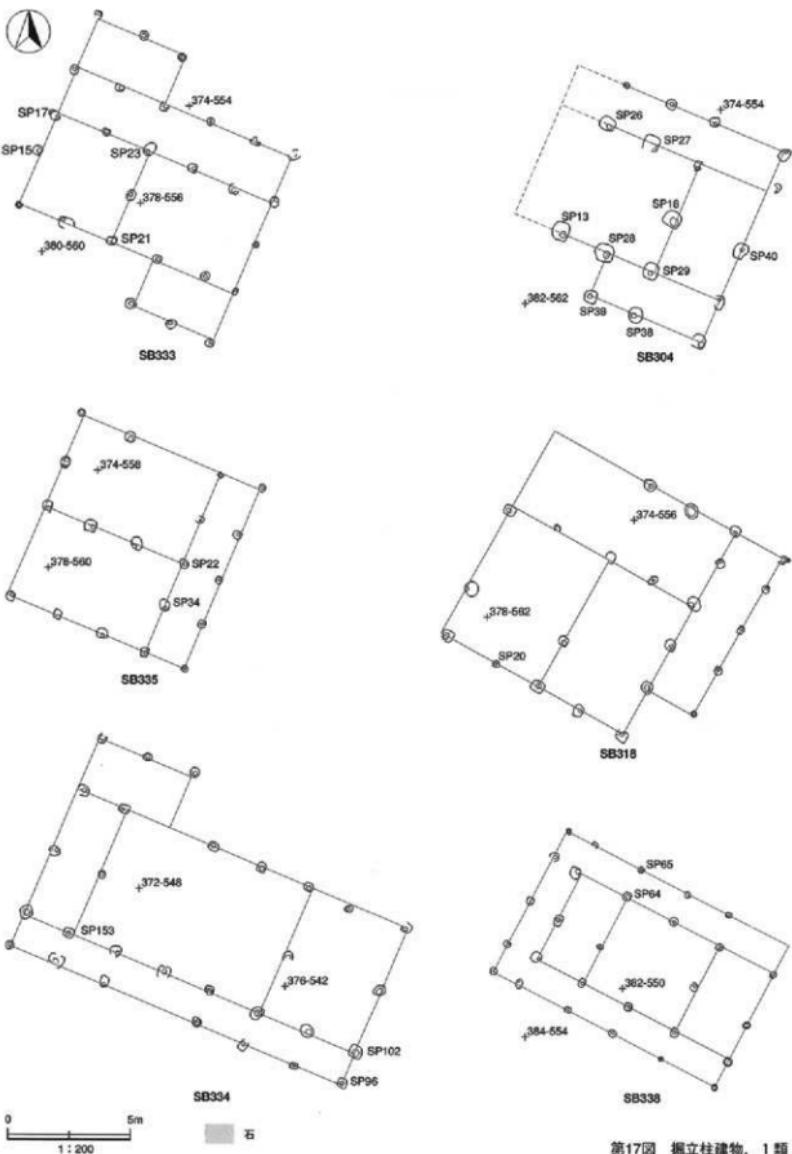
| 510 Y-51,510

| 500

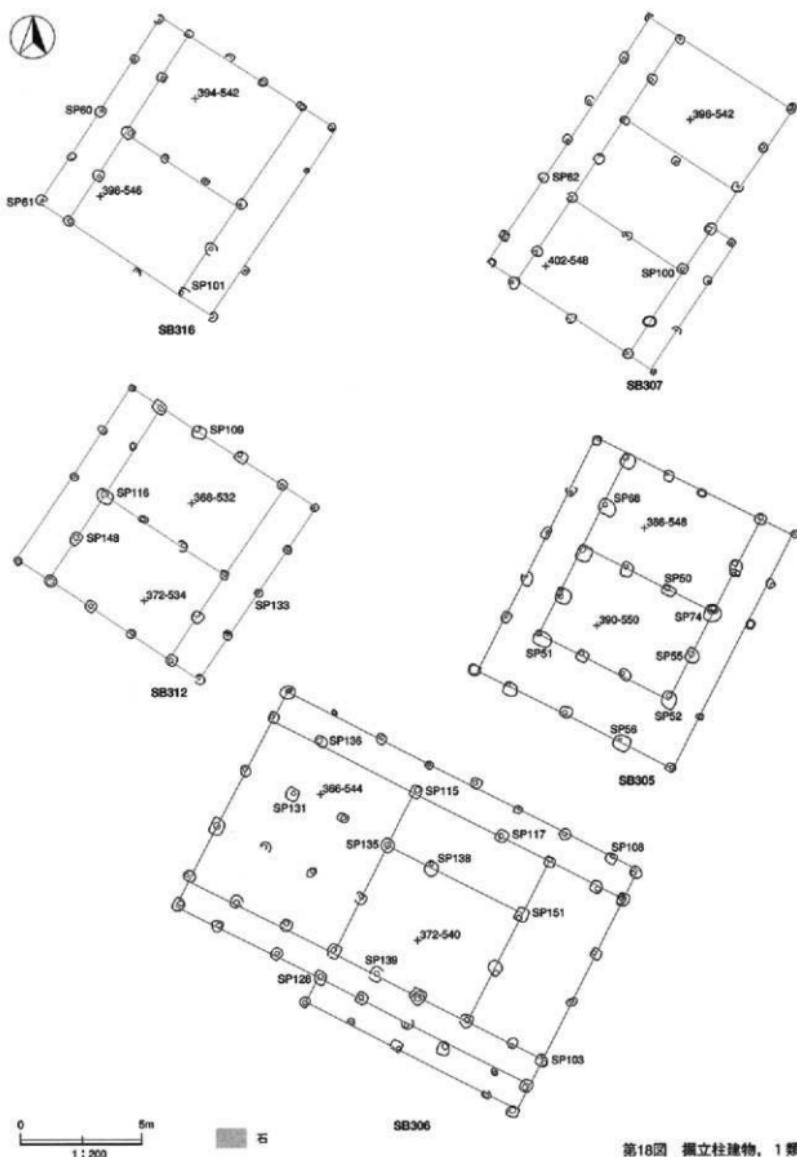
第15図 造構実測図 7



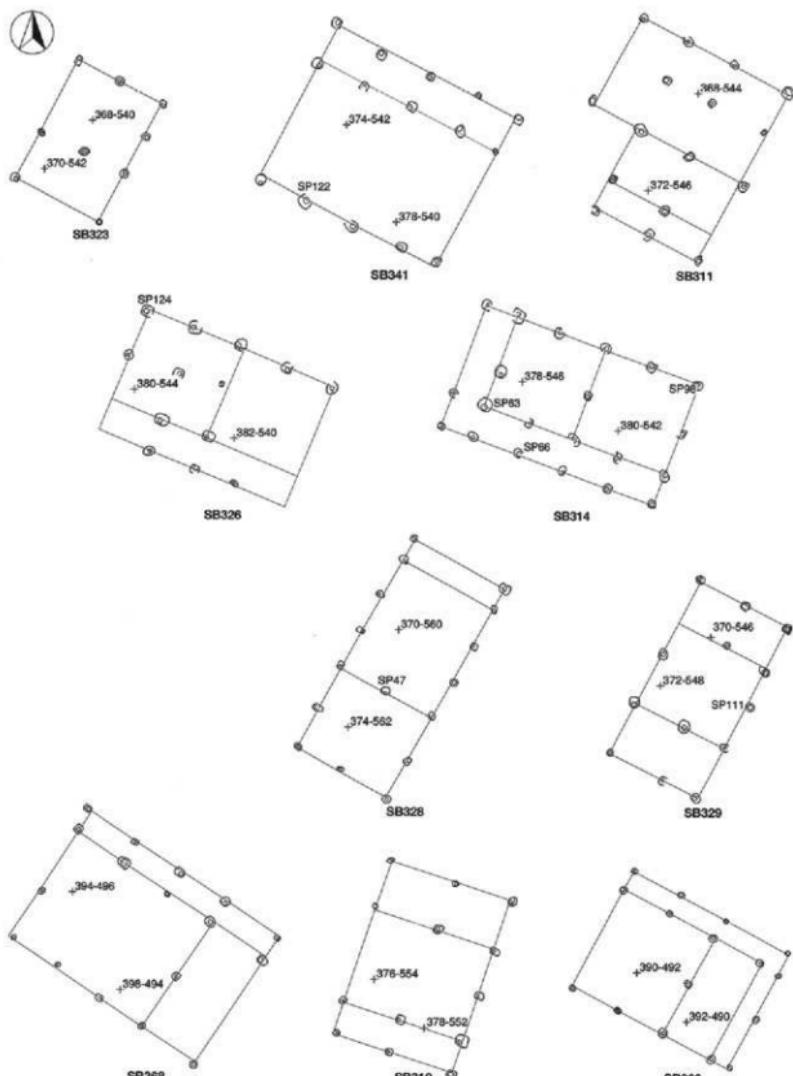
第16図 遺構実測図 8



第17図 据立柱建物、1類



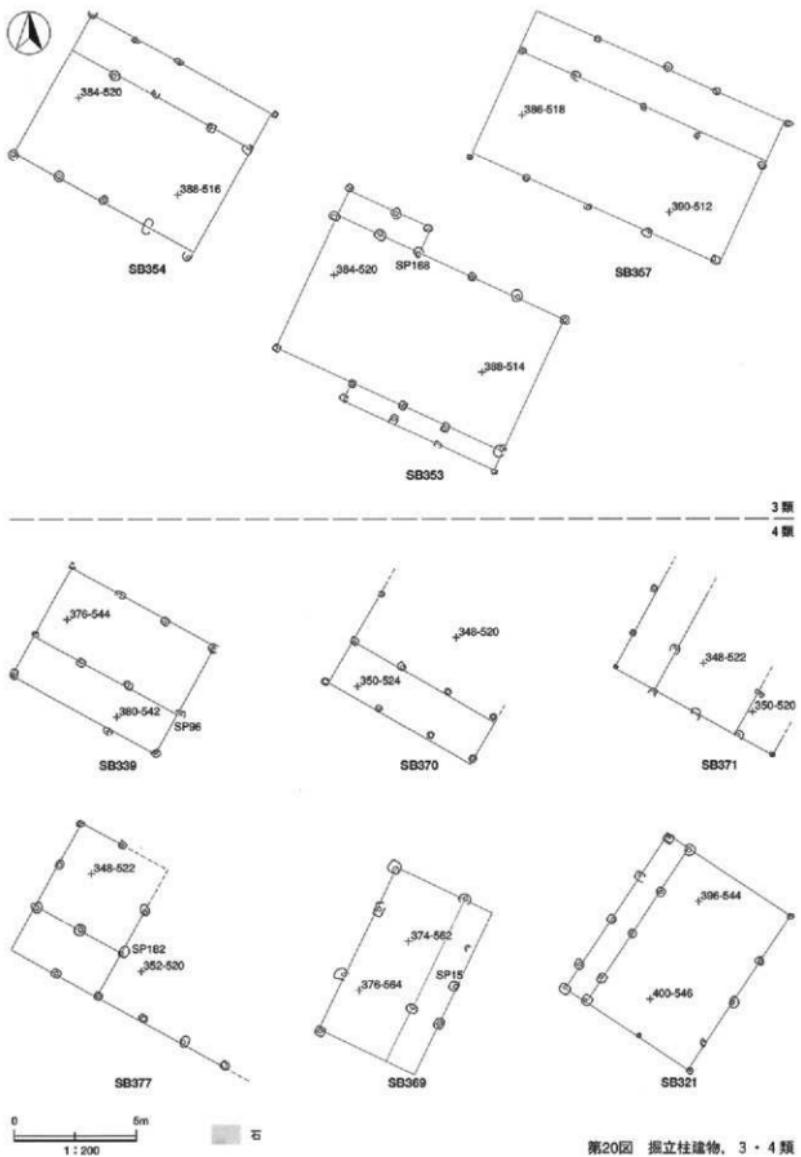
第18図 摺立柱建物、1類



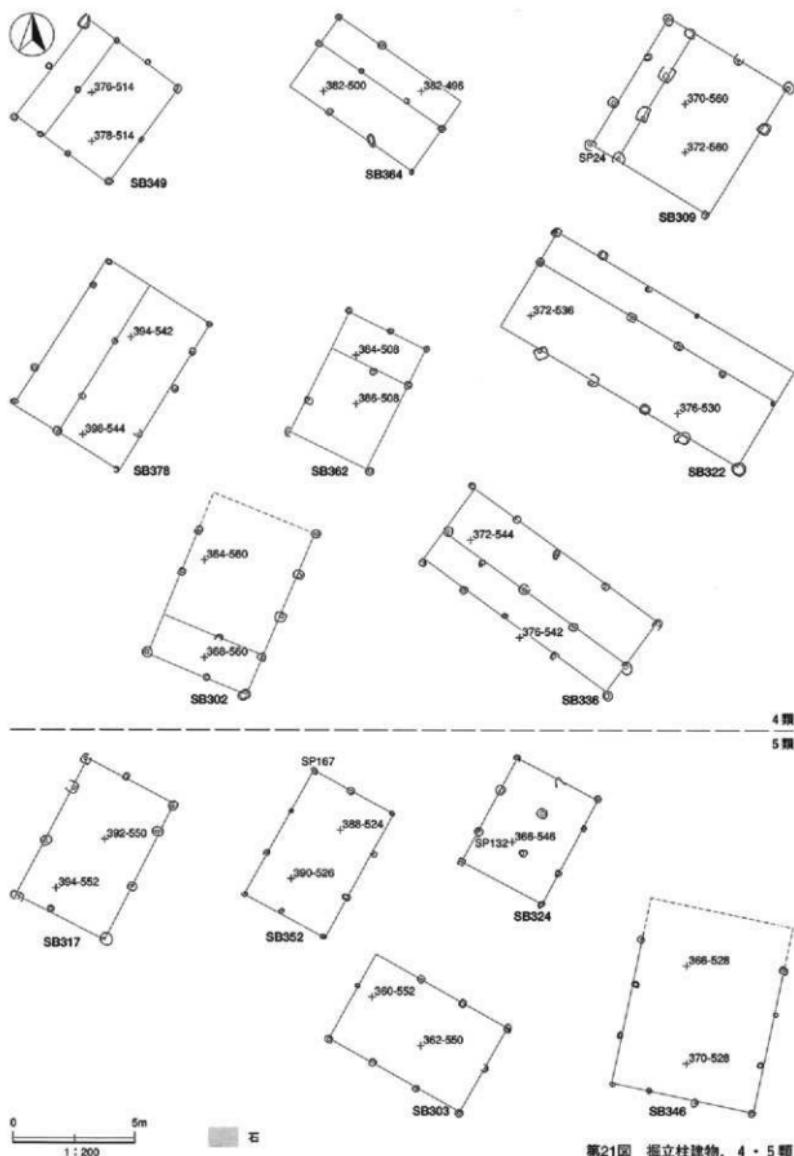
0 5m
1 : 200

石

第19図 捨立柱建物、2類

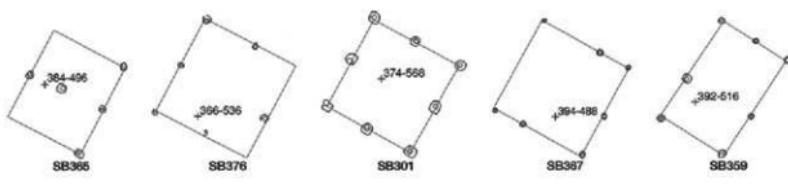
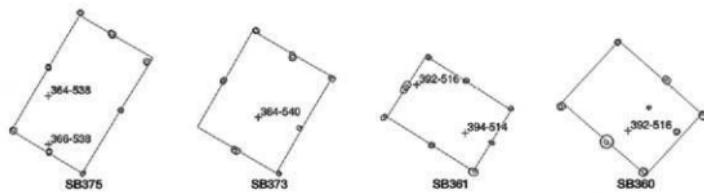
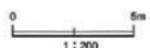
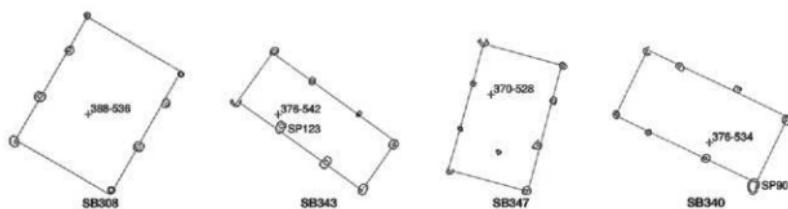
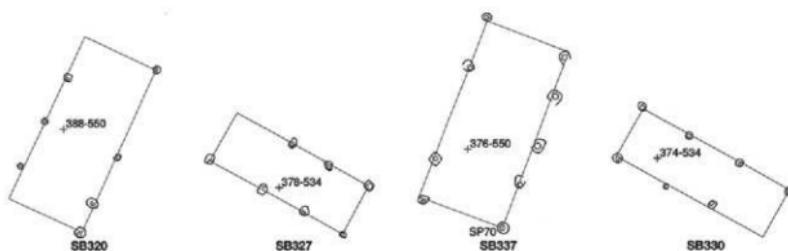


第20図 振立柱建物、3・4類



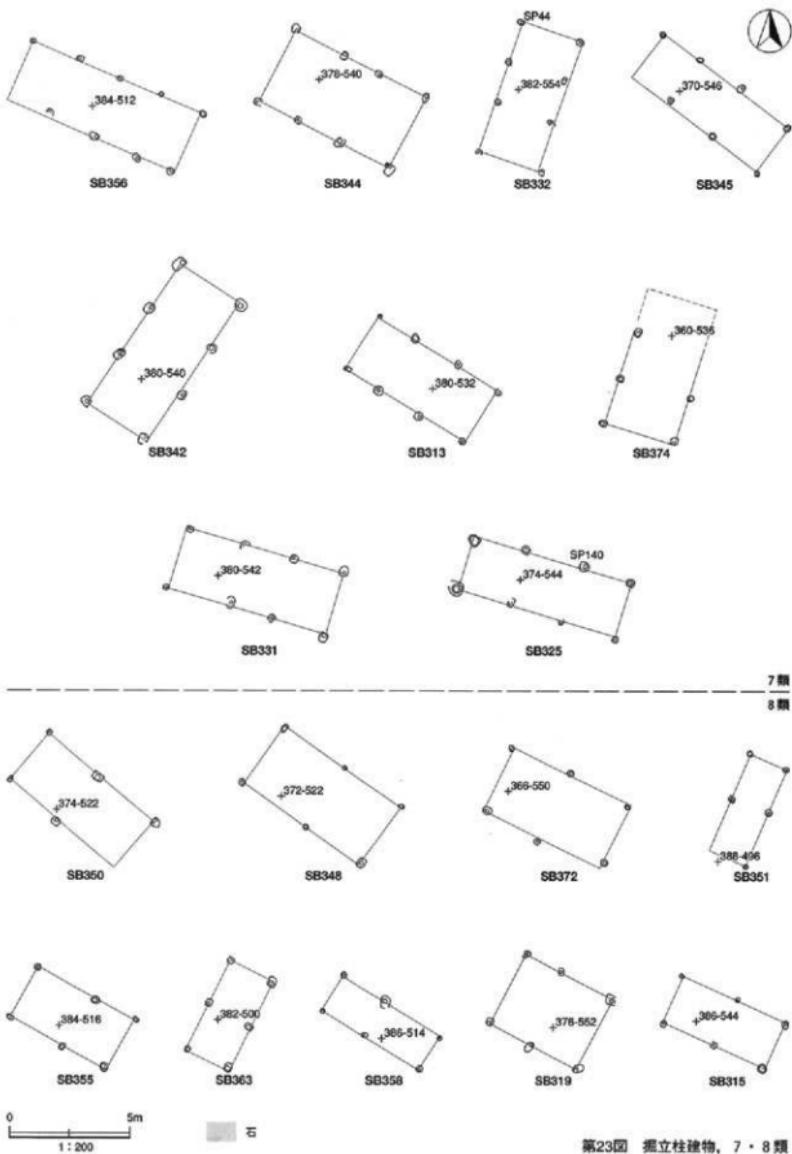
第21図 挿立柱建物、4・5類

(A)

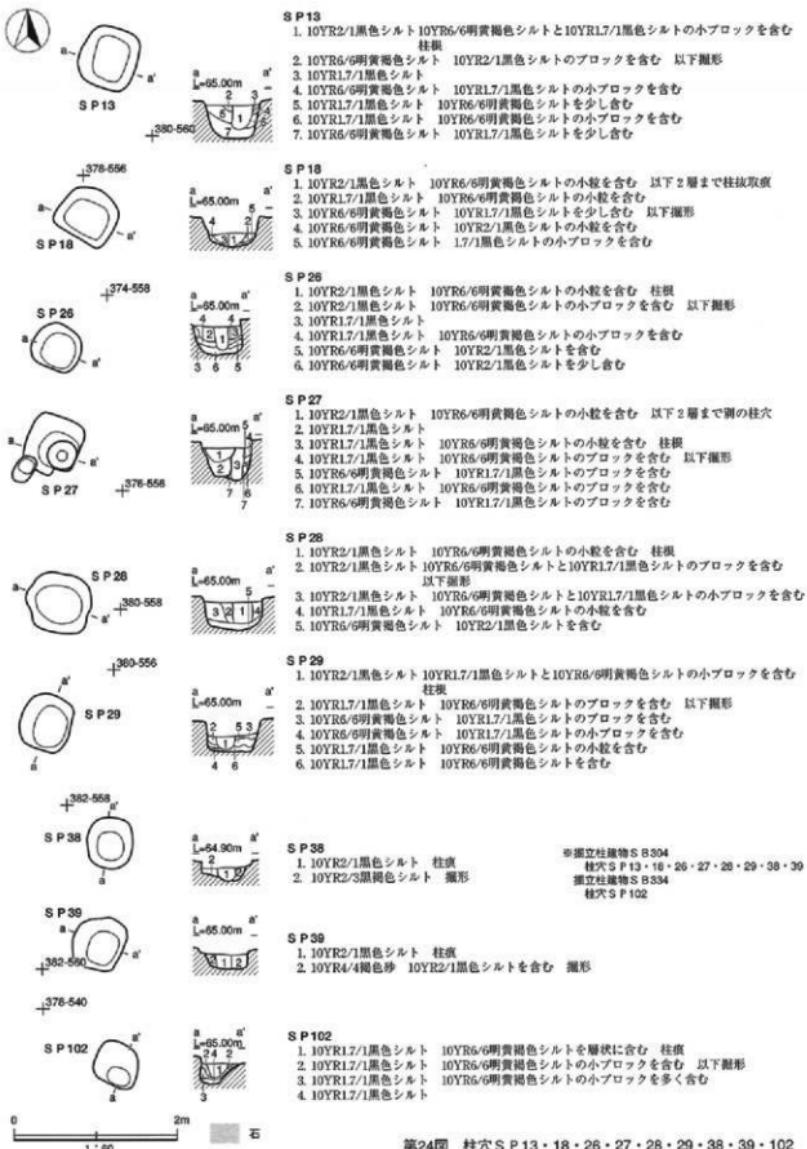
6類
7類

石

第22図 据立柱建物、6・7類



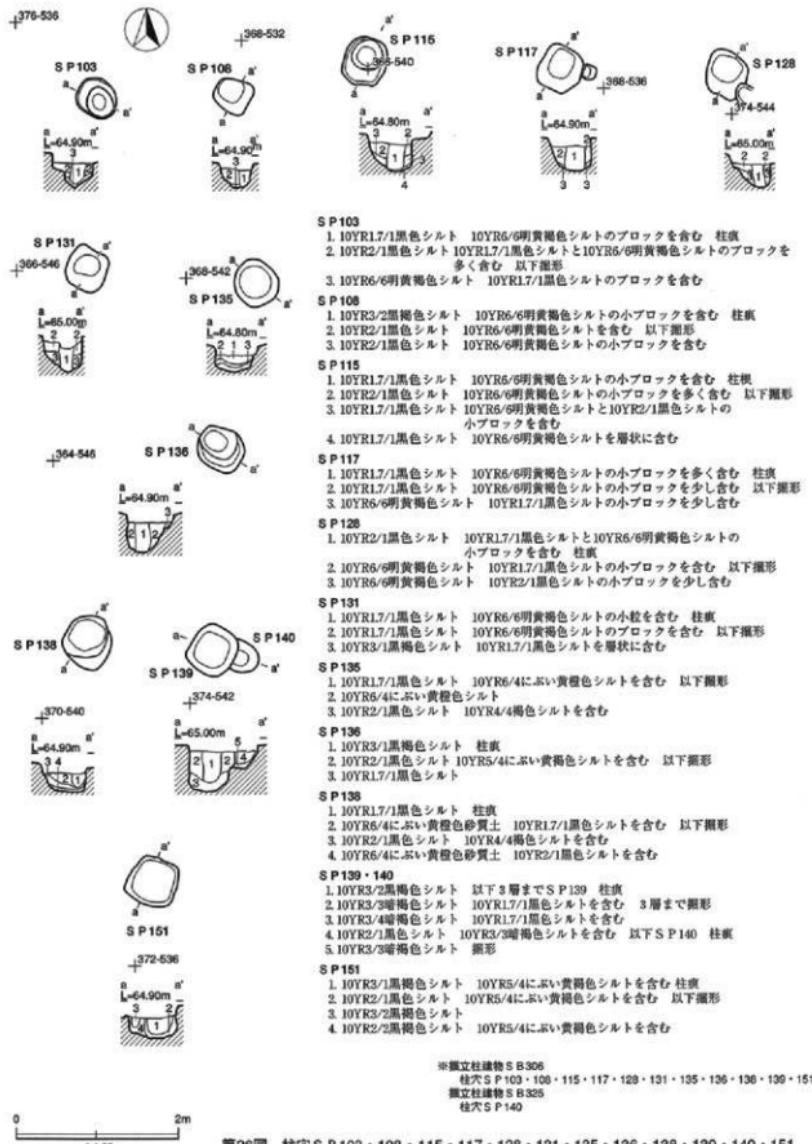
第23図 捨立柱建物、7・8類



第24図 柱穴 S P 13・18・26・27・28・29・38・39・102



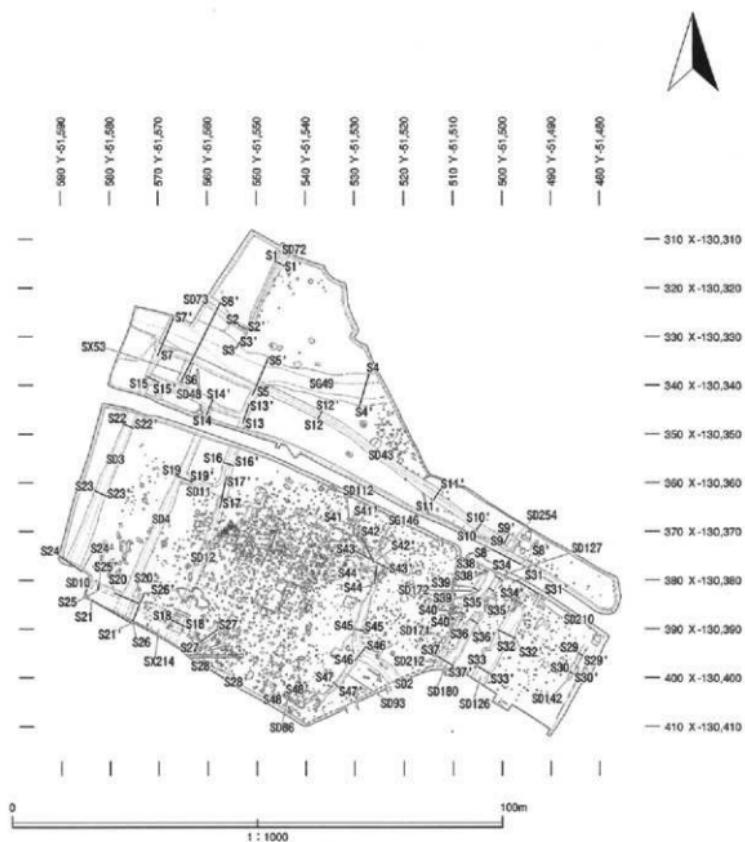
第25図 柱穴 S P 60 · 61 · 101 · 102 · 100 · 109 · 116 · 148 · 51 · 52 · 55 · 56 · 68



第26図 柱穴 S P 103・108・115・117・128・131・135・136・138・139・140・151

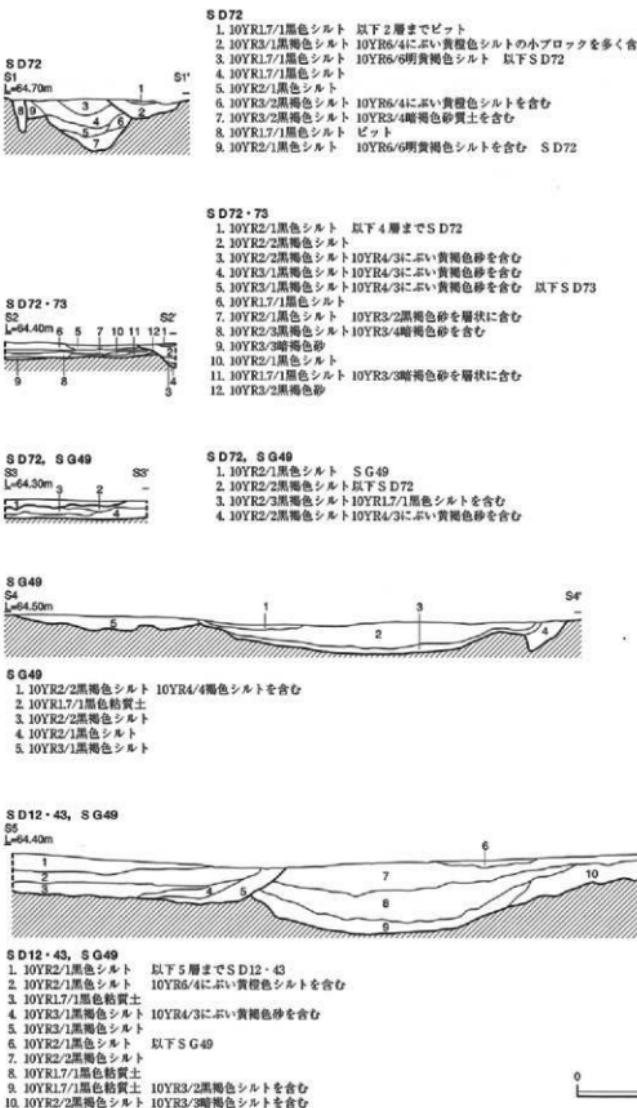


第27図 柱穴 S P 122・124・63・123

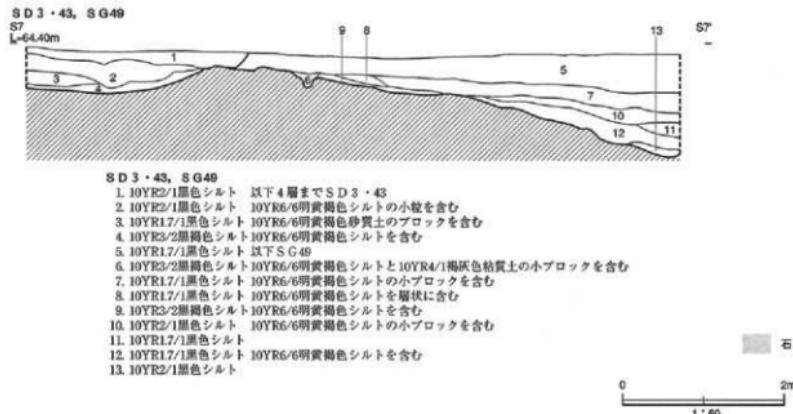
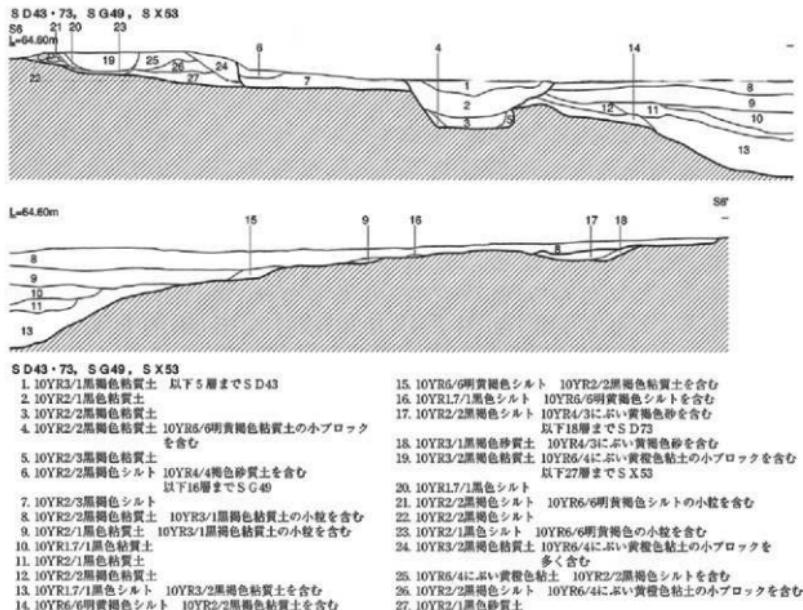


*S○○の番号の示す位置が、第29～38図に掲載された断面図のセクションポイントである。

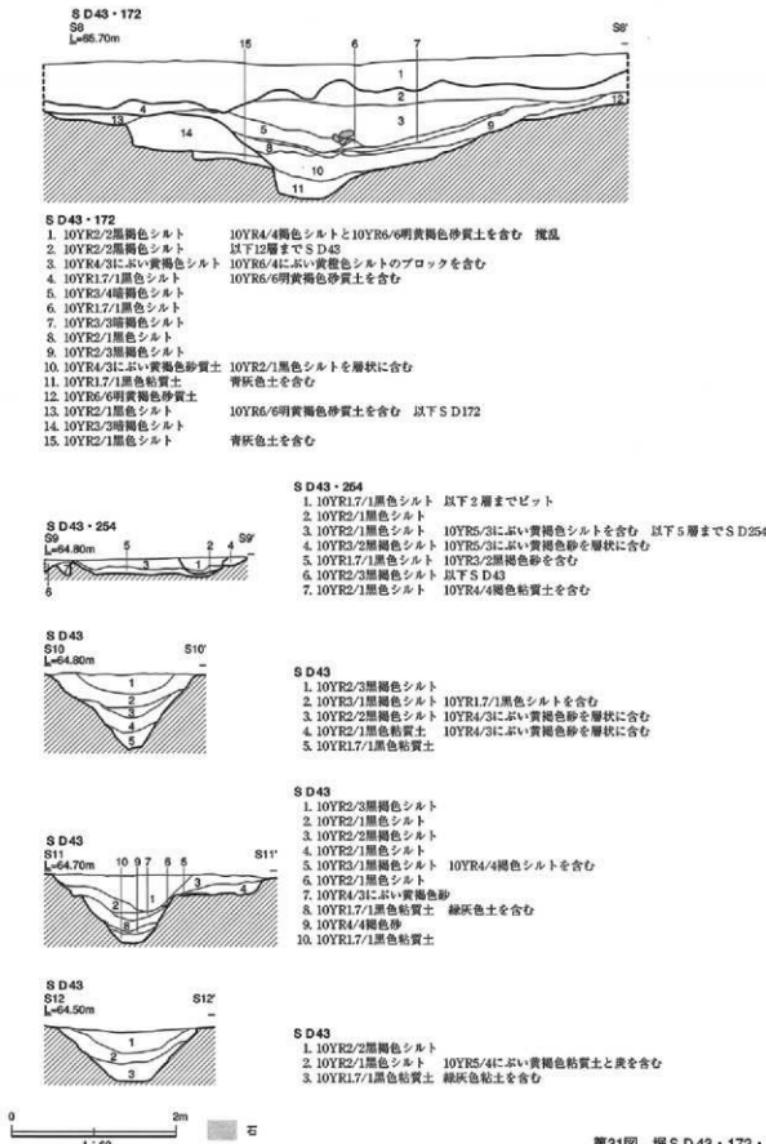
第28図 堀・溝・池 S G146のセクションポイント配置



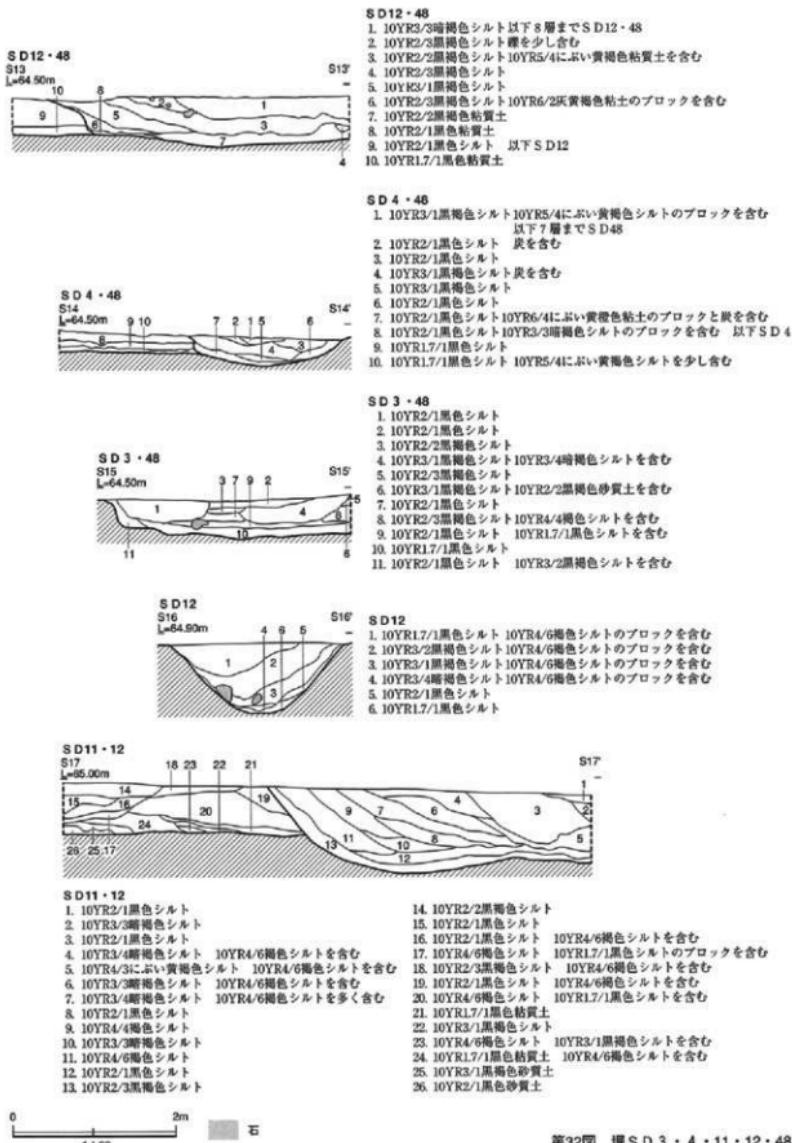
第29図 溝 S D72 + 73, 堤 S D12 + 43, 川 S G49



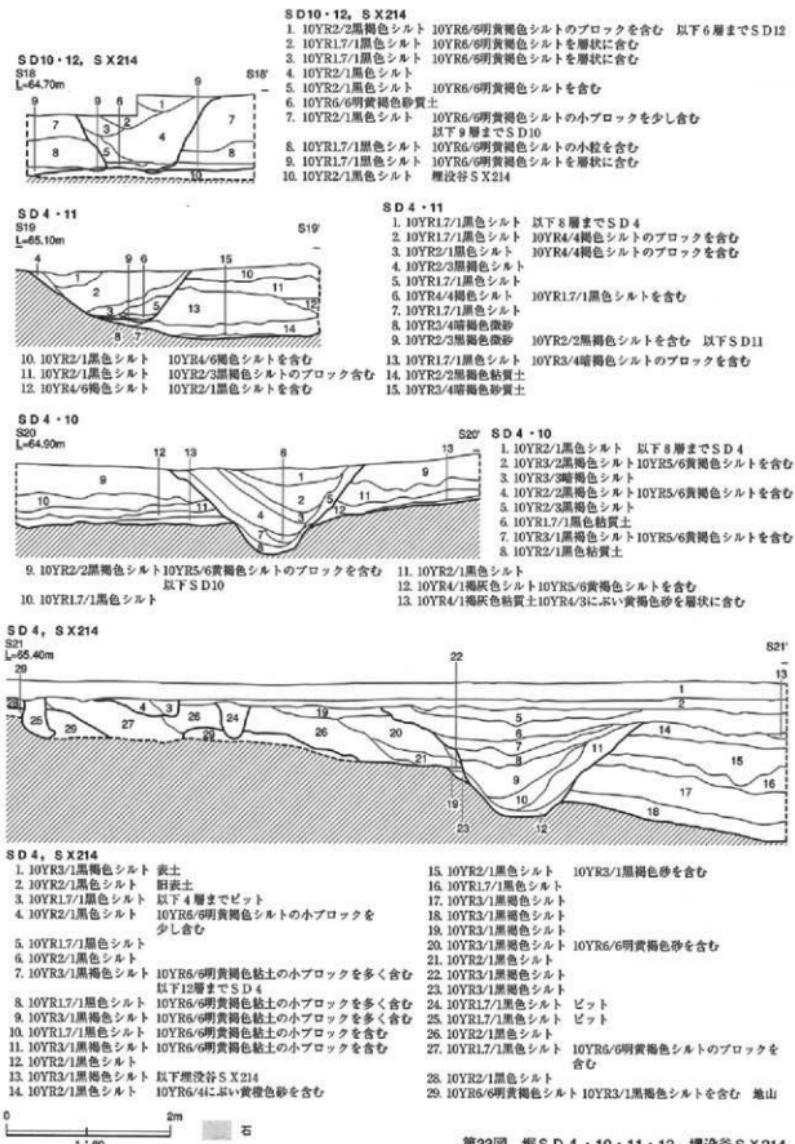
第30図 溝 S D 73, 堀 S D 3・43, 川 S G 49, 性格不明造構 S X 53



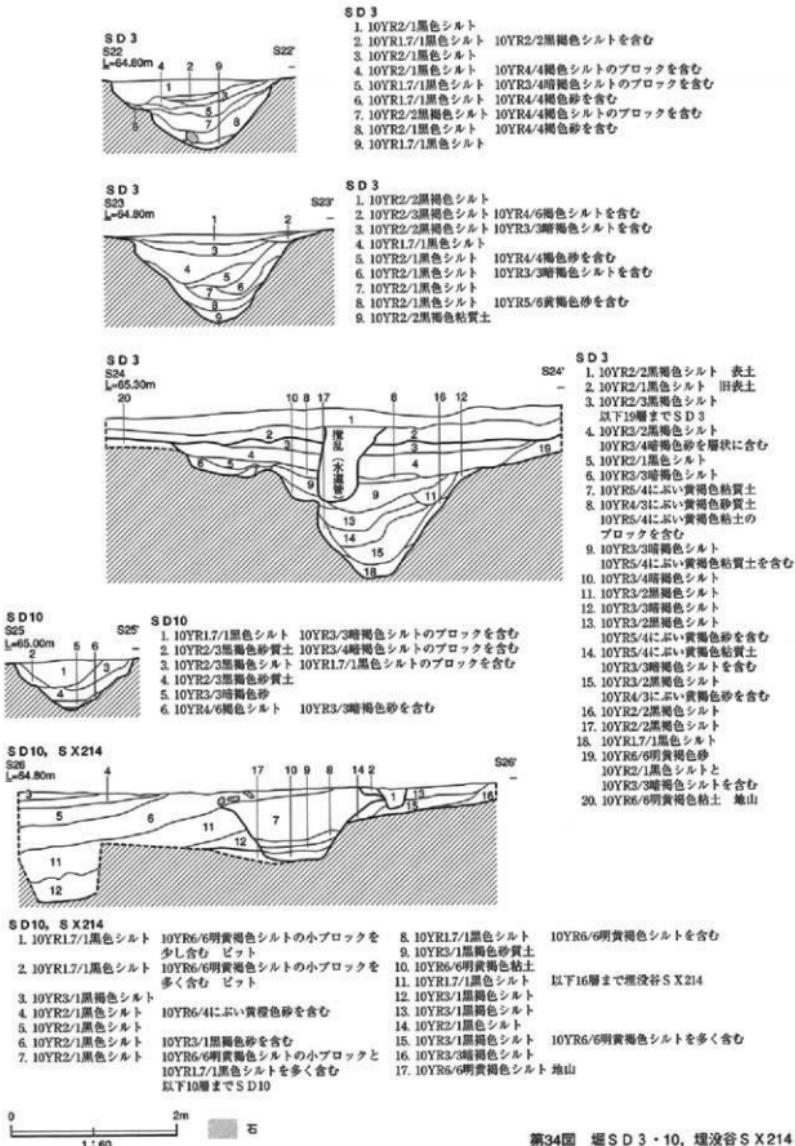
第31図 堀 S D 43 + 172・254



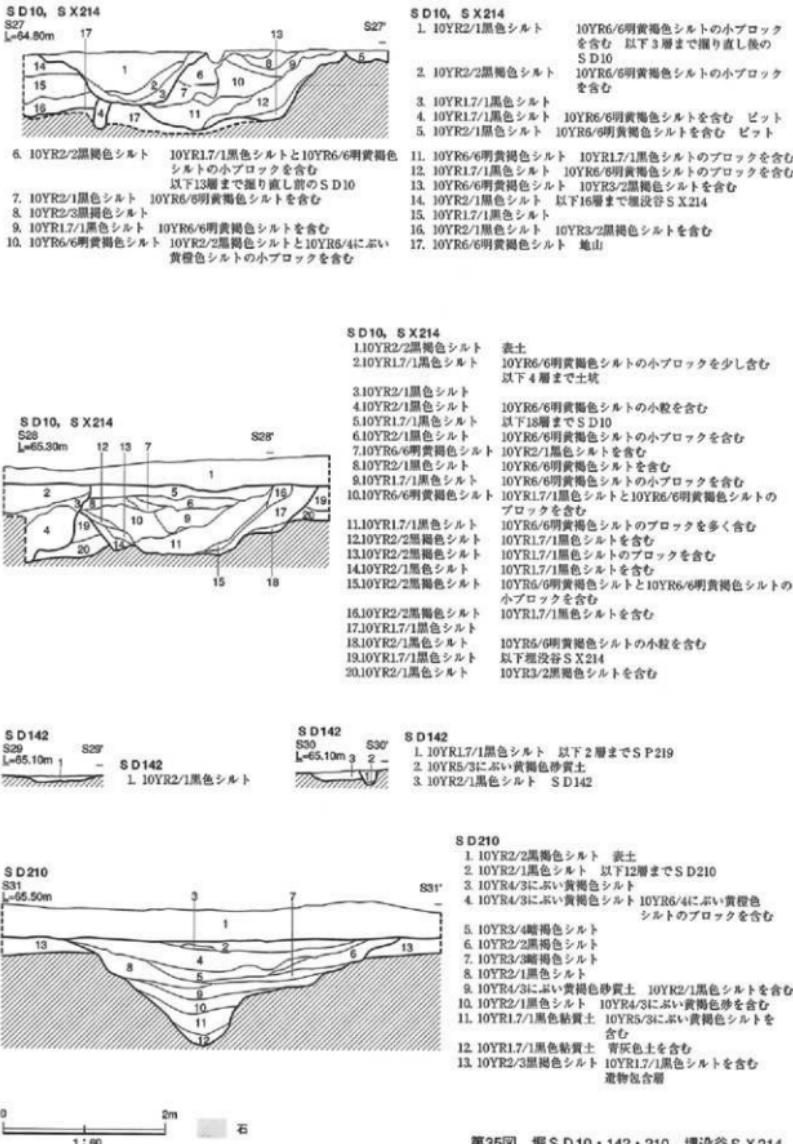
第32図 堤 S D 3 - 4 - 11 - 12 - 48



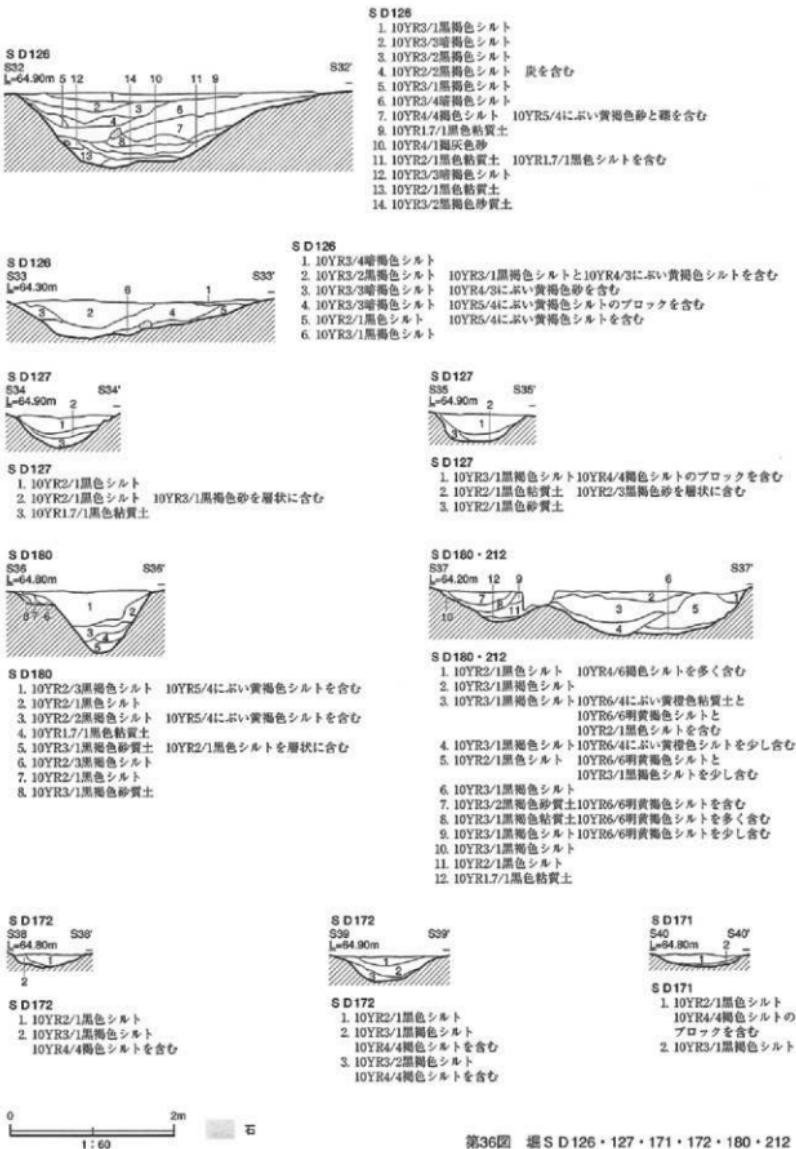
第33図 堀SD 4・10・11・12, 堀没谷SX 214



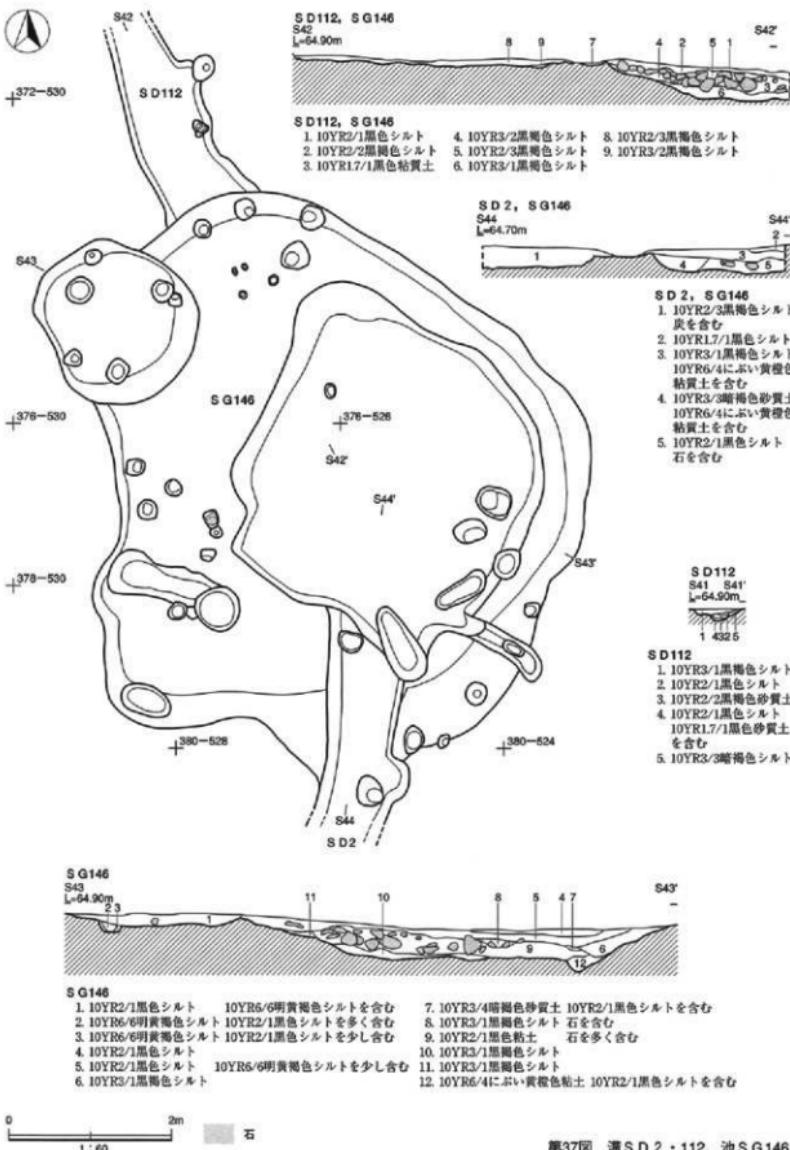
第34図 堀 S D 3・10, 埋没谷 S X214



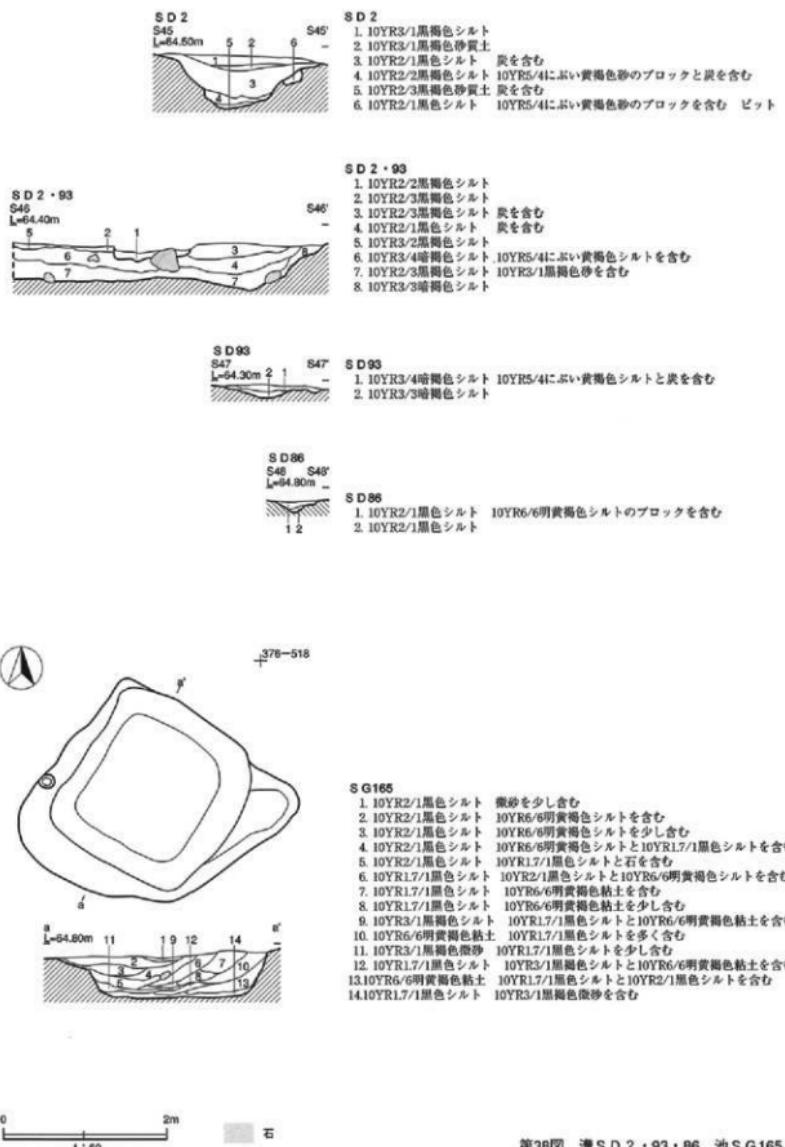
第35図 烟 S D 10・142・210, 埋没谷 S X 214

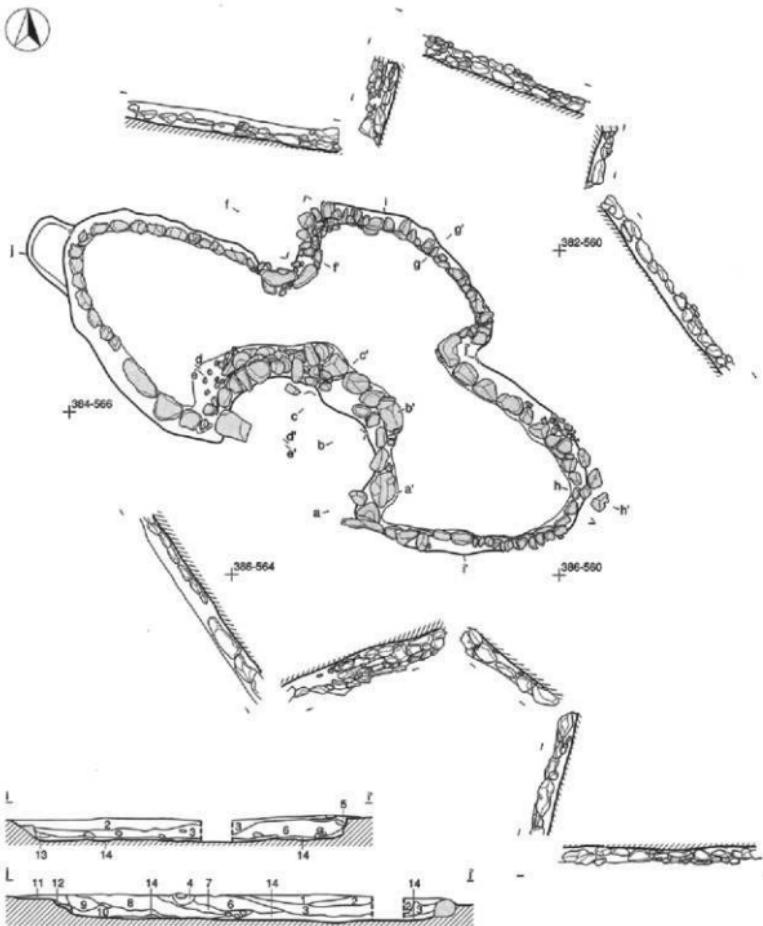


第36図 堀 S D 126・127・171・172・180・212



第37図 溝 S D 2・112, 池 S G 146





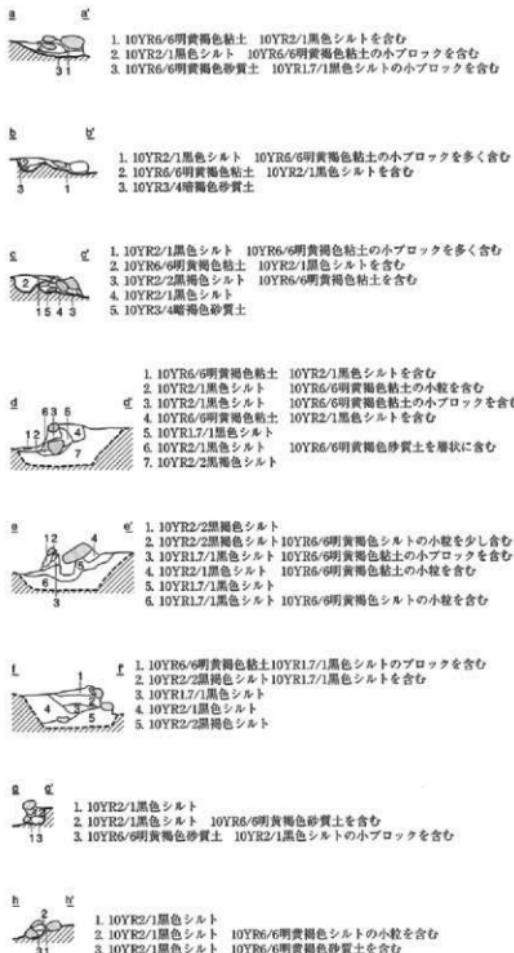
S G37

- L 1. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR17/1黒色シルトを少し含む
 2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
 3. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと灰・堆土・石を少し含む
 4. 10YR17/1黒色シルト 灰・堆土を含む ピット
 5. 10YR2/1黒色シルト 10YR4/1褐色灰色砂を含む
 6. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと石を含む
 7. 10YR2/1黒色シルト 石を含む
 8. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
 9. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと灰を少し含む
 10. 10YR2/1黒色シルト 灰を含む
 11. 10YR2/1黒色シルト
 12. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む
 13. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂を含む
 14. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂シルトと灰・堆土を多く含む

※水平ラインの標高は全て65.00mである。



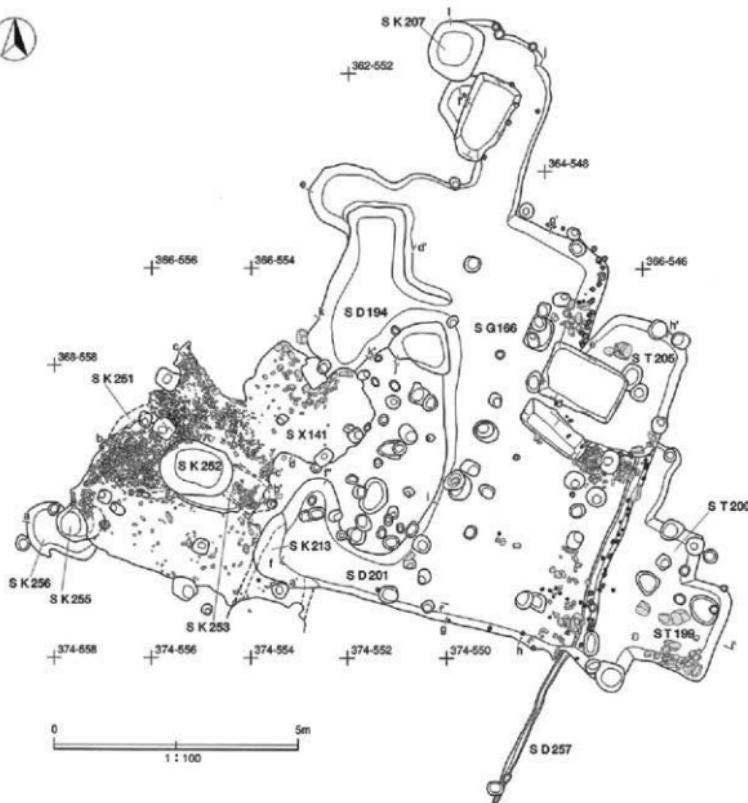
第39図 石組池 S G37



※水平ラインの標高は全て65.00mである。



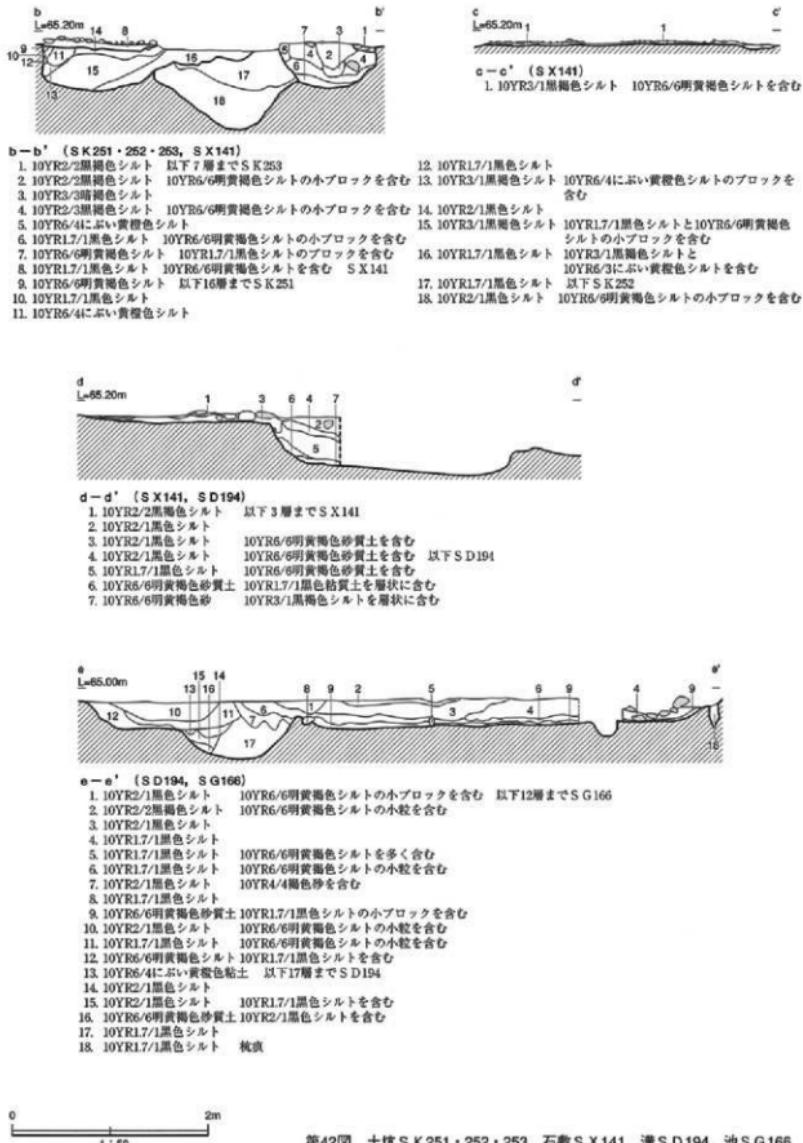
第40図 石組池 S G37



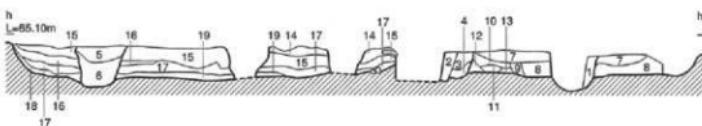
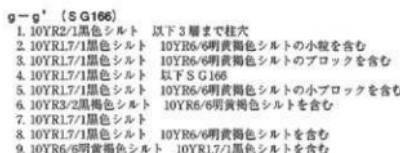
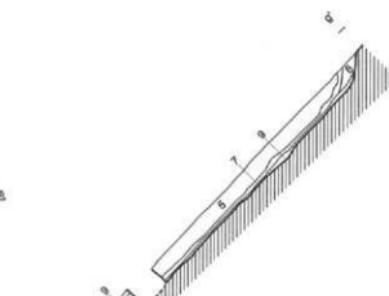
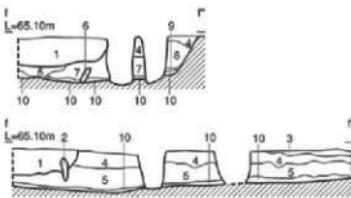
- a-a' (SX141, SD201, SK255-256)
1. 10YR2/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む 以下2層までSX141
 2. 10YR4/2黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトと10YR17/1黒色シルトの小ブロックを含む
 3. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR17/1黒色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む SK256
 4. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを含む 以下6層までSD201
 5. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む
 6. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色砂質土を含む
 7. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む 以下8層までピット
 8. 10YR17/1黒色シルト
 9. 10YR6/6明黄褐色砂質土 以下SK255
 10. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR17/1墨色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む



第41図 池SG166と石敷SX141、その周辺の遺構

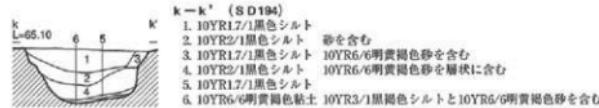
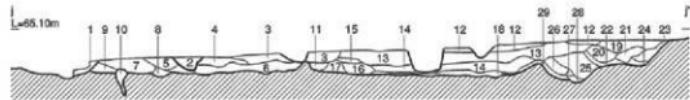
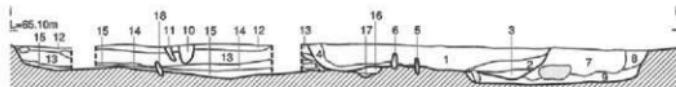


第42図 土坑 SK 251・252・253, 石敷 SX 141, 溝 SD 194, 池 SG 166



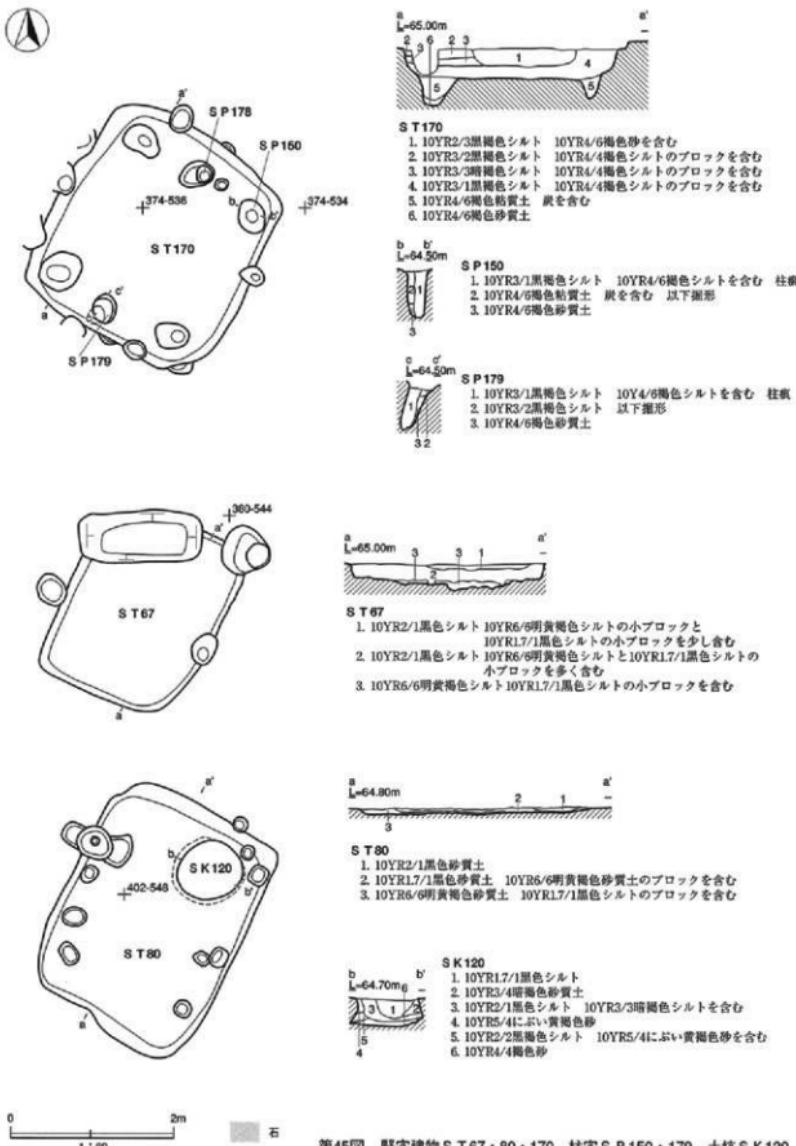
0 2m
1:50

第43図 池 S G 166, 溝 S D 201, 土坑 S K 213, 壁穴種物 S T 205

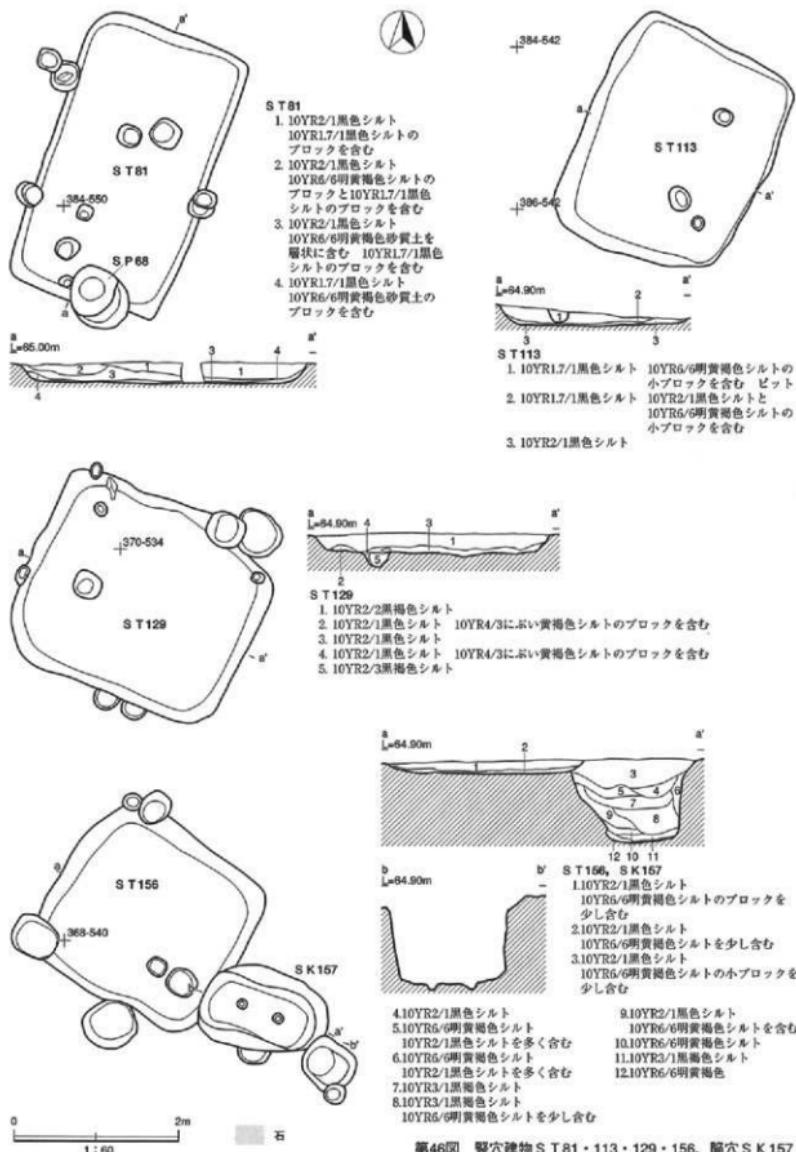


0 2m
1 : 50

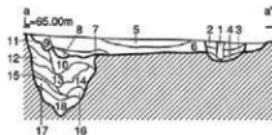
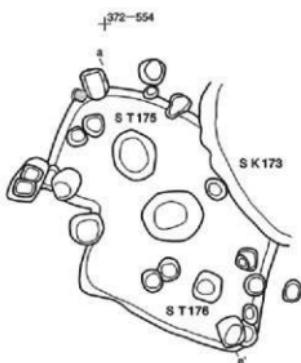
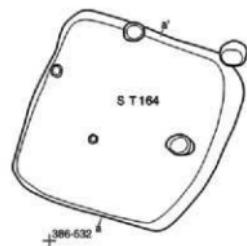
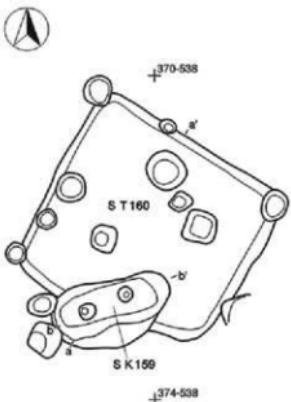
第44図 池S G166、壁穴建物S T199・200、溝S D194、土坑S K207



第45図 壁穴建物 S T 67・80・170, 柱穴 S P 150・179, 土坑 S K 120



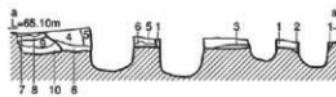
第46図 鑿穴遺物 S T81・113・129・156、隙穴 S K157

**S K 159, S T 160**

1. 10YR3/1黒褐色シルト 以下4層まで柱穴 穴底
2. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを多く含む
4層まで層底
3. 10YR1/7/1黒色シルト
4. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを多く含む
5. 10YR2/1黒色シルト 以下9層まで S T 160
6. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックと炭を含む
7. 10YR2/1黒色シルト
8. 10YR3/1黒褐色シルト
9. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
10. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
以下 S K 159
11. 10YR2/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを多く含む
12. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒褐色シルトを多く含む
13. 10YR6/4/1にい 黄褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
14. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む
15. 10YR6/4/1にい 黄褐色シルト
16. 10YR6/6明黄褐色シルト
17. 10YR3/1黒褐色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを少し含む
18. 10YR3/1黒褐色シルト

**S T 164**

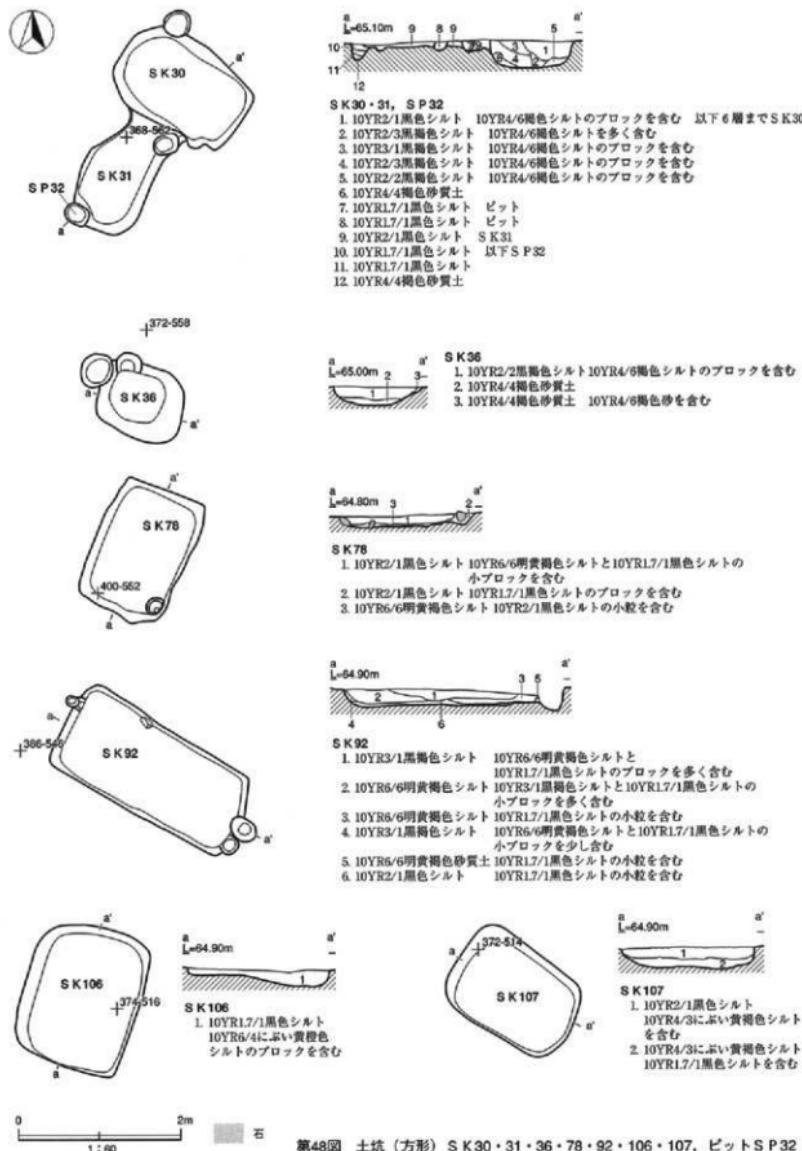
1. 10YR4/4褐色砂質土 10YR1/7/1黒色シルトのブロックを含む
2. 10YR3/2黒褐色砂質土

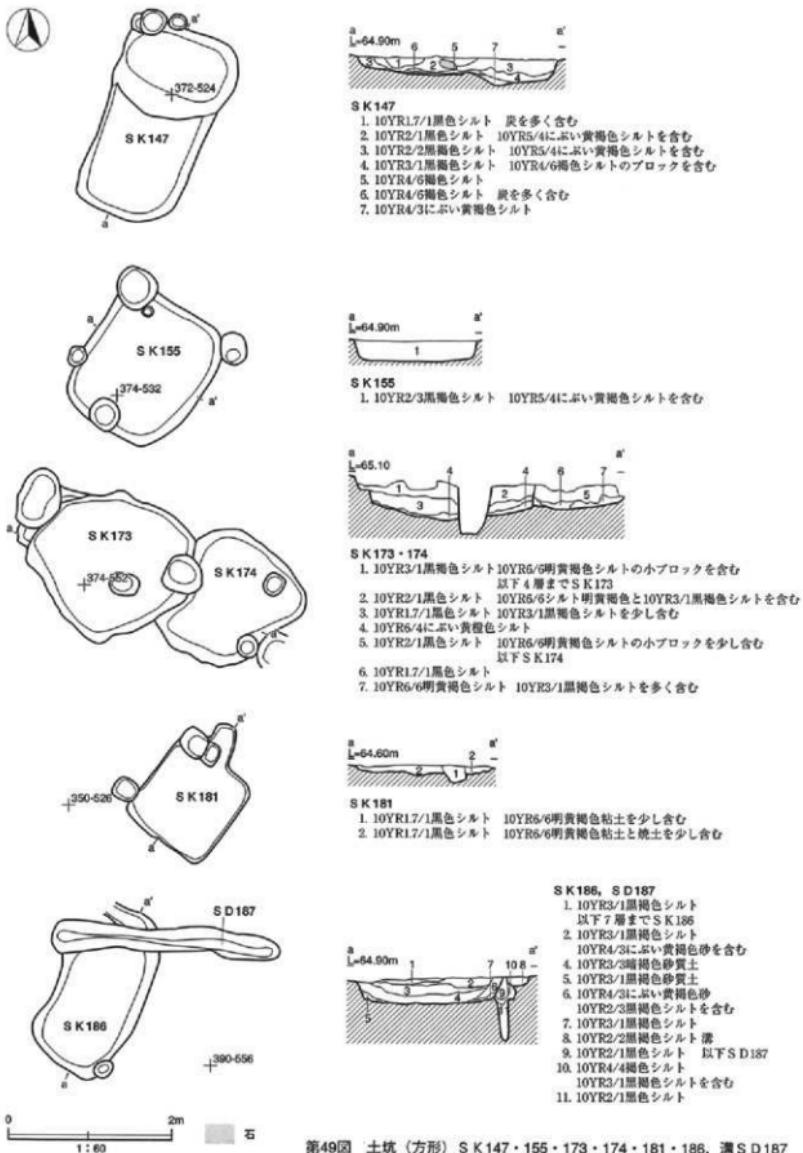
**S T 175・176, S X 141**

1. 10YR3/3黒褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む 以下3層まで S T 176
2. 10YR3/4褐色砂質土 10YR6/4/1にい 黄褐色砂を含む
3. 10YR3/2黒褐色シルト
4. 10YR3/1黒褐色シルト 以下6層まで S T 175
5. 10YR3/2黒褐色シルト 10YR2/1黒色シルトのブロックを含む
6. 10YR2/2黒褐色シルト
7. 10YR2/2黒褐色シルト 以下 S X 141
8. 10YR2/1黒色シルト
9. 10YR2/3黒褐色シルト
10. 10YR4/3/1にい 黄褐色砂質土 10YR2/1黒色シルトを含む

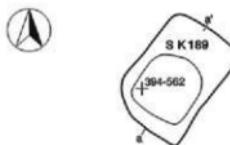


第47図 墓穴建物 S T 160・164・175・176, 石敷 S X 141, 騎穴 S K 159



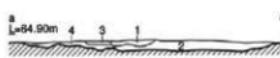
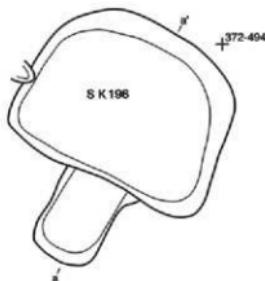


第49図 土坑（方形）SK 147・155・173・174・181・186、溝SD 187



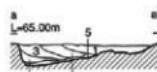
SK 189

1. 10YR6/6明黄褐色粘質土 10YR17/1黒色シルトの小ブロックを含む
2. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトを少し含む
3. 10YR6/6明黄褐色粘質土 10YR17/1黒色シルトのブロックを含む



SK 196

1. 10YR2/1黒色粘質土
2. 10YR17/1黒色粘土
3. 10YR5/4に赤褐色粘質土
4. 10YR4/4褐色粘質土



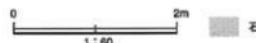
SK 209

1. 10YR17/1黒色シルト 灰を含む
2. 10YR3/2暗褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む
3. 10YR3/4暗褐色シルト 10YR2/1黒色シルトを含む
4. 10YR2/1黒色シルト

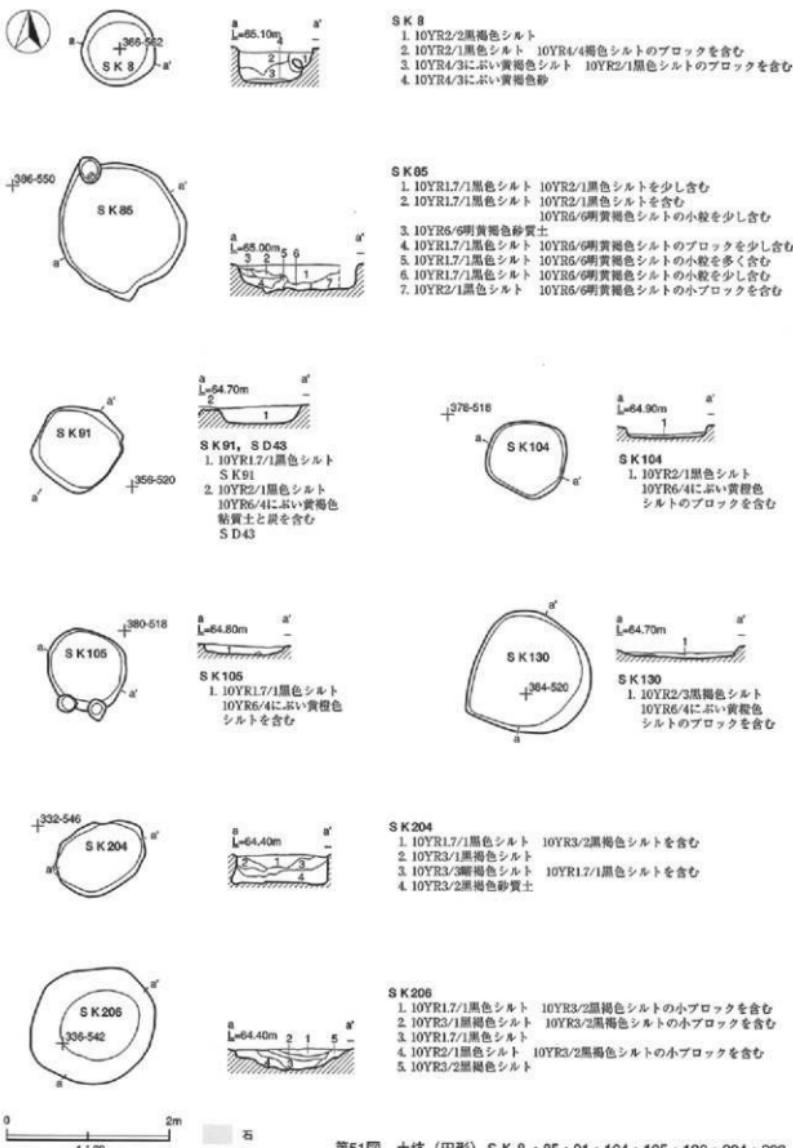


SK 215

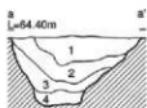
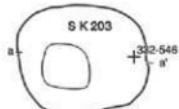
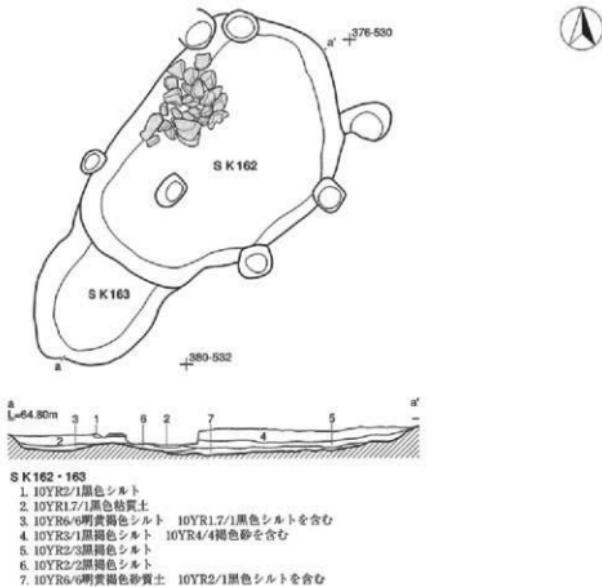
1. 10YR2/1黒色シルト
2. 10YR17/1黒色シルト 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロックを含む
3. 10YR6/6明黄褐色シルト 10YR17/1黒色シルトを含む



第50図 土坑（方形）SK 189・196・209・215



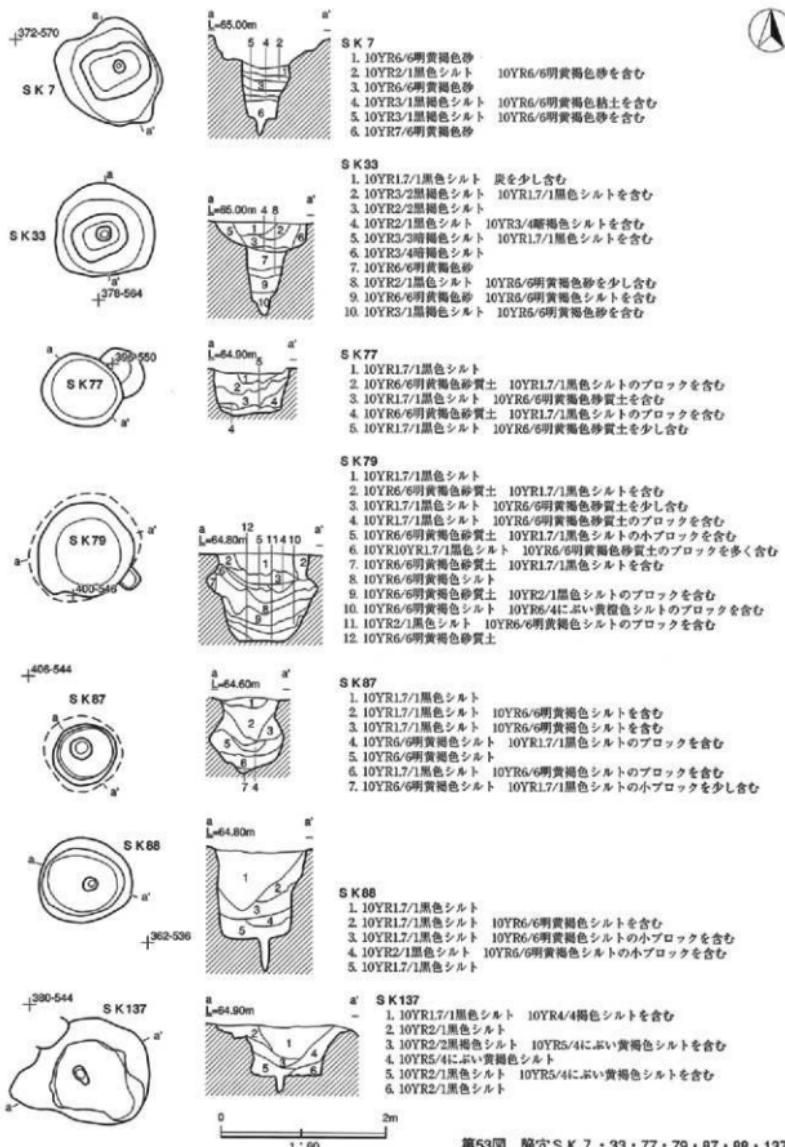
第51図 土坑（円形）SK 8・85・91・104・105・130・204・206



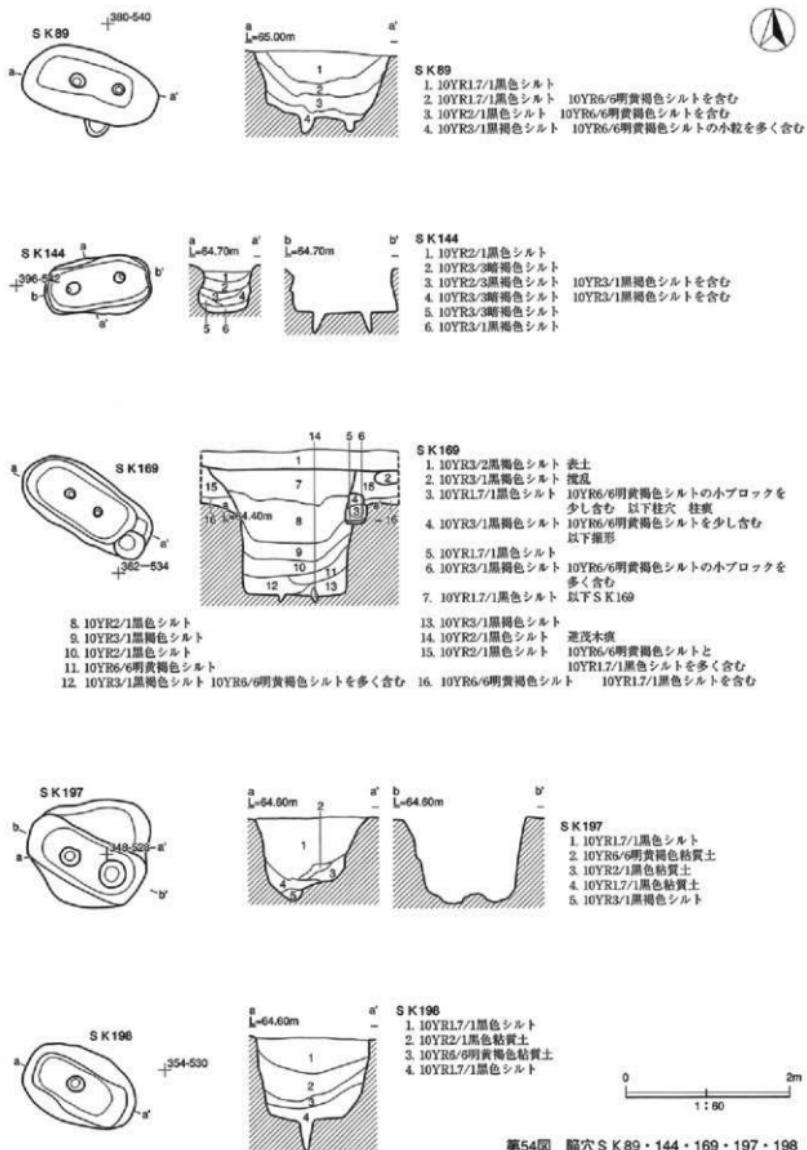
- SK 203
1. 10YR4/4褐色シルト
10YR3/4暗褐色砂を含む
 2. 10YR3/2黒褐色シルト
10YR1.7/1黒色シルトを含む
 3. 10YR3/3暗褐色シルト
 4. 10YR3/4暗褐色シルト



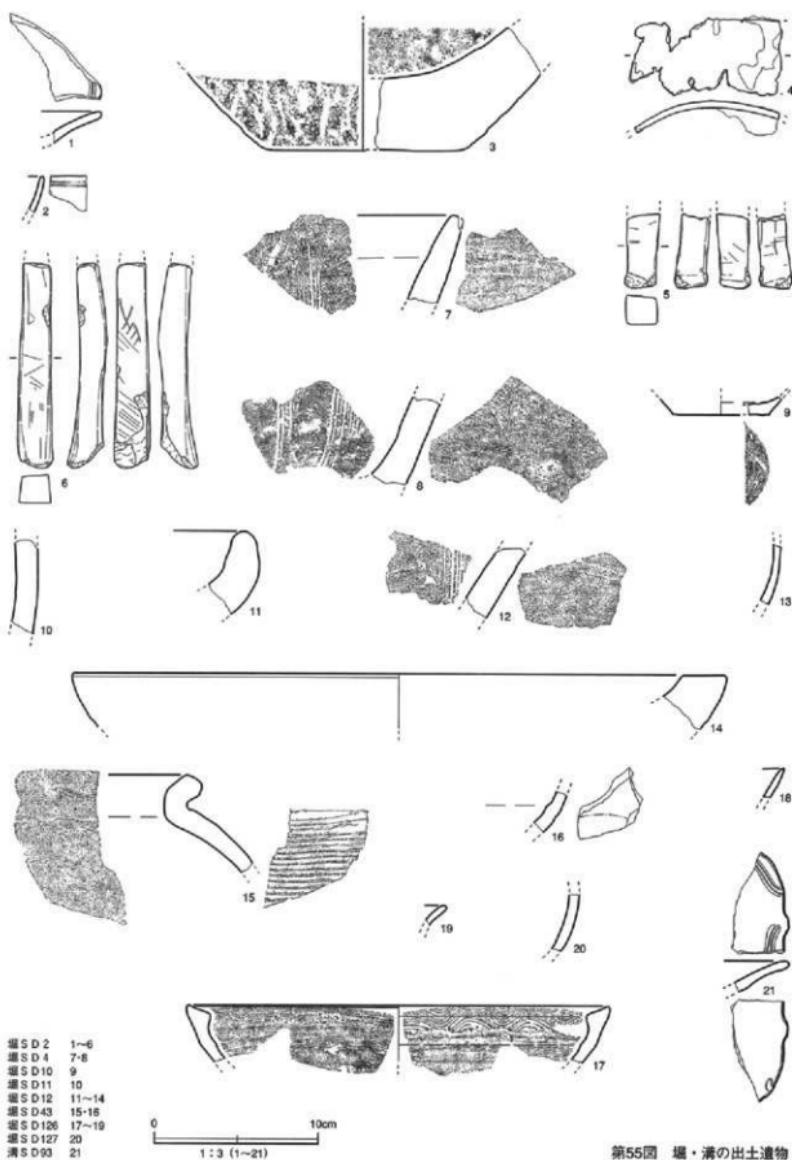
第52図 土坑（円形）SK 162・163・203



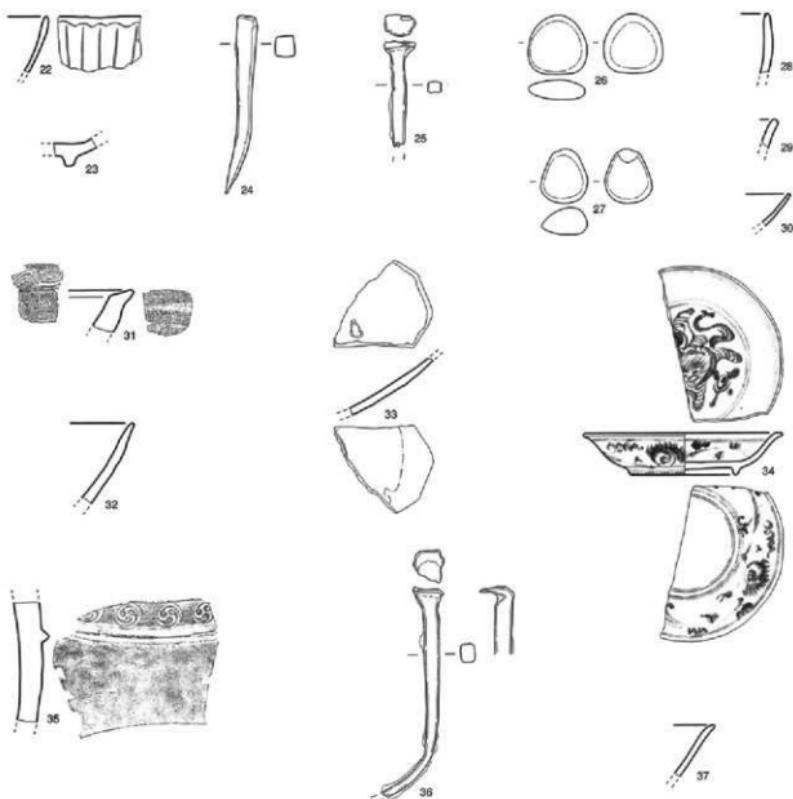
第53回 龍穴SK 7・33・77・79・87・88・137



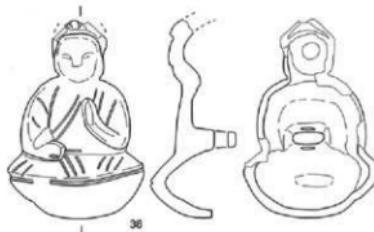
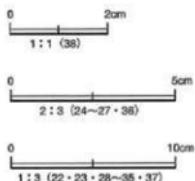
第54図 鎖穴 SK 89・144・169・197・198



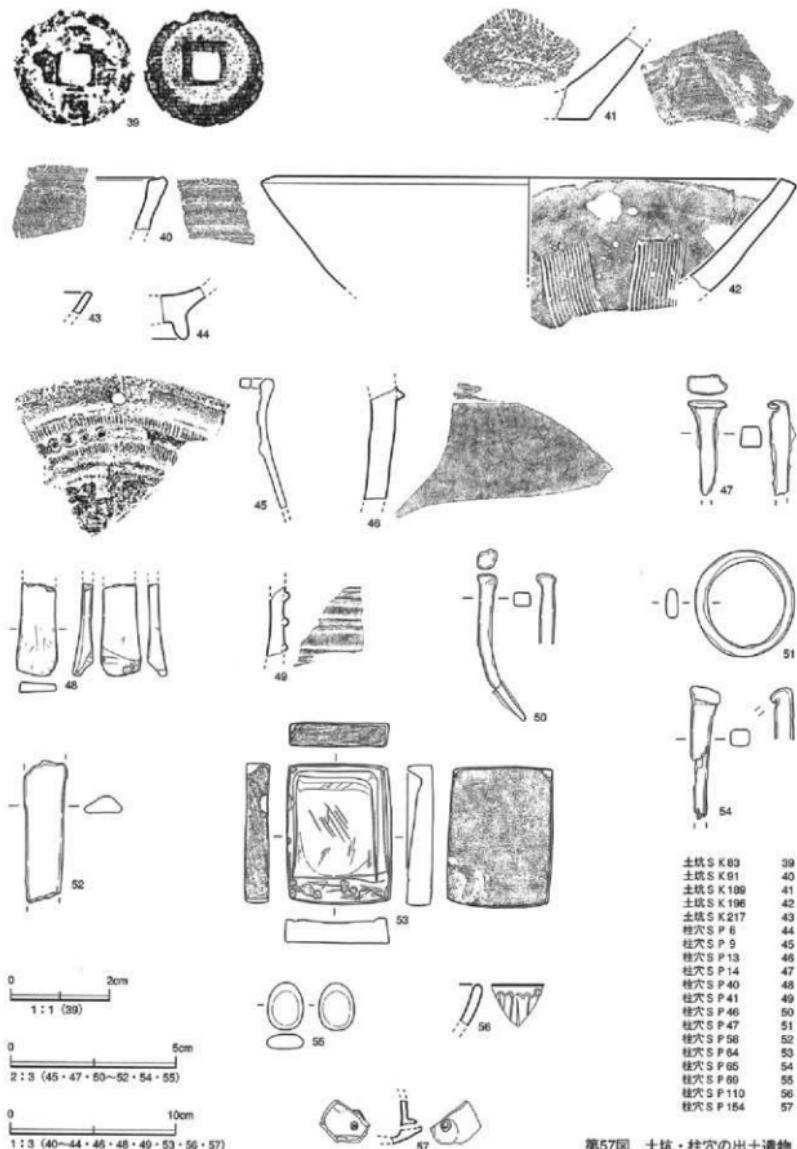
第55図 塚・溝の出土遺物



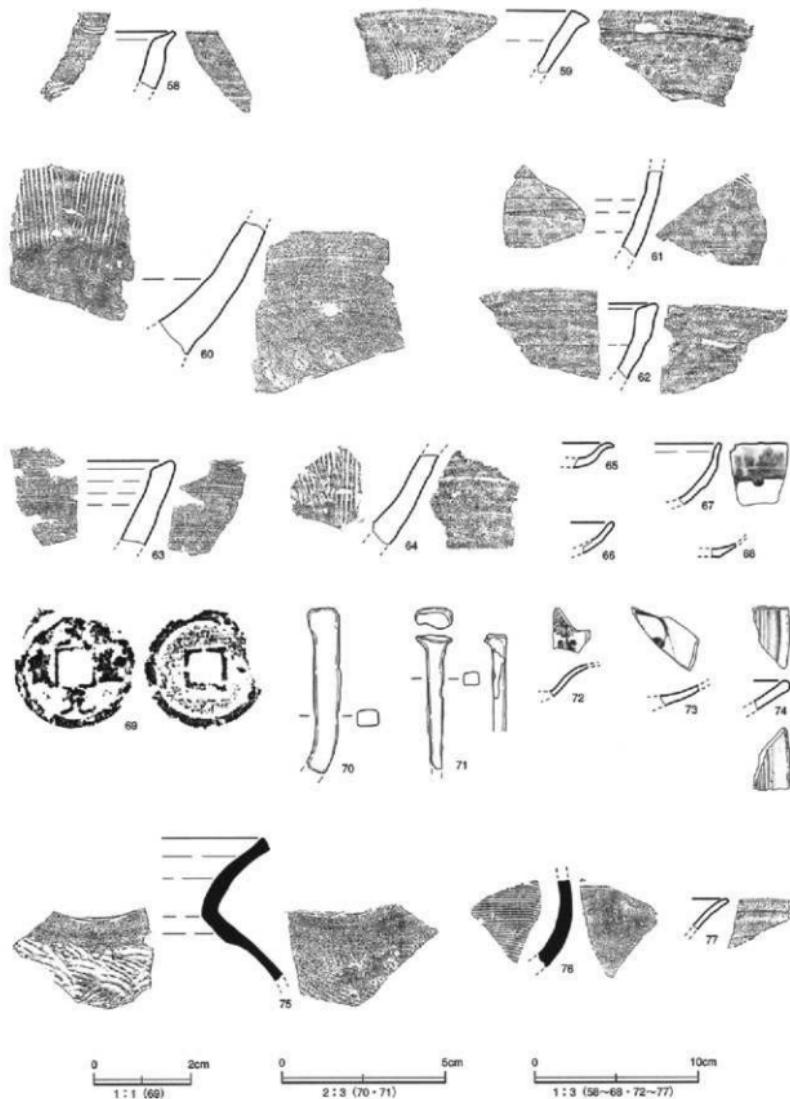
池 S G 165 22~23
 石組池 S G 37 24~25
 石敷 S 141 26~30
 池 S G 166 31~34
 聖穴建物 S T 129 35
 聖穴建物 S T 160 36
 聖穴建物 S T 170 37~38



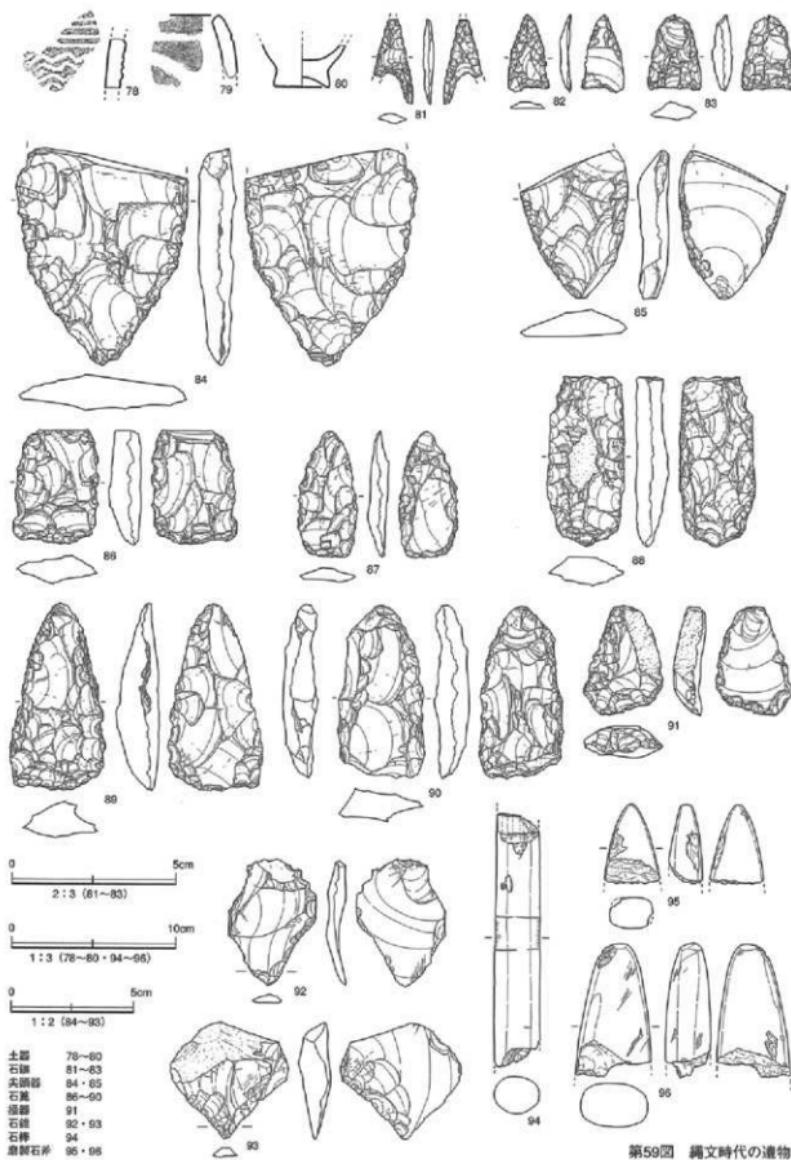
第56図 池・石組池・聖穴建物の出土遺物



第57図 土坑・柱穴の出土遺物



第56図 遺物包含層、表土、出土地点不明、近世・古代の土器



第59図 縄文時代の遺物

写真図版

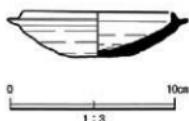


寄託遺物

この須恵器の坏は、上野遺跡および小反遺跡の発掘調査に従事していただいた作業員である故杏澤昭二氏より寄託されたものである。

県内では出土例の少ない7世紀末の坏であり、最上郡内では皆無と言ってよい。本人の祖父が牛潜より採集したことであった。牛潜は上野遺跡よりやや北東に位置するが、詳しい採集地点は分からぬ。底面に朱書きによる注記が見られるが判読できなかった。

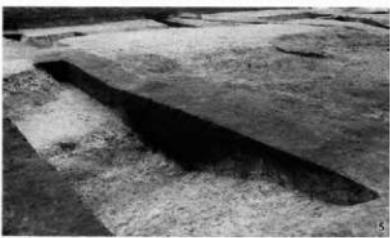
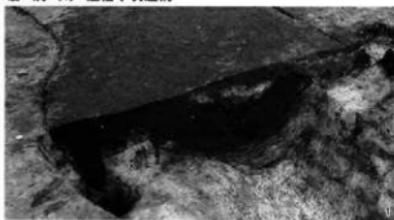
鮎川村内に7世紀末の遺跡が存在するのか、あるいはどのような経緯で伝わったのであろうか。同村にはほかに古代瓦をはじめとした同時代遺跡の存在しない遺物が複数伝わっている。謂れでは水田整備の際に塹を掘り起したところ出土したという。中世以降の宗教活動などが深くかかわっていたのだろう。



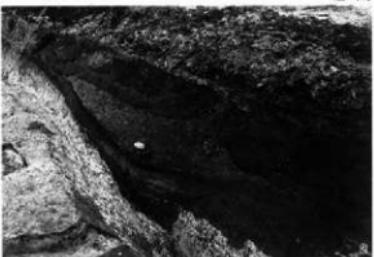
上：調査区中央部（北東から）、下：調査区南東部（南東から）



塙・溝・川・性格不明遺構



1 : 溝 S D72 (S 1 - S 1' 西側から) 2 : 溝 S D72 - 73 (S 2 - S 2' 東側から)
4 : 川 S G49 (S 4 - S 4' 北西側から) 5 : 溝 S D12 - 43, 川 S G49 (S 5 - S 5' 北東側から)
7 : 川 S G49, 性格不明遺構 S X53 (S 6 - S 6' 南側から) 3 : 溝 S D72, 川 S G49 (S 3 - S 3' 東側から)
6 : 溝 S D73, 川 S D43, 川 S G49 (S 6 - S 6' 南側から)
8 : 溝 S D 3 - 43, 川 S G49 (S 7 - S 7' 南側から)



1 : 堀SD43, 川SG49 (東から)

4 : 堀SD43 (S10-S10' 南東から)

7 : 堀SD12-48 (S13-S13' 北から)

2 : 堀SD43-172 (S8-S8' 北西から)

5 : 堀SD43 (S11-S11' 西から)

8 : 堀SD4-48 (S14-S14' 東から)

3 : 堀SD43-254 (S9-S9' 東から)

6 : 堀SD43 (S12-S12' 南東から)

堤・埋没谷



1 : 堤 SD 3・4B (S15-S15' 北から)

4 : 堤 SD 10・12, 埋没谷 SX214 (S18-S18' 南から)

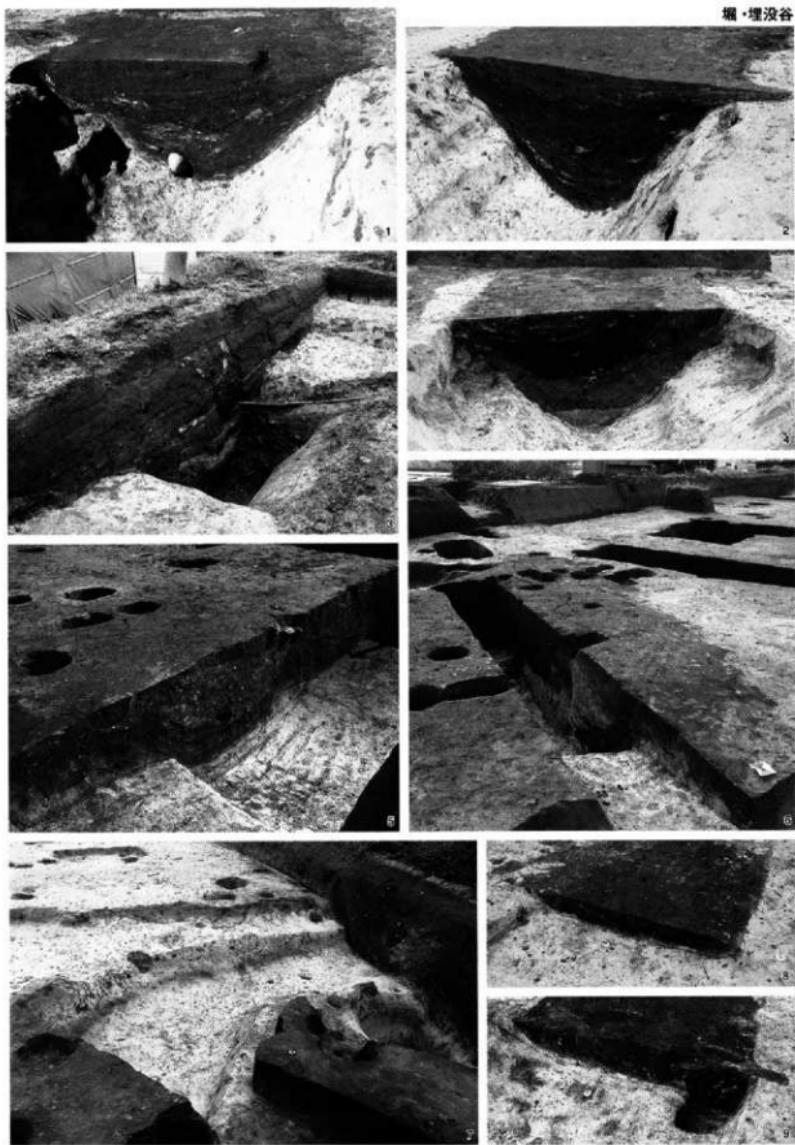
7 : 堤 SD 4, 埋没谷 SX214 (S21-S21' 西から)

2 : 堤 SD 12 (S16-S16' 北西から)

5 : 堤 SD 4・11 (S19-S19' 北から)

3 : 堤 SD 11・12 (S17-S17' 南西から)

6 : 堤 SD 4・10 (S20-S20' 南東から)



1:場SD 3 (S22-S22' 南から) 2:場SD 3 (S23-S23' 南から)

4:場SD 10 (S25-S25' 南東から) 5:場SD 10, 埋没谷SX214 (S26-S26' 北西から)

7:場SD 10, 埋没谷SX214 (S28-S28' 北面から) 8:場SD 142 (S29-S29' 南から)

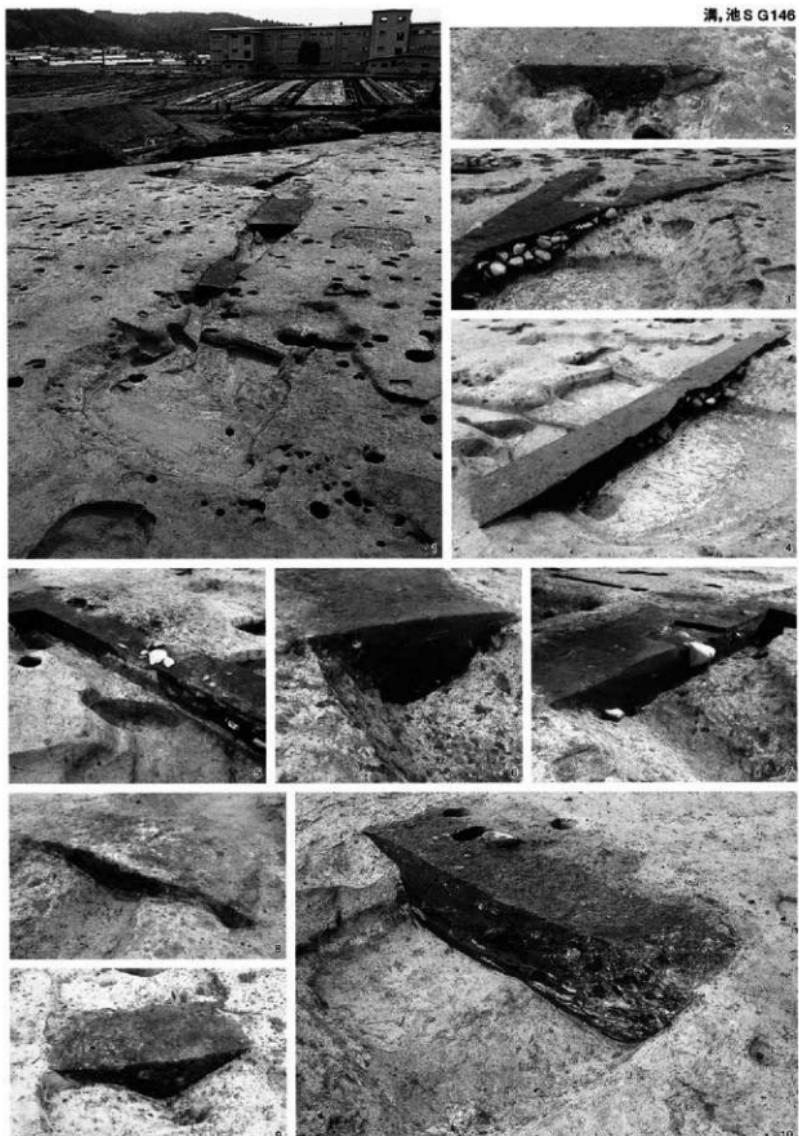
3:場SD 3 (S24-S24' 東から)

6:場SD 10, 埋没谷SX214 (S27-S27' 西から)

9:場SD 142 (S30-S30' 南から)



溝池 S G146



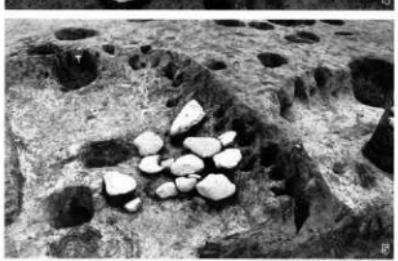
1 : 池 S G146, 溝 S D 2・112 (北から)
4 : 池 S G146 (S43-S43' 東から)
7 : 溝 S D 2・93 (S46-S46' 北から)

2 : 溝 S D 112 (S41-S41' 南東から)
5 : 池 S G146, 溝 S D 2 (S44-S44' 北東から)
8 : 溝 S D 93 (S47-S47' 南から)

3 : 池 S G146, 溝 S D 112 (S42-S42' 東から)

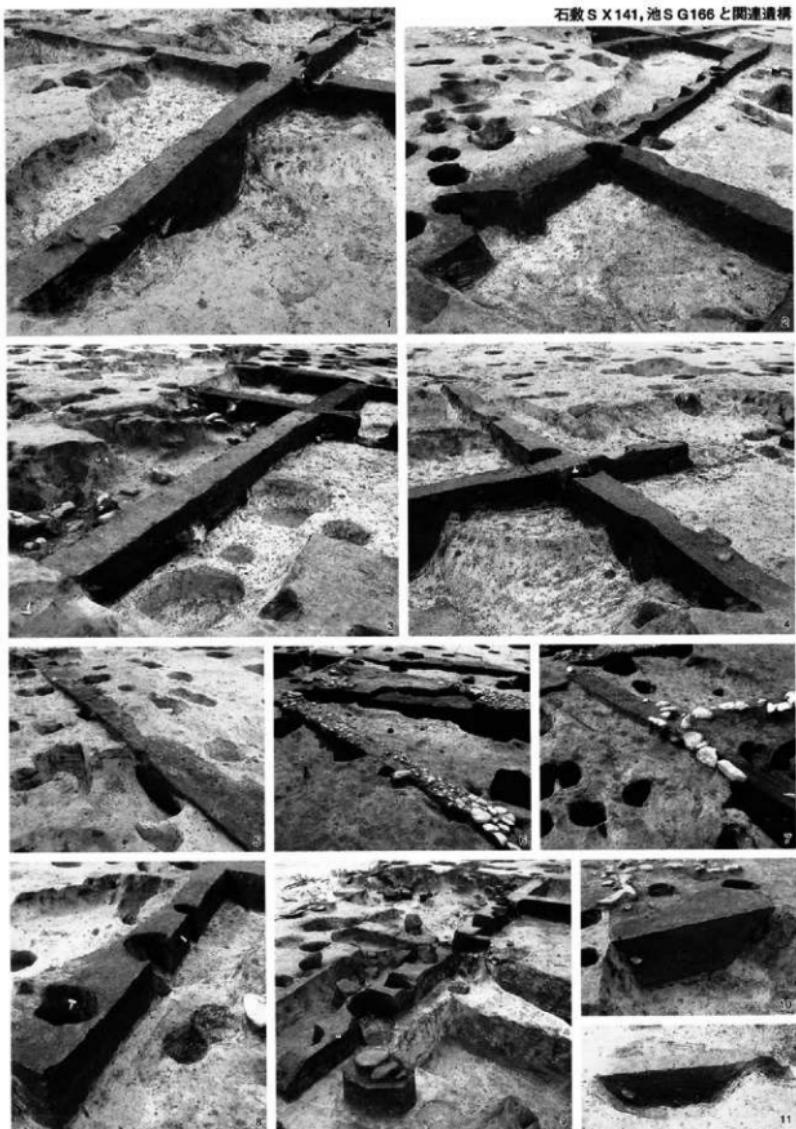
6 : 溝 S D 2 (S45-S45' 南から)
9 : 溝 S D 86 (S48-S48' 北西から)
10 : 池 S G165 (東から)

石敷 S X141, 池 S G166 と関連遺構



1 : 石敷 S X141, 池 S G166 (南西から)
2 : 石敷 S X141, 池 S G166 完掘 (南西から)
4 : 池 S G166 東岸 (南から)
5 : 池 S G166 東岸北側の石敷残存部と杭跡列 (西から)
3 : 池 S G166 東岸の石敷残存部と杭跡列 (西から)
6 : 土坑 S K251・252・253, 石敷 S X141 (b - b' 北から)

石敷 S X141, 池 S G166 と関連遺構



1 : 池 S G166, 清 S D194 (e - e' 西から)
4 : 池 S G166, 清 S D194 (j - j' 西から)

6 : 石敷 S X141 (c - c' 南から)
9 : 池 S G166, 穹穴建物 S T205 (h - h' 北から)

2 : 池 S G166 (g - g' 南東から)

5 : 石敷 S X141, 清 S D201, 土坑 S K255・256 (s - s' 北西から)

7 : 石敷 S X141, 清 S D194 (d - d' 北東から)

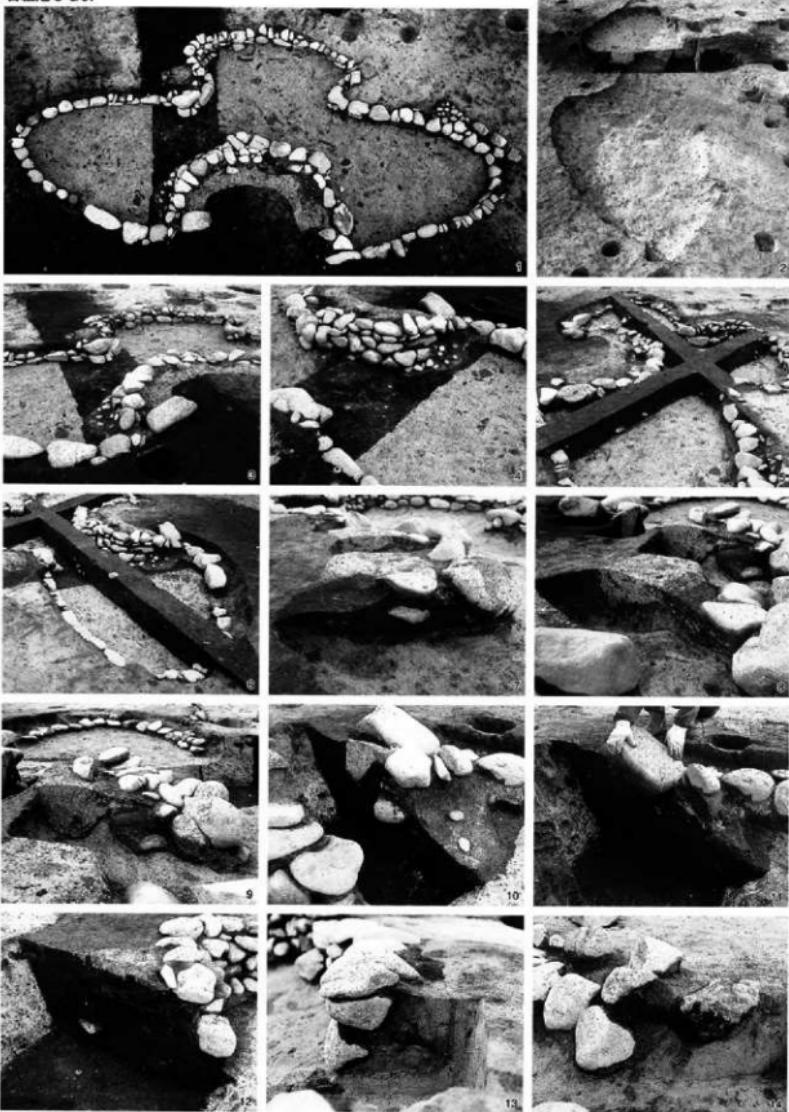
10 : 清 S D194 (k - k' 北東から)

3 : 池 S G166, 穹穴建物 S T199・200 (i - i' 東から)

8 : 清 S D201, 土坑 S K213 (f - f' 南東から)

11 : 土坑 S K207 (l - l' 西から)

石組池 S G37



1:石組池 S G37 (南西から)

2:複形窓塀 (南東から)

3:墳石 (南西から)

4:石敷残存部 (北西から)

5:覆土断面 (I-I' 南東から)

6:覆土断面 (J-J' 北西から)

7:断割 (a-a' 東から)

8:断割 (b-b' 南東から)

9:断割 (c-c' 東から)

10:断割 (d-d' 北から)

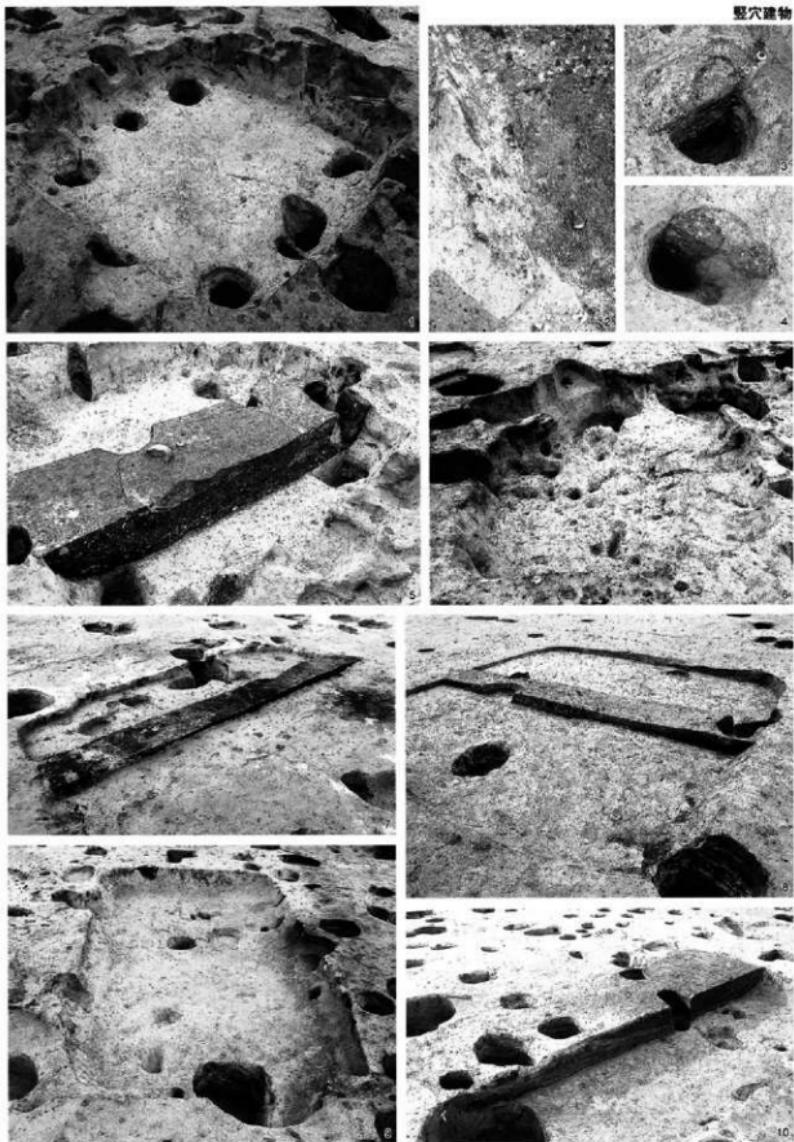
11:断割 (e-e' 北から)

12:断割 (f-f' 南から)

13:断割 (g-g' 南東から)

14:断割 (h-h' 南西から)

堅穴建物



1 : 堅穴建物 ST170 (東から)

4 : 杖穴 S P179 (ST170, 東から)

7 : 堅穴建物 ST180 (東東から)

2 : 形似 ■ 出土状況 (ST170, 南西から)

5 : 堅穴建物 ST170 断面 (北から)

8 : 堅穴建物 ST164 (北東から)

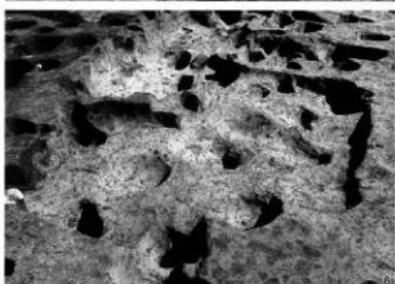
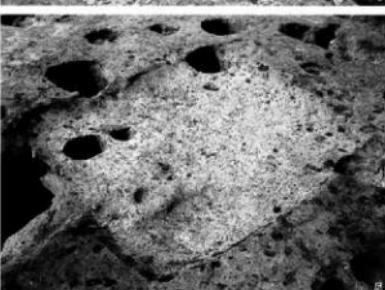
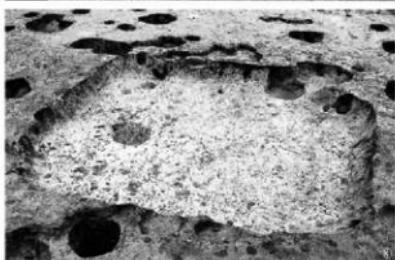
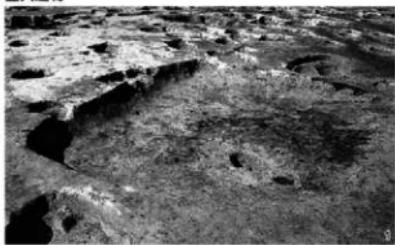
3 : 杖穴 S P150 (ST170, 南西から)

6 : 堅穴建物 ST167 (南西から)

9 : 堅穴建物 ST181 (南西から)

10

竪穴建物



1 : 竪穴建物 S T113 (南東から)

4 : 竪穴建物 S T129 (南西から)

7 : 竪穴建物 S T160, 石数 S K159 断面 (東から)

2 : 竪穴建物 S T113 断面 (南から)

5 : 竪穴建物 S T156 (東から)

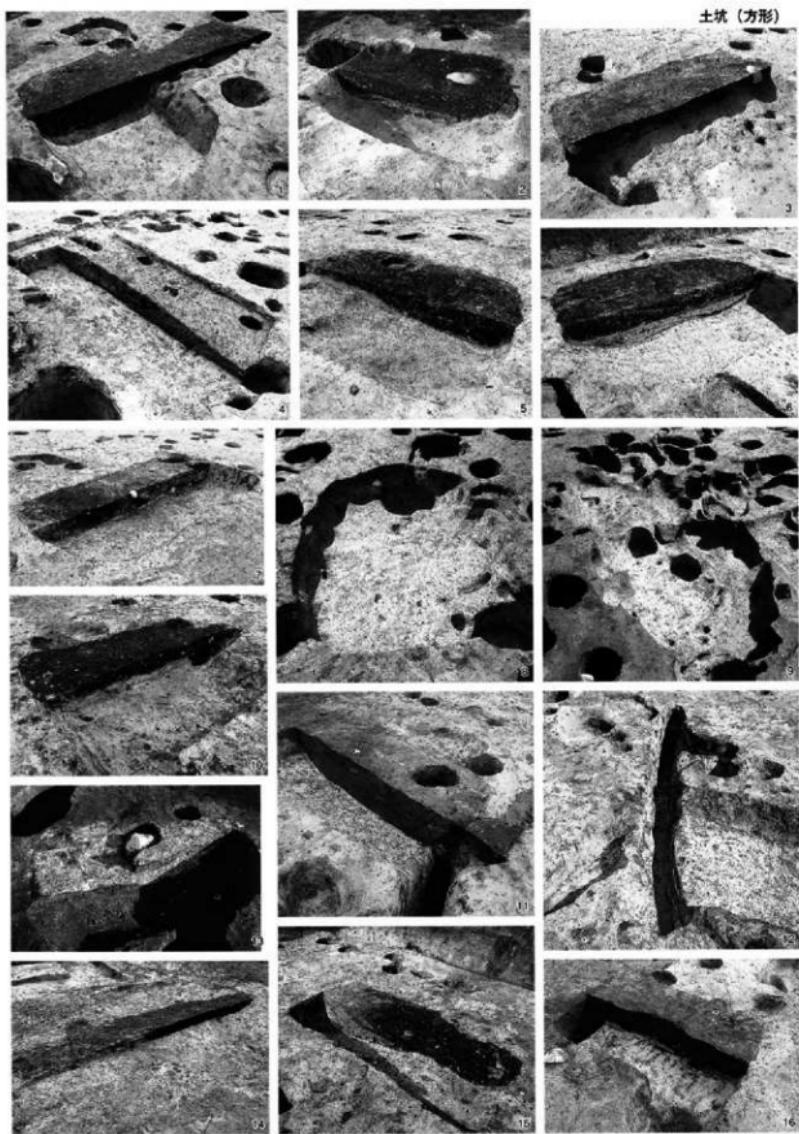
8 : 竪穴建物 S T175・176 (西から)

3 : 竪穴建物 S T129 (南から)

6 : 竪穴建物 S T160, 石数 S K159 (南西から)

9 : 竪穴建物 S T175・176, 石数 S X141 断面 (北西から)

土坑（方形）



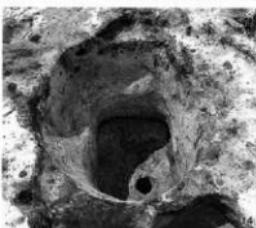
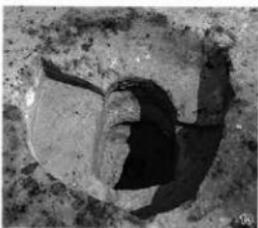
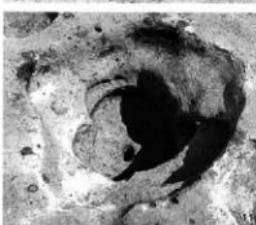
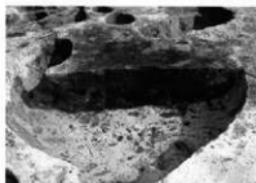
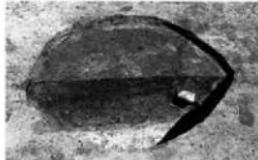
1:土坑SK30-31, ピットSP32(北から)
2:土坑SK106(東から)
3:土坑SK173-14(北西から)
4:土坑SK189(北西から)

5:土坑SK106(東から)
6:土坑SK107(西から)
7:土坑SK181(南東から)
8:土坑SK196(南東から)

9:土坑SK78(南東から)
10:土坑SK147(南東から)
11:土坑SK186, 溝SD187(東から)
12:溝SK187(西から)

13:土坑SK155(北東から)
14:土坑SK209(南から)
15:土坑SK215(北から)

土坑（円形）、竪穴



1 : 土坑SK 8 (南から)

5 : 土坑SK 105 (南から)

9 : 土坑SK 162・183 (南東から)

13 : 竪穴SK 33 (西から)

2 : 土坑SK 65 (北面から)

6 : 土坑SK 130 (南東から)

10 : 土坑SK 203 (南東から)

14 : 竪穴SK 35 (北から)

3 : 土坑SK 91 (南東から)

7 : 土坑SK 204 (南東から)

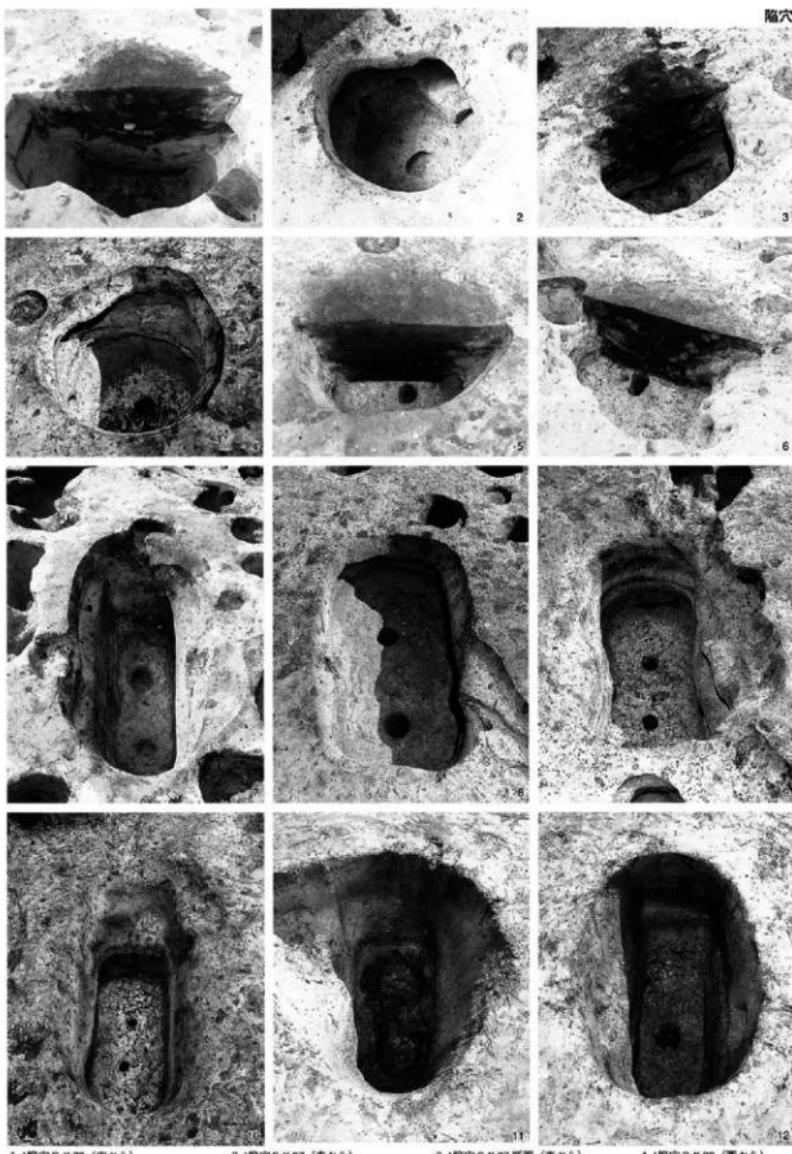
11 : 竪穴SK 7 (西から)

15 : 竪穴SK 77 (北東から)

4 : 土坑SK 104 (北から)

8 : 土坑SK 206 (東から)

12 : 竪穴SK 7 断面 (南西から)



1 : 竪穴SK79 (東から)

5 : 竪穴SK88 断面 (南西から)

9 : 竪穴SK157 (西から)

2 : 竪穴SK87 (東から)

6 : 竪穴SK137 (北西から)

10 : 竪穴SK169 (北西から)

3 : 竪穴SK87 断面 (東から)

7 : 竪穴SK89 (東から)

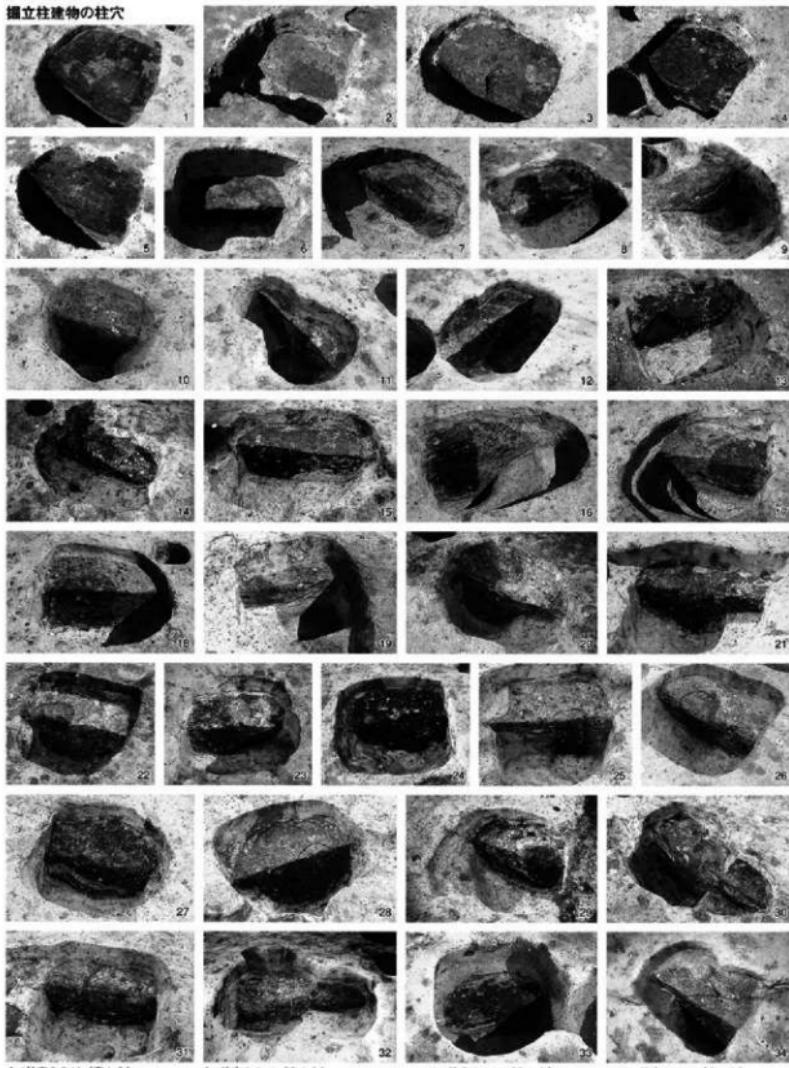
11 : 竪穴SK197 (北西から)

4 : 竪穴SK88 (西から)

8 : 竪穴SK144 (西から)

12 : 竪穴SK198 (北西から)

獨立柱建物の柱穴



1 : 柱穴 S P 13 (南から)

5 : 柱穴 S P 28 (南から)

9 : 柱穴 S P 102 (北西から)

13 : 柱穴 S P 109 (南西から)

17 : 柱穴 S P 52 (東から)

21 : 柱穴 S P 103 (北から)

25 : 柱穴 S P 128 (南東から)

29 : 柱穴 S P 138 (東から)

33 : 柱穴 S P 63 (西から)

2 : 柱穴 S P 18 (南から)

6 : 柱穴 S P 29 (東から)

10 : 柱穴 S P 60 (北西から)

14 : 柱穴 S P 116 (南から)

18 : 柱穴 S P 55 (南西から)

22 : 柱穴 S P 108 (北西から)

26 : 柱穴 S P 131 (西から)

30 : 柱穴 S P 139・140 (南から)

34 : 柱穴 S P 123 (東から)

3 : 柱穴 S P 26 (南から)

7 : 柱穴 S P 38 (北東から)

11 : 柱穴 S P 61・62 (北から)

15 : 柱穴 S P 148 (南北から)

19 : 柱穴 S P 56 (南西から)

23 : 柱穴 S P 115 (北西から)

27 : 柱穴 S P 135 (南西から)

31 : 柱穴 S P 151 (東から)

4 : 柱穴 S P 27 (南から)

8 : 柱穴 S P 39 (西面から)

12 : 柱穴 S P 100・101 (東から)

16 : 柱穴 S P 51 (南西から)

20 : 柱穴 S P 68 (南から)

24 : 柱穴 S P 117 (南東から)

28 : 柱穴 S P 136 (北東から)

32 : 柱穴 S P 122・124 (東から)

報告書抄録

ふりがな	うわのいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上野遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第149集
編著者名	水戸部秀樹 渋谷純子 阪英子 高桑登
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301
発行年月日	2006年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うわのいせき 上野遺跡	やまとたけん 山形県 もがみぐる 最上郡 さけやわら 鮭川村 おねあざきとうづか 大字京塚 おぎうわの 字上野	6366	平成14 年度登録	38度 49分 47秒	140度 14分 29秒	20040818 ~ 20041013	7,000	県営ほ場整 備事業鮭川 左岸地区

種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館 狩獵場	縄文時代	陥穴	15	繩文土器 石器		15世紀から16世紀前葉の 館のほか全体を調査した。	
		掘立柱建物	78	懸仏	鏡	池・石組池・石壺などの存 在から庭園を有していたと 考えられる。 (文化財認定箱数: 15箱)	
	中世・近世	竪穴建物	14	甕	墓石		
		堀	17	漆器	古錢		
		池	3	陶磁器	砥石		
		石組池	4	石鉢	茶臼		
		石敷	1	釘	鐵製品		
		溝					
		土坑					

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第149集

上野遺跡発掘調査報告書

2006年3月28日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 (023) 672-5301

印刷 株式会社 アサヒ印刷
〒990-2251 山形県山形市立谷川2丁目486-14
電話 (023) 686-4331

